
メフィストの夢

レイアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メフィストの夢

【NZコード】

N8968V

【作者名】

レイアン

【あらすじ】

人は定められた運命に逆らうことはできない。

どうしても、俺は抗いたかった。

大切な人が死ぬという一つの運命に。

だから、誓った。

メフィストになるのだと。

プロローグ 一人の男の物語

辺りは静寂で満ち、満月に、照らされていた。だが、そんな場所も、一つの雲が風によつて流れ、月を隠すことによつて、すぐに、暗闇が支配する。

風は強く、雲はすぐに流れしていく。そして、雲によつて隠された月は、再び辺りを照らしていく。

すると、そこにはさきほどにはなかつた一人の男の姿があつた。その男の顔には、何か激戦でもあつたのだろうか、縦に入つた一筋の傷があつた。そして、黒く艶やかな短髪をしていて、服装はというと、タキシード姿で、武器といえそつなものは、腰に一本の刀のみというものだけであつた。

男は、現れてから一步たりとも、足を動かすこともなく、その場でずっと静止し続けていた。まるで、昔からそこに存在する石像のようだ。

どこからどうやって、そこに現れたのかはわからない。だが、俺にとつて、そんなことはどうでもよかつた。

俺はそいつを知つてゐる。いや、知つてゐるでは済まされない関係だ。

『終焉の騎士』

やつはそう呼ばれていた。その名の由縁は、そいつが現れた街は、すぐに破壊され、人々は殺される。街だつたと思われる跡しか残らない。そう、街に終焉を与えるのだ。

そんな男が俺の目の前にいる。それは、俺に死の予感を与える、とてもない恐怖に襲われる。

だが、それでも、俺はそれに必死に抗い、恐怖を心の奥底まで沈める。

そして、しばらく俺とやつはお互いの隙がないかの探りあいで沈黙していた。だが、その永遠に続くと思わされたその沈黙を破つたの

は男のほうだった。

突然、男の今まで一步たりとも動かさなかつた足は動き出す。

初動のない突然の動きに驚きはしたものの、俺は自分の身長ほどある剣をすぐに構え、男の初撃をガードしようとする。だが、剣を構え終わつたころには、もう目の前まで迫つてきていた。

俺と男の距離は最初はかなり長いものであつたため、最初はそこまで警戒していなかつた。俺は、剣の方は心得ている面があつて、世の中では迅速剣士とまで、呼ばれるほどのものだつた。

ゆえに、男と少し離れているから俺なら大丈夫だと、少し自分を過大評価していたのかもしれない。だとしても、ひとつだけいえることがある。男のスピードは恐ろしいものであるということだ。

そう、迅速剣士とまで呼ばれた俺が剣を構えるのにかかる時間なんて、はつきり言つて皆無だ。それにも関わらず、男はここまで距離を詰めてきた。そんな男の脅威のスピードに俺は息を呑む。

だが、俺も驚いてばかりはいられない。

剣を迅速とまで呼ばれるほどの自慢のスピードで振り下ろす。

しかし、その男は不気味な笑いを浮かべながら、軽々と俺の振り下ろした剣を避けてしまう。

だが、俺はそれでは終わらない。

内ポケットから銃を取り出すと、避けた方向へ一発、それを避けた際の逃げ道を塞げるよう、少し時間をずらしてから、各方向に一発ずつ撃ち込む。その後、銃を即座にホルスターにしまうと、剣を大きく振り構えた。

すると、その男はやはり不気味な笑いを浮かべつつ、俺をあざ笑うかの「」とく全ての銃弾を避ける。

避けるが、さすがに、俺の大振りは避けきれないと判断したらしく、腰にぶら下げていた刀に手をかける。

勝つた。そう思った。

あのスピードで刀に手をかけたのであつたら、確實に俺の剣は防げないからだ。

しかし、男は俺の予想の遙か上を行く。

刀を抜いたのが見えなかつた。抜いたといつて気に気がつけなかつた。そう、剣と刀がぶつかつて初めて気づいた。

剣と刀のあまりに大きい力が衝突したことによつて、空氣や地面までもが振動し、金属音が響き渡る。

俺は男の細い刀身の刀なら、この一撃で粉碎、どんなに悪くても、ひびが一つくらいは入ると思っていたのだが・・・。男の刀は粉碎やひびが入るどころか、傷一つもつかなかつた。

それどころか、こんな細い腕のどこにこんな力がと思わせるような力で俺の剣を押し戻そうとさえしている。

さすがの俺もこれには絶句する。

まずい、俺はそう思う。なぜなら、俺は全力だつたのだ。

こいつは一体何だ。こいつは俺の攻撃完璧に避けるし、完璧に防御する。おそらく、いまだに、少しだりともダメージが与えられていなかつる。

はつきり言つて、化け物だ。

俺も自身のことは化け物だとは思つてゐる。だが、それなんかの比にはならないほどの力をこいつには感じた。

そうだとしても、こんなやつに敗北するわけにはいかない。俺は彼女のためにしなければならないから。

俺は、久々に自身が編み出したなかでも最速の剣技を使うことを決意する。それは、俺が迅速剣士とまで呼ばれるようになつた由縁でもある技だ。

「俺はあんたを甘く見すぎていたようだ。今までも全力だつたが、迅速という名の由縁見せてやる。」

すると、男はクックと俺を嘲るよつて、笑うと言つた。
「迅速の名の由縁を見せる?それは俺を倒すつてことか?笑わさせてくれる。貴様風情にそんなことができるなどと、いきがるなよ。この口ぶりからして、こいつはまだなにか策があるようだ。いや、違うな。俺がやつの本気を引き出すことができていないんだ。だが

ら、こんなにもこいつは余裕なんだ。

そして、俺がやつについて分かつことは一つ。やつは体力や剣技は、太刀打ちなんてできるようなものではないといつひとぐらいだろつ。

俺が本気の一閃を振り下ろし始めたそのときであった。

それは、本当に一瞬のことだった。

俺の上を腕が飛んでいる。よく見ると、それは左腕。

その後、すぐに、激痛が走る。そう、飛んでいる腕は俺のものであつたのだ。

心臓から左腕に送られる予定であつた血が流れてくる。だが、左腕はない。行き場を失つた血はその勢いのまま空氣中に流れ出て、地面に血の海を作り出す。

「まずい、まずい、まずい。本当にまずいぞ。」

突然の腕の消失に、痛みで我を忘れそうになるのを必死にこらえる。そして、思考をすぐに戦いに戻す。それでもしないと、俺に待つのは死のみだから。

俺は一旦、男との距離をとるために、後方へバックジャンプする。だが、これはこいつに対しては正直言つて、無駄な策だろつ。こいつの異常なスピードはさつき経験している。

だとしても、俺は考えなければならない。例え、余裕がある時間が一瞬であつたとしても。

考えるのをやめてしまつて、負けを認める。やつしたら、最後。俺はは死ぬだろう。

だが、そうはいかない。左腕のない今となつてはあの剣技は使えない。だとしたら、どうすれば、勝てる？

俺は思考を止めない。さつきからこいつと戦つていて、こいつには策という策が通じないということが分かつた。それならば、真っ向勝負で戦つたほうが、まだ、勝つ確率はゼロではなくなるはずだ。そうすれば、まだ、勝機はあるかもしれない。

地面に着地すると、不規則なステップで、男の懷に踏み込む。

そして、振り構えた剣で力を込めた斬りを男に向かって放つ。

だが、俺の剣が男の腹に触れることはなく、剣の片割れが宙を舞う。

「うそ・・・だろ・・・。」

意味が分からぬ。

まさか、やつは俺の斬りを受けずに、一瞬で刀を使い、俺の剣を破壊したとでも言うのか。

こんなことがあっていいのか？こいつは何だ・・・。

俺はこんなやつに勝てるのか・・・一瞬だけそう考へてしまう。だが、すぐにそんな思考を止め、ホルスターにしまった相棒を取り出し、構える。

残された弾は一つのみ。

つまり、これが外れれば、俺は死ぬだろう。

しかし、この最後の一弾は特別だつた。

魔法効果を附加しているタイプの相当レアなものであつたからだ。

しかも、追尾、硬化の二つの種類が附加されたタイプ。

普通はあつたとしても、一種類の魔法が附加されているだけだ。なぜなら、銃弾に二つの魔法を附加すると、お互いが反発したり、気が合わないのか知らないが、魔法自体がどちらも自壊してしまう。しかし、これはそれを防ぐために、長い月日をかけて魔法を附加させていったのだ。そう、徐々に魔法と魔法を同調させていったのだ。それも、一流の魔法使いが。

そうして、出来上がつたこの銃弾なら、この絶望的な状況だろうとしても、変えてくれるはずだ。

俺は引き金を引く。

銃弾は男目掛けて一直線に飛んでいく。男に直撃する、そう思つたそのときだつた。

突然、男は消える。

銃弾はさつきまで男がいたところを通り抜けると、上へ向かつた。上を見上げる。すると、やつはいた。どうやって、一瞬で移動したかは分からぬ。

だが、これで、かたがつくはずだ。俺は少し安心した。

しかし、またも、有り得ないことが俺の目の前、空中で起こった。あの硬化の魔法を附加しているのにも関わらず、銃弾がやつの刀によつて、真つ二つに分断されたのだ。

銃弾を真つ二つにすると、男が突然消える。

そして、俺の体は上半身と下半身が分断され、宙を舞う。

どうやら、俺はやつによつて、体を真つ二つにされたようだ。

プロローグ 一人の男の物語（後書き）

どうも、初めまして。
レイアンと申します。

メフィストの夢、連載させてもらおうと思います。

この物語は、あらすじにあつたよひ、「一つの運命に抗う一人の少年の物語です。

少年は時に苦しみ、悩んでしまうこともあります。それでも、前に進んでいく、そんな姿を見守っていただけるといいなあと思います。とは言え、プロローグでは全然何がなんだか分からぬと思います。サブタイトル通り、このプロローグは、一人の男の物語として、ある程度、独立しています。

ですが、無論、後に、関わりを持つ話となっています。

それが、深い意味を持つのか、軽い意味しか持たないのか、それは読んでみて、お楽しみです。

最後に、このメフィストの夢、お楽しみいただければ、うれしいです。

これから、よろしくお願ひします。

少女との出会い

俺の目の前に一人の男が現れた。
普通の人間ではない、一見してそう思った。

年は五十から六十の間だろうか、顔に刻まれたしわ、顔の至るところにある傷、開くことがあるのだろうかと思わせるようなきつく閉められた口、そして、スキが全く見当たらない構えから、激戦を潛り抜けてきたのが、うかがえる。

そして、俺が普通じゃないと思う理由は簡単だ。こいつがさっきから放っている殺氣は恐ろしく、一般人だつたら、目の前に立たれただけで、すぐに縮み上がるようなものだからだ。

ついに、この殺氣漂う男はその固く閉ざされた口を開き、「深紅に染まつた短髪。強い決意に満ちた金色の瞳。そして、比較的、背は高く、後ろには自分の身長ほどあらうかと思われる一本の剣を背負っている。そうか、お前が最終選考試験まで進んできたクレイデスか？」

「俺がメフィストの最終選考試験まで進んできたクレイデスです。よろしくお願ひします。」

と丁寧に言つが、まるで興味などないよに、彼は話を続けてきた。「貴様の受ける最終選考試験はいまだに誰も踏み込んだことのない未開の場所の地図を完成させることだ。一週間後にここに来い。そして、今回の最終選考試験ではお前以外の一般人の仲間とともに行くことを許可をする。」

メフィストの最終試験らしい課題だと思つ。

メフィストは今となつては、独自の魔法を使うといふことで注目を集めているが、もともとは測量士なのだから。

しかし、いつたい、何故今まで許可されるよつなことがなかつた一般の仲間を連れることが許可されるよつになつたんだ・・・?
しかし、俺には分からぬ。

ゆえに、俺は、聞く。

「何故今になつて、仲間を連れることを許可した？」

男は無表情なまま、言った。

「理由は簡単だ。未開の場所に単独で挑むバカがどこにいる？何が起こつてもおかしくない。しかし、仲間がいるからこそ、対応できることもある。それだけだ。あと、最後に聞いておく。この試験で、命を落とすかもしれない、覚悟はできているか？」

とその男は言つた。俺はいつになく真剣に考える。ここで進むことを決めれば、もしかしたら生きて帰つたとしても、なにか障害でもかかえてしまい、もう昔のような生活はできなくなるかもしない。そして、死ぬ可能性すらあるのだ。

死んだら、俺のやらねばならないことをやれずに終わってしまう。だが、それでも、俺は進む。もう後には引けないから。もう、色々なものを持ちにしてきていいのだから。

そして、俺は言った。

「行つてやるさ、そして、メフィストになつてやる。」

男は俺の答えを聞くと、

「では、一週間後に。」

と一言だけ言つて、その場から消えた。なにも、魔法も詠唱するわけでもなく、消えた。まるで、そこには、誰もいなかつたようだ。

「つたぐ、まじでメフィストってのは化け物かよ。」

そして、俺は考える。これから一週間で何をすべきかを。

未開の場所でどうすれば、地図を完成させられるか、そして、仲間を連れて行くかどうか。考へるべきことはたくさんある。時間が足らない。

しかし、これでようやく、未来の歯車が、ようやく、かみ合ひ始めた。もうすぐだ。もうすぐで・・・。

まずは、未開の地に行く上で生き延びるために手立てを考えなければならぬ。俺は近くにあつた椅子に座り込み、考へ始めた。

そのときのことだった。俺の目の前に一人の少女が立っていた。

透き通るよつにきれいな黒色の長髪に、透き通つたクリアブルーの目、そして、おれと変わらないくらいの身長。面倒見がよさそりで、優しそうな顔立ち。

「マリア。

昔から変わらない幼馴染のすがたがそこにはあつた。

彼女と出会つたのは、俺が十三歳になつた年の夏。

俺は、いつものように森に行つて修行をしたり、木の実などを採集したり、鹿などを追つてはとらえたりしていた。

そしたら、突然上から、

「落ちる——。危な——。」

と声が聞こえてきたが、その声が聞こえてきたのはどうやら本当にぶつかる直前だつたらしく、俺の頭に空から降つてきた女の子が直撃した。

「ぐはっ。」「

俺は突然の上からの衝撃で、ふらつく。

だが、どうやら、女の子は無傷のようだつた。その女の子は黒髪の長髪できれいだつた。

よつほど高いところから落ちてきたのだひつ、気を失つている。

どうしたものかと少し迷つたが、さすがに、こんな場所に一人の少女を放つておくわけにもいかなかつたので、とりあえず、俺は俺の家までその女の子をかついでいくことにする。

かついでみると、思ったより、重くはなかつた。一人の少女としては、これが平均ぐらいの重さだと思う。だが、実際にどうなのかは人を持つたことがこれが初めてなので、わからない。

俺は歩きながら、かついでいるのが、少女だと考へると、何とも言えぬ恥ずかしさがあつた。

これが人目がない森の中であつたのは、良かつた。

家からこの森まで十キロは最低でもあるので、俺と同い年くらいの女の子をかついで運ぶなんて、俺みたいに鍛えているようなやつじやなかつたら無理だろう。

そう考えていると、何故こんなところに、という疑問が浮かぶ。

俺のように、修行しているようなやつには、見えないし……。

そんなことを考えているうちに、もうすぐで森を抜けられる位置まで来ていた。

そして、森を抜けようとしたところで、木陰に潜む何かの気配に気づく。

「一体なんだ。」

俺は瞬時に警戒態勢に入る。集中して、目を閉じる。自分の耳以外の感覚を停止させる。そのかわりに、全ての感覚を耳にあてる。たとえ、木陰に潜んでいたとしても、呼吸はしている。風や無視などの鳴き声に混ざる呼吸というイレギュラーな音を探す。

まずは、一つ。これは、おそらく、人間の呼吸音。

潜んでいるのは、人間。まあ、だいたい、山賊とかその辺のやつらだろう。

問題となるのは、数だ。

俺は耳の感覚をもつと鋭く研ぎ澄ます。

一、四、六、八……。

合計三十の人気が木陰や、地面の下に潜んでいる。

まだ、その山賊と思われる集団はこちらに気づいていない。なら、チャンスだ。

耳に集めていた全ての感覚を、元の状態に戻し、目を開く。

そして、次は体中にある細胞に火を灯す。そんな感覚の魔法の詠唱を始める。その魔法は、俺が編み出した中でも、お気に入りのものであつた。なぜなら、森と家とをかなりの短時間で行き来することが出来るからだ。

だが、今回はそれは使えなかつた。

使つたまま、一人の少女をかついで行ける自信がなかつたからだ。かといって、このまま使わずに突破は不可能だ。ならば、使って相手を倒せばいい。

そして、俺は体中の細胞が活性化したのを確認し、前に進む。俺が

近づいてきたのに、気づいてから、木陰などに潜んでいたやつらは出てくる。それぞれが斧や短剣といった武器を持った俺の予想通り、山賊だった。

そんな武器は俺に対しても意味あることを彼らは知らない。無論、山賊なんかには、俺の速度に付いてこれるやつがないからだ。次々と、目の前の山賊をなぎ払っていく。その俺の脅威のスピードに山賊たちは驚愕して、逃げ出そうとする。

「てめえら、こんなガキ相手に逃げたら、あとで、どうなるか、分かつているよな？」

リーダー格らしき男がそう告げる。すると、今にも逃げ出しそうだった山賊も、恐怖によつて、狂つたように襲いかかってきた。だが、そんなでたらめな攻撃は俺にあたるわけがない。

すぐに、そんな山賊たちを地面に積み上げる。

最後のリーダー格が残るのみといったところで、体がだいぶ疲労してきていた。

魔法で細胞を無理やり魔法で活性化させているだけなので、細胞自体は変わつていないので、激しい消耗になるので、あたりまえなわけだが。

「あなたの部下、まだまだだなあ。」

「ああ、そうだな。この部下たちは、てめえを殺してから、仕置きが必要だな。」

残っているのが、やつ一人だと言うのに、余裕の笑みは消えない。

「何故、そんなにも余裕なんだよ。まさかと思うが、この状況で、俺に勝てるとも、思つてゐるのか？」

「ああ、勝てるさ。」

そう言つて、男は動き出す。そして、大きく鉄槌を降り構えると、俺に向かってたたきつける。

今までどおり、避けてみせる。

重く、鈍い音が俺の顔のすぐ横を通り抜ける。

そして、地面に鉄槌がぶつかるとつもない音がして、思わず横を

見る。

「地面がえぐれて・・・いるだと。」

あまりの驚きに声を出してしまつ。おやりく、あれを喰らつたら、まず、原型は残らないだろう。

「とんでもねえ、怪力だなあ、おい。」

それにこの命中精度。次は避けられるかは分かつたもんじやない。だが、あの槌に注意していれば、大丈夫なはずだ。だが、そう思った矢先、そいつの蹴りが俺の鳩尾に対して、入り込む。

「ぐはっ。」

あまりの威力に、吹き飛ばされる。そして、轟音とともに、樹に激突した。

全身にはしる激痛により、氣を失いそうになる。

そんな俺の目の前一人の少女が立つ。

木に寄り添わせて寝かしておいた女の子。空から降つてきた少女。彼女は、俺の知らない魔法を唱えていた。

なにやら、よくわからない煙が充満していく。

それを吸つてしまい、突然、俺は急な眠気に襲われる。

意識がどんどん遠のいていく・・・。

そして、俺が深い眠りに落ちようとしていたちょうどその時。

「起きる――――――！」

と耳元で突然叫ばれた。

俺はその叫び声で起こされはしたが、あまりの声のでかさにぼうく耳鳴りが続く。

「声でかすぎだろ、俺の耳の鼓膜をつぶすつもりか、アホが。」

と思ったことを素直に言つてやつた。すると、女の子はむすつとし、俺に極限まで顔を近づけて言つた。

「だれがアホなのかな。よくわからないなあ。まあ、もし、もう一度言つたら、炎の魔法で丸焼きつてことで。」

と顔はにつこりとしていて、笑つているが、目が笑っていない。て

か、言つてることがすさまじいだろ。丸焼きつてオイ。

俺はは素直に謝らなければ、まじめに丸焼きにしてきそくながらい殺氣を放っていたので、素直に謝ることにした。

「アホなんて言つて、すまなかつた。なんども言つことを聞くからゆるしてくれ。」

このとき、おれは思った。なんで、俺、出合つたばかりの女の子に謝つてるんだろ、そして、無力だなあと。

「わかればいいのです。何でもするの?じゃあ、私は疲れたから、私をかついで、両親が今行つているガイアスつて人の家まで連れてつて。」

とりあえず、なんとかこの女の子の機嫌を取り戻すことに成功したようだ。

まったく、ひやひやさせてくれる。

てか、ガイアスつて俺の親父の名前じゃねえか。そういうや、今日は客が来るつて言つてたような・・・。

「ガイアスは俺の親父だから、そこまでの道なら、行き慣れているから、あと二十分ぐらいで着くことができると思つ。そういうや、自己紹介がまだだつたな。とりあえず、俺の名前はクレイデスだ。お前は?」

「私?私はマリア。君はクレイデスつていうんだ。でも、なんかクレイデスつて言いにくีなあ。」

そう言つて、なにやら考え始めた。

「うーん。」

何を悩んでいるのだろうか、。名前だつたら、そのままクレイデスと呼べばいいではないか。

「そうだ、これから君の事クッスーって呼んでいい?クレイデスを略してクッスー。いい感じのニックネームでしょ?」

驚いた。俺に対してもんなふうに接してきたやつは初めてだ。

俺は普段、修行してばっかだから、人とあまり接することはなかつた。

それゆえに、人と話したとしても、話があつことはなかつた。それだけなら、良かつた。

俺は一般的の闘技大会に出て優勝してきたことがあつた。その出来事によって、俺の孤独は加速しいつた。そう、親父とかその大会の主催者にはいいように思われた。だが、俺の近くにいる他のやつらの中には、強さを恐れたのか俺を避けるようなやつも出てくるようになった。

そう、俺は一般の人より強くなつていつたことにより、孤独になつてしまつたのだ。

力がありすぎたが故に、人から恐怖の存在として見られた。俺は、思わず聞いた。

「俺の強さを見て、まだなお、俺が怖くないのか？」

マリアはすぐ答えてきた。

「何が怖いの？ 強いっていうのは素晴らしいことだと思つよ。だってさ、強ければ大切な人を守ることができるじゃん。」

と一言言つてきた。

俺は、人から避けられるようになつてからといつもの、今まで以上に修行に没頭していつた。

それは孤独をまぎらわそうとしていたからかもしれない。

でも、今のマリアの言葉で、俺が修行を始めた理由を思い出すことができた。

それはそう、おばが盜賊に襲われたとき、おばは俺をクローゼットの中に隠れさせた。そして、山賊と戦つて死んだ。

俺に出来たのは、死にゆくおばに対してもすることができず、ただ、クローゼットの中で、震えていることしかできなかつた。

俺はそのときの自分の無力を悔やみ、修行を始めたのだった。そう、力は大切な人を守るためにあるのだ。

それが、人から恐れられるようなものであつたとしても。

「マリア、ありがとう。俺は大切なことを忘れていた。君のおかげで思い出すことができた。これからもよろしくくな。」

「ええ。そして、私が気を失っている間、私を山賊から守ってくれてありがとう。これからもよろしくね、クッスー。」

それから俺たちは家に帰るまでの道のりで、連絡先を交換し、マリアを両親のもとに帰らせた。そして、マリアを帰らせた後、親父に聞いた。

「おばが死んだときの記憶が、マリアに声をかけられるまで、消えてていたのは、何故だ？」

親父の表情は急に深刻なものに激変した。

「思い出してしまったか。なら、仕方がないな。言つておく、今から言つことは全て真実だ。心して聞けよ。お前がおばの死に関する記憶を失っていたのは、おばがお前にかけていた魔法の効果だ。おばは自分自身が早く死んでしまうことがあって、幼いお前を悲しませるというふうにはしたくなかった。それゆえに、おばは、自分が死んだ場合お前の記憶から自分の存在していたという事實を消し去るような魔法をかけていたんだ。しかし、おばは言つていた。お前は特別な子だと。おそらく、この魔法をかけたとしても、この子の持つ特別な力によって、完璧な記憶の消し去りに失敗するかもしれない。そのときは、サポートまかせたよ、と言つていた。確かにお前に特別な力があるのは、実際俺が確認できだし、知つている。今わかっているお前の能力は、魔法の効果を弱める、または消し去る、吸収するといったことが無意識のうちにできるということだ。おそらく、この力がおばの魔法の効果をやがめたのだろう。そして、今になつて、そのおばがお前にかけた魔法の効果を全て消し去つたのだろう。」

「そう・・・だつたのか。ありがと。じゃあ、もう今日眠いん寝室る。おやすみ、親父。」

そう言つて、俺は逃げるよつてリビングを離れ、自分の部屋に入り込んだ。

そして、木製のベッドに寝転がつた。寝よつとはしたが、眠ることはできなかつた。

それはそうだろ？

おばが死んだことに關する記憶が消えていたことについて聞いたたら、予想外の答えが、返ってきたのだ。

俺に特別な力が宿っている。

それだけのことだとも思いもするが、やはり重要な気がする。

でも、何故だ。何故俺にこんな魔法を打ち消すという力が宿つているのだ？

しかも、無意識で発動するようなものだつて？

俺はいつたいなんなんだ？

そうして、考え続けている間に自然と俺は眠りについていた。

そして、次の日の朝、自分の能力について調べるため、俺は、ハイデア王立図書館に向かつた。

図書館なんて入るのはこれが初めてだつた。自分の周りに見えるのは本、本、そして、本だつた。

「こりや、参つたな・・・こんだけ本があつたら、俺の求める本にたどり着くまでどれだけかかるんだよ・・・」
と意氣消沈している時だつた。

昨日、空から降つてきて、色々あつて俺と友人となつたマリアに出会つた。

「やあ、マリア。」

「ん、あつ、クツスーじゃない。おはよー。」

どうやら、クツスーというあだ名は決定のよつだ。まあ、別にいやといつわけでもないから、気にはしない。

「マリア、よくここに来るのか？」

「ええ、よくつていうか、最近は毎日来てるわね。この図書館は王立といつこともあつて本の数も多いのよねえ。」

「じゃあさ、聞きたいことがある。えつと・・・」

どう聞いたら、いいものか迷つた。俺に特別な力があることについて話しても良かつたが、まだこの能力について確信がなかつたから、話そうにも話せない。

さらに言つと、もしかしたら、おばは俺の能力について知つていて何者かによつて殺害されたのかもしれない。

なぜか俺はそう考える。俺の勘がそう言つている。

それが本当だつた場合、これを話したら、彼女を巻き込んでしまうと思つたのだ。

「ん、何？もう少し大きな声で言つて。」

「えつとさ、俺、最近魔法について勉強してるんだけど、うわさで、魔法を吸収したり、打ち消したりする魔法があるって聞いたんだけど、それに関する本がどこにあるか知らない？」

「魔法を吸収する魔法？珍しい魔法だね。うーんと、魔法を吸収する系の魔法はたぶん、こつからまつすぐ行つて、一番目の棚の奥で左に曲がつて、三つ進んだとこを右に曲がつて、左手のとこに確か一、一冊あつたはず。でも、魔法を打ち消すなんて聞いたことがないなあ。いや、ちょっと待つた。そういうえば、どつかの英雄の話に出てきていたわね。確かに本の名前は、・・・『剣王と悪魔』だったと思つ。それはさつき言つたところから、まっすぐ行つて、二番目のところを右に曲がつて、十番目のところを左に曲がつたところの右手にあつたはずよ。」

「そうか、ありがとう。マリア。助かったよ。じゃあな。」

「じゃあな、クッスー。」

そして、俺はマリアに指示された通りに進んでいった。

それにしても、すごい記憶力だ。

こんな広い図書館にある本の位置を記憶しているなんて。俺には絶対無理だ。

そんなマリアの記憶力に感心しつつ、俺は『魔法吸収学専門書』という、いかにもつて感じの本を見つけ、読んだ。

どうやら、魔法を吸収する方法は三つだといつ。

一つ目、もともと属性吸収の体質をしている、または装備や魔法をしている場合だ。この場合に関しては、火や水などの属性によっては吸収できるのがあつたり、弱点となつていてる。属性がある魔法じ

やないと吸収できない。

二つ目、先の民の末裔であること。先の民とは、剣王を指す。しかし、今となつては剣王の血は途絶えているので、二一つ目の場合はないと言われている。

三つ目、メフィストであること。または、メフィストの独自の魔法を受けたこと。

しかし、どれにもあてはまりそつになかった。一つ目のようには、魔法の中に弱点があるというわけではないし、二一つ目は既に絶えた血の話だから、論外。三つ目のメフィストに関しては、どんなやつらかは知っているが、見たこともないし会つて話したことはない。もう一冊にたよる本があつたが、似たり寄つたりの内容だった。そして、俺は魔法を打ち消すことに関する本『剣王と悪魔』をマリアの指定した位置に行き、見つけた。

どうやら、昔にいた剣王に関する内容のようだ。本の内容はこんなものだった。

昔、そなそれは、ハイデア王国が造られてから、百年という月日が過ぎ、ハイデア王国の初代の王が、一代目の王に即位した頃の話だ。

突然王都に化け物が現れた。それは、言葉通り突然、何もない場所からいきなり現れた。化け物たちは人間を喰らつていった。

そこに、王国の騎士団も派遣された。しかし、化け物たちの強さは常軌を逸していた。騎士団は壊滅させられ、その騎士団も無論悪魔たちに喰われていった。

そこに、一人、そして、一本の剣を携えて、金色の瞳、白髪いや、あの透き通つた髪は白といづより、銀に近い長い髪をした男が現れた。

そして、男は人間とは思えないほどの強さで、化け物を一瞬にして、なぎ払つていった。化け物たちは、数百といたが、その男はその数百匹を全てを殺した。

誰もいないのに声が聞こえる。

「殺す、殺す、殺す。貴様はなんとしても我ら悪魔が殺す。」

それに、その男は笑いながらこつ返す。

「殺せるもんなら、殺してみるよ。こんな楽勝に倒せるよ! つなやからに俺は殺されはしない。」

「貴様のような人間風情がいきがるなよ。」

と最後に一言だけ残して、悪魔の気配は消えた。

そして、彼は王国を救つた。彼は、城に招かれた。王国を救つた英雄として。

そこで、彼はハイデア第一代目の王カリスに『剣王』といつ唯一無二の称号をもらい、彼はそれ以来王国を守り、王国に魔法を広めた。ある日彼は戦場にいた。今回の敵となるのは、小さな国だった。小さな国ということで、みんな油断していた。

そこをうまく突かれ、剣王の率いる部隊の第一部隊が全滅させられた。

そして、それによつて、兵たちは皆、

「あんな小国が何故? もしかしたら、やばいのを敵にまわしているんじゃないのか。」

と言い、恐怖が兵たちが支配しつつあつたときだつた。突然のことだつた。

剣王のすぐ近く、右で北に向かつて巨大な一筋の光がはしつた。光が消えると、そこにいたはずの数万の兵が一人残らず消えていた。ついに、兵たちの恐怖が頂点に達した。残りの兵が死に物狂いで逃げていく。

「おい、お前ら、逃げるんじゃ……」

そう叫んだが、その続きは轟音によつてかき消された。一筋の光が今度は兵の逃げた方向へ、先ほどとは違う方向から放たれた。

「おいおい、ちょっと待つてくれよ。このまだつたら、この軍は壊滅……するだろ? うなあ……やべえなあ。俺が本気ださなけりや、終わりだな。」

と力なくつぶやく。そして、考える。こんなにおかしな破壊力を持

つたものを撃つてくるような勢力について。つといても、知っているものでは、一つ当てはまるものがある。悪魔だ。

そして、剣王は一発目の光が放たれた方向を見る。

そこにいたのは明らかに人間とは違う化け物だった。

頭に角が三本生え、目が二つ、腕が四本、足が3本で気味の悪いのがいた。

そして、一発目を放つたほうを見る。そこには人間と、ぱっと見た感じでは変わらない化け物がいた。

二つの目に一つの腕、そして、一本の足。似ているなんてレベルではない。まんま人間だった。

しかし、遠くからでもわかる。そいつから、殺氣、嫉妬、怒りといった感情が、激流となって流れ出ている。

「全く、この世界には、どんだけ化け物がいんだよ。」

そう、めんどくさそうにつぶやき、彼は見た目も化け物の方をつぶしにかかった。そして、先制攻撃を仕掛けるため、魔法を唱える。

「我、剣王。古きに我と交わした契約を今こそ果たせ、炎神アグニ！」

そうして、俺は昔に倒して、召喚の契約を結んだ炎神を呼び出す。そして、アグニが業火を放つた。それは、誰にも防ぐことはできない地獄の業火であった。

しかし、その業火は消えた。化け物は四本の腕うちの一本をふっただけだった。

化け物がしたのはそれだけだった。

それは、剣王自身研究はしたが、できなかつた、魔法を打ち消すといつことの理想の状態だった。しかし、今は感心している場合ではない。

体勢を整え、剣を構えて突き進んでいった。

剣王が化け物に剣で斬りかかるとした。そのときだった。

鈍い音がした。

地面が赤く染まる。

そして、それは、自分の血であった。

剣王の心臓が背中から貫かれていた。剣王はあせる。気配は一切なかつた。

だが、そこにいたのは、先ほど見た人間みたいなやつだった。
しかし、だとしても有り得ない。奴と剣王との距離はこんな短時間に詰められるような距離ではなかつた。

「くそが・・・」

「言つただろう、貴様は何があろうと殺すと。」

そうして、剣王は殺された。

その後、悪魔は剣王の血筋の者を全て殺した。

だが、人型の悪魔とかにも化け物といつた感じの悪魔は争い、人型の悪魔はもう一方を殺したのだといつ。
とまあこんな感じの話であつた。

そこで、俺は考える。

悪魔が使つた魔法を打ち消す力について。

おそらく、この話で最後に剣王が使つていた召喚魔法は現代のものであろうと、上にいくものはないだろう。
それを打ち消すとなると、相当なものだと思つ。しかし、原理が全くもつて、わからない。

結局分かつたのは、悪魔は人間とは桁違ひの存在で、悪魔が使つた力が俺に宿つた力とているということだけだつた。

そして、午前中に調べものを済ました俺は、午後からマリアに声をかけ、俺からマリアには体術および剣術を、マリアから俺には魔法を、教えた。

それ以降、俺は週一のペースで図書館を巡つた。

それ以外の日はマリアと修行をした。

秋、嵐の聲の三日

そんな日々がじばりく続き、季節は夏を終える。

そして、秋になると、俺とマリアはいまだに行つたことの無い山に遠出した。

「ねえねえ、クッスー。ここってなんていいう山なの？」

「うーん」と。クロリス山だな。ここは、自然が豊かできれいだつて聞いたから、来てみたけど、本当にすげえ景色だなあ。」

夏の暑さも過ぎ、代わりに、体が冷える風が吹いている。周りは落ち葉のじゅうたんが広がっているが、木は赤や黄色などの葉で覆われていた。

その景色は、空の蒼と雲の白があつて、一つの色が飛びぬけていて、このわけではなく、みんながみんな、お互いの色を高めあっており、全体としてのバランスが良くなつていて、その美しさに見とれて、ぼうっとしてしまったくらいだ。

「私、クッスーとこんなきれいな景色見れてうれしいな。」

「ああ、俺もだよ。マリア。」

そうして、俺たちが見てまわつている間に、急に雲行きが怪しくなりだして、すぐに雨が降り出した。

「おいおい、朝まであんなに天気が良かつたのに。」

「全くよ、なんで、山の天氣つてこう変わるのが速いのかしら。」

文句を言いつながら、走つていると、マリアが言った。

「ねえ、クッスー。あの洞窟で雨宿りしていこい。」

指した方向を見てみると、すると、そこには、雨宿りが出来そうな洞窟があった。他に行くあてとかもなかつたので、これに入り込むことにする。

「いいな。じゃあ、やつしよつ。」

俺とマリアは急ぎ足で洞窟の中に入つていった。

その洞窟の入り口は狭く、大人がぎりぎり入れるくらいであった。

中はと、少し進んだところで、右に曲がると、じりがあつて、その奥がもう行き止まりという簡単な構造であった。

俺とマリアは、ずぶ濡れ状態であった。降り始めから、少ししかしていないので、こんなに濡れているなんて。そう、驚いていたが、ここは山の中。気温は秋とは言え、かなり低いものだ。それに、この服が濡れているという状況。かなり肌寒く感じる。

「さすがにこのままで、ずぶ濡れの状態でいるのはまずい。着替えようと思つが、着替えは持つてきているか？」

マリアは、がさがさとかばんの中を調べている。そして、「なんか、持つてくるのわすれちゃったみたい。」

「どうやら、着替えを持ってくるのを忘れてきてしまったみたいだが、さすがに、いつやむかわからぬよ、雨がやむのを待つて、いる間、そのままの格好でいさせるのはまずい気がした。」

「そんな、ずぶ濡れの状態で、体調が悪くなつてはいけない。俺の着替えの予備二つあるから、それを渡すから着替えたほうがいい。体に水がついたままでいて、それのせいでも、体が冷えるのはまずい。せらに言つて、ここはある程度高度があるから、気温が低い。最悪、凍死してしまう可能性もある。男モンですまないけど、ほら。あと、タオルも渡すから、それで、体についた水もふき取つておくんだ。」

そう言つて、俺はかばんから着替えとタオルを取り出し、マリアに渡した。

「ありがとう、クッスー。じゃあ、着替えるから、私がいって言つまでこっち見ないでね。」

「分かった。」

そう言つて、俺はマリアとは、逆の方向に体の向きを変えた。そして、しばらくたち、マリアから、

「いいよー。」

と声をかけられた。体の向きをマリアのほうに変えながら、

「分かった。大丈夫か？」

そう言って、振り向くと俺の服を着たマリアがいた。黒髪のところどころにつく水滴は、その存在で、黒髪の美しさを際立たせている。そして、サイズの合っていない男物の服。これはいつも見ることのない新しい一面を見た気がして、かなり新鮮な気がした。思わず見とれてしまう。

だが、そんなに見とれてしまうと、当の本人が恥ずかしがつてしまふので、本人が気づかないうちに、やめる。

「大丈夫だと・・・思う。まあ、サイズが合わないとはあるけど、それは非常事態なわけだから、仕方ないしね。他は何も無いと思う。」

「じゃあ、あとはホレ。このタオル使って、髪の毛とかよく拭いて、乾かしとけよ。」

「ありがとう。それにしても、よくこんなに持つてきているね。」

「昔さ、親父と山に行くことが何回かあつたんだけどさ、そのときに、『山に行くときは必ず何が起こっても大丈夫なよう、予備なり、必要なものは必ず持つていけ。』ってさ、厳しく何度も何度も言われていたからさ、山に行くときは必ず色々、予備なり必要なものを入れるようにしているんだよ。」

「そんなこと言われてたんだ。ありがとう、クッスーが色々持つてきてくれたおかげで、助かった。」

「困ったときはお互い様だしな。それに、マリアが洞窟を見つけていなければ、こうして、雨宿りもできなかつたし、ありがとうな。」

そう言って、俺はかばんの中から、あるものを取り出した。

「それって、なあに、クッスー。」

「これは、こいつに魔力を供給すれば、このガラスのなかで、火をおこして、外気を暖めるつていう代物でな。一応、炎の一一番低レベルな魔法くらいの魔力で確か五時間はもつから、その四倍くらいの魔力を俺がこれに供給してつと。」

指に魔法のために使う体の中に宿る魔力を集めていく。そして、ある程度集まつたのを確認してから、供給を始める。そうすると、ガ

ラスの中に火がどもり、外気をどんどん暖めていった。

念のためこれをいれておいて、良かつたなあと思う。

前日持つて行くものを決める際に、秋で少し肌寒いかもしれないしなあ、

これを持って行こうかなあ、外気を冷やすタイプを持つていくべきかなあと悩んでいたが、結局、秋はたまに寒いし、山寨いしつてことで、こっちに決めた。

「雨やまないね・・・」

「そうだな・・・。もしかしたら、今日はここで野宿かもな。」

「確かにそうだね、さすがに、この雨の中降りていったら、まずやうだし。でも、私、寝る用の布団なんて、持ってきてないよ。」「うーむ、どうしたものかと一瞬だけ考える。

「じゃあ、俺が持ってきた布団渡すよ。」

「でも、それじゃあクッスーにわるいよ。」「

俺のことを心配してくれる。やっぱり、優しいいいやつだと、こんなときではあつたが、ふと思った。

「いいくて。おれは気にしなくていいよ。」「

「でもあ・・・。あ、そうだ。いいこと思いついた。その布団借りるね。」「

そう言って、布団の中をなにやら手で探つてゐる。しばらくの間、それを続けていた。そして、それを終えると、こっちを向いてきた。「うん、これなら、入れるな。一人で一つの布団に入らうよ。そうしたら、二人とも、布団に入れるからさ。ね、いいくて。」「

「いいくて、気にするなつて。」「

「ね、いいよね。」「

と、ぐいっと顔をこっちに近づけ、迫られた。こいつにふつにきたときのマリアは必ず引かないことを俺は、知つてるので、

「分かった、じゃあ、一緒に寝ようか。」「

「うん。じゃあ、一緒に寝よう。とりあえず、護衛用のハイデアでも最高ランクの召喚魔法と、わたしたちを誰にも見えなくして、触

れなくなる隠密魔法、私たちの周りに魔法やら物理攻撃を防ぐ結界を施しておくな、そうしたら安全だしね。」

「じゃあ、俺は敵の存在をキャッチするための糸などを張つてくる。

「そう言つてマリアは、魔法の詠唱を始め、俺は糸を張り巡らせた。そして、全てが終わり、二人とも布団の中に入つた。布団に入つて、しばらくの間、恥ずかしさやらなんやらで、沈黙が続いた。だが、その沈黙は突然話し出した彼女によつて崩れる。

「ねえ、クツスー。クツスーは私のことどう思つてる？ 私さ・・・なんかクツスーのこと好きになっちゃたみたい。」

「ふえっ。」

突然、あまりに衝撃的な話をしてきたものだから、驚きのあまり、声が出てしまつた。そして、当人はといふと、見るからに、顔を真っ赤に染めて、うつむいている。

俺のことが好き・・・？

なんで、こんな俺なんかを。最初はそう思つた。純粹に。誰でも思つてしまつただろう。だって、突然、友人に告白されれば。だが、俺自身好きつてのが、どんな感じなのか、分からぬ。考へている間に、話は進んでいく。

「クツスーに会えない一週間のうちの一日前があるじゃない。あの日はいつも、クツスーに会いたい、話をしたい、一緒に修行したい、遊びたいって思うんだ。そして、クツスーに会えないっていう寂しさを紛らわすために、クツスーと私の写真を見たりさ、魔法学の勉強をやつて、明日会うまでに新しいのを習得して、おどかしてやろうとか考へているんだ。私、クツスーが大スキだよ。」

一人の少女が自分の気持ちをぶつけてくれている。

俺は俺に心を開いてくれるような人がいるつてことでも、うれしかつた。

俺も似たような感情をマリアに抱いている。これが好きつてことなのだろう。

ゆえに、そう言つてもらえて非常にうれしかった。

だから俺は、

「俺もマリアのことが好きだ。俺はある出会ったときに、マリアは俺に大切なことを思い出させてくれた。そして、俺と正面から向き合つてくれた。その時からかな。俺はこういう人は仲良くなれると思つた。そして、俺もマリアに会えない、あの日は寂しくて、胸が苦しくてさ、辛かつた。」

俺は、心の底からマリアに対して抱いている感情をぶつけた。そのときの俺は、自分でも分かるほど、顔を真っ赤にしていた。そうすると、マリアも語りだしていった。

「私もね、あのクッスーと初めて出会つたときも、心中は泣いてたんだ。私さ、魔法が好きだつた。だから、魔法について小さい頃からずっと両親にばれないように勉強してさ、習得して、使えるようにしてきていたんだ。両親は根っからの魔法嫌いでさ、私が魔法について勉強していること、かなりの高度な魔法師であることがばれたときは、こっぴどくしかられてさ。『前に言つただろう。魔法なんか勉強するなつて。約束を守れない子供なんか・・・』そう言って、殴つたり、蹴つたりしてきたんだ。それでも、私は魔法の勉強をやめようとはしなかつた。それからも、ばれてしまつたら、殴つたりしてきた。私は親を恨んだよ。どうして、私を理解してくれないのつてね。そして、私は君と出会つた。君は私に『俺が怖くないのか』って聞いてきたじゃない。あのときさ、私は思つたんだ。この人も私と同じように何か別のことで、苦しんでいるんだって。この人なら、私のことを分かつてくれる。そして、私は好きになれるつてね、そう思つたんだ。そして、突然私に暴行し続けてきた父親が病氣で死に、それを追うように、母親も死んでいった。なんだろうね。あんなに恨み続けてきたのに、親だからかな、悲しかつた。そして、泣いた。それから、あなたのお父さんのガイアスさんが私を引き取つてくれて育ててくれた。それからは、クッスーと過ごす時間もすごく増えたよね。それで、私はクッスーと過ごすうち

に、本当に好きになつたんだ。」

「マリアは優しいな。俺はそんな親だったら、すぐこでも、殺していたかもしない。それに、死んだのなら、そのままみりつて思つかもしれない。」

「いや、君はそんなことはしないし、そんなふうにね思わないよ。だって、君の優しさは私がちゃんと知っているんだから。そう、君は優しいよ。」

「ありがとう。やうだな、俺とマリアは愛しあつてるみたいだな。だから、もう隠すのはやめることにする。話そうと思つよ。俺がいつたい一週間に一度どこへ行つてこるのか、そして、俺についてを。」

「そう言つて、俺はマリアに全てを話した。俺に宿る特殊な力についての全てを。」

「ありがとう。全部話してくれて。その特殊な力がなんなのか、そしてそんな力が宿る自分がなんなのか不安で辛かつたんだね。でも、これからは、私と一緒にその理由を探したりさ、一人で一緒にすごして、楽しくやつたりさ、幸せになろうよ。」

「ああ、俺は幸せだな。こんな優しくて、しつかりしている人に好きになつてもらえて、俺の存在を認めてもらえて。素直にそう思つた。」

「ありがとう・・・、ありがとう。ああ、そうだな。一緒に調べたりさ、一緒に幸せになつていこうな。」

俺たちはそれからいろいろな話をした。

そして、俺たちは、いつの間にか寝ていたらしく、起きると、日の出ひるで、雨がやんでいた。

そして、俺は隣を見ると、マリアが眠つていた。

その寝顔は、まるで、どこか別の世界にいる妖精のようであまりの美しくさに俺は、しばらく見惚れてしまった。

だが、俺がその寝顔に見惚れてる間に、マリアは、手を大きく伸ばし、眼そこに目をこすつて、

「ふあーあ。おはよう、クッスー。」

と眠そうに、言つてきて、俺はそのマリアのかわいらじい一面を見ることができて、うれしく思いながら、言つた。

「おはよっ、マリア。どうせひ、爾も俺たちが寝ている間にせんだけみたいだから、帰ろうか。」

「うーん。わかった・・・」

なおも、眠そうだった。そして、そのかわいらじい一面をもう少し見ていたいという気持ちあつたが、それを振り切つて、俺はマリアに、猫だましをした。

「ひやっ！」

「田は覚めたか？」

「マリアをどうやら、今ので田が覚めたようだ。そして、何すんのよ――――！」

俺は思いつきりビンタを食らつた。

それからじばらべ不機嫌だつたが、俺が、帰つたら新しい魔法書をおこごるとこうふうて言い、それで解決した。

それから、俺たちは家に帰つてから、ガイアスにこっぴどくしかられた。

だが、最後に、

「無事で良かった。つたく心配かけんじゃねえぞ。」

と言い残し、その後、魔法書をマリアに買つて、その一件は片付いた。

それから、俺とマリアは毎日を一緒に過ごした。

俺の力について調べたり、昔と同じように修行をしたり、たまに遠出したりといった感じで俺たちは幸せであった。

そして、俺はその冬、俺は自分で世界の仕組みについて調べる力を持つメフィストになることを決意した。

メフィストになることで、おそらく自分の力について新たに分かれることも出てくると俺は思ったからだ。

それをマリアに言つた。マリアも当然のことながら、自分も行くと言つた。

しかし、俺は、

「すまないが、マリアは魔法について、もっと研究・開発をしておいてほしい。たぶん、メフィストになる上で、もっと高精度かつ難易度が高い魔法を使わなければならなくなると思う。だが、メフィストの数多い試験の中、そんな魔法は作れないと思う。だからこそ、それをマリアにはそれを任せたい。」

「納得がいかないけど、そうするのが一番いい……のよね。また、メフィストになつたら、一緒に幸せになれるよね。」

「ああ、必ず。俺たちは必ず幸せになれるさ。」

そして、俺はマリアと別れ、メフィストの試験をこなしていった。大きな街で、ハイデアに、すばらしい才能を持つ魔法述師が現れたみたいだ。名前は確か・・・マリアっていうやつで・・・というのを聞いたときは、マリアが俺のために頑張ってくれているんだ、俺も頑張って、メフィストになつてやる。と再び決意を硬くさせられた。

そして、一年の月日がたち、今、俺の目の前にそのマリアがいる。

マリアと別れてからの一年間、マリアのことを考えていないことなどなかつたと言つても過言ではなかつた。もう三年も会つていないのだ。

「マリア、何故・・・ここに・・・？」

そして、マリアは涙ぐみながら、言つた。

「クッスーがメフィストになるために、旅に出た後、私ね、私に何かクッスーの手伝いができるいかつて考えてね、メフィストになるための試験について、調べたんだ。そしたらさ、メフィストの試験に合格して、メフィストになつた者はいまだにいなくて、今存在するメフィストはもともと才能を持つて生まれてきた民族だけで、メフィストの試験を受けて、生きていた人はいないんだつてことが書物に書いてあつたんだ。それで、私はクッスーと二度会えないんじやないかつて心配になつた。でも、私は、クッスーを信じて、魔法学の研究に努めた。クッスーは昔から、結構人のためなら、けんかに走るていう性格だつたから、どこかからクッスーのうわさがくると思つていたんだ。でも、何もなかつた。そして、一年がたつた先月、私の信用する部下のラファーガがさ、私のことを気遣つてくれてたみたいで、メフィストについて、調べてくれていたんだ。それで聞いてみると、ある一人の男が最終試験まで生き延びて、今、アルディナにいるつてのことだつたんだ。それは絶対、クッスーだと思つた。でも、研究所放置するわけにもいかないということで、踏みどじまうとしたら、研究所のみんなが『ここは任せてくれ下さい、そして、あなたは、あの人のもとまで行ってください。』って後押しされてさ。いつの間にあんなに成長したんだか。それでさ、

みんなの気持ちを受け取つて、私はここアルディナまで、来たんだ。クッスー・・・・・生きてて・・・・本当に良かつた・・・・・。こんなたつた一人の大切な少女を俺のために心配をかけてしまったことに心が痛む。

そして、それと同時に、約束を守り続けて、至高の魔法術師とまで呼ばれるようになつて、今、俺の目の前まで駆けつけてくれた彼女に感謝する。

「ありがとう、マリア。こんな一年間も待たせ続けた俺との約束を守つて、俺のことを思い続けてくれて。これから、メフィストの試験だ、一緒に行こう。」

そして、マリアは、

「うん！」

と力強く答えてくれた。

俺たちは、アルディナで最終選考試験に向けて、準備を始めた。油断はできない、俺はそう思う。マリアが見た書物に書いてあったことに正直不安を抱いていた。

俺は知っていたから。

そう、メフィストの試験を受けて、生きて帰ってきたものはいないという事実を。

だが、俺はマリアと過ごせたはずの一年間をメフィストになるために使つた。

そして、着々と試験をこなしていったため、表舞台には決して出でこなかつたにも関わらず、俺を信じてくれていた。

そんな彼女に応えるために、俺は生きて、メフィストにならなければならぬ。

ゆえに、俺は立ち止まることは許されない。

細心の注意を払つて、この試験に臨まなければならない。

そう、俺の心に再確認しつつ、俺は準備を着々と進めていった。

その時、俺の顔から左の触れるか触れないかのところを一直線に何かが飛んでいった。

それは、壁にめり込む。そして、俺は見る。それは銃弾だった。

「一週間も猶予があるなんておかしいとは思っていたが、まさか、こうじうことだとはな。つたく、これも一つの試験か、全く。」

「マリアが戸惑った顔でこちらを見る。

「心配するな。ちょっとここで待つてろ。」

そう言って、俺は宿屋を出る。そして、通りの真ん中にそいつはいた。

そいつは、フードをかぶった黒装束だった。

そして、そいつを見た後、周りを見渡すと一見普通ではあったものの、ところどころになにか違和感を感じた。

その違和感が俺には周到に配置された罠であることがすぐにわかった。

言つまでもなく、俺の親父にスバルタでたたき込まれた知識で分かったのだ。

俺の親父は、剣術についても教えてくれたし、魔法もおしえてくれたり、何でも教えてくれた。

その親父は俺が旅に出る前の三日間、罠のこと、サバイバルの方法、馬の乗り方など教えてくれた。

そして、親父は俺が旅立つとき、俺に対して々々に見せる真剣な表情で言った。

「本当に、メフィストの道を進むんだな。」

俺はそれに対し、うなずき言つ。

「ああ、昔から決めてたことだ。ありがとな、親父。」

「俺がこの三日間をかけて、教えたことは必ず忘れんじゃねえぞ。これから、外の世界に出て必要なことばかりだ。じゃあ、気をつけろよ。」

そう言って、別れた。

罠があると思った方向にクナイを投げ込んでみる。とてつもない爆音が鳴り響く。煙があがり、熱風が肌で感じ取れるほどに、吹ぐ。

それに、俺は

「つたく、俺の親父は本職なんなんだよ。まじで。あんな知識必要になるとは思つてもみなかつたぜ。まあでもなあ、あの三日間に教えられたこと、知識として知つていて実践して外れたことがねえんだよな。いや、待てよ・・・」

親父の本職についてようやく見当がついた。

おそらく親父はメフィストだったのだ。

つまり、あの三日間に叩き込まれたのは、親父が試験を体験し、メフィストになるうえで必要だと思われていたものをたたきこんでくれていたのだ。

だとすると、メフィストの試験に親父は合格していたのだろうか？

だが、そうだと、おかしい、と思う。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

俺は親父の優しさ、親父がメフィストであつたことに感謝する。

今、俺がこうして生きているのは、親父がメフィストであつたから。そして、その感謝の気持ちも、心の奥底へと沈める。

俺は走る。無心になつて。

そして、見る。目の前にいる男を。

男は銃を撃つ。

だが、それでも俺にとつては遅い。俺は黒装束の男の撃つ弾を切り落とす。さすがに、銃弾を切られたことには驚いたらしく、男は後ろにさがる。

そのとき、俺は確かに見た。

黒装束の隙間から、男の肩に刻まれたタトゥーを。

そのタトゥーは、大きな門が少しだけ開いており、その隙間から骸骨が手をこまねいているという構造で、確か、ブレイトイツドという暗殺組織を入れているタトゥーだ。

俺は、昔、この組織の一人の幹部とは、戦つた。その時やつが言つていたから、知つてている。

その時、俺は全力だつた。しかし、手も足も出なかつた。そこへ偶然通りかかった王国治安部隊によつて、九死に一生を得た。

しかし、ここには誰も助けには来ない。

だが、俺は負けはない。もう、死ぬことは許されないから。

誰も、悲しませたくないから。

それから、男は、俺の実力を知ったからか、銃弾を連続で、放つてくる。

一つを避ければ、避けた先からまた一つの銃弾が、迫つてくる。完璧なタイミングだと思つ。

しかし、それゆえに弱点も存在するはずだとも思う。

そして、考える。避ける、どうやって避ける？

避けた先に銃弾が撃たれるような銃弾を・・・？

俺は剣を構え、駆け抜ける。そして、水の魔法を放つ。

「自然の恩恵、水を求め、契約をささげる。スプラッシュデリュージ。」

そう唱えると、水の激流が発生する。水はまるで、意思を持った一匹の龍のように力強く、かつ、速く進む。

そして、その龍が如き激流に飲み込まれた銃弾は徐々に減速していく。

止められはしないが、リズムは崩せる。

そう、これによつて、完璧なタイミングで打ち出される銃弾のリズムを崩し、隙を生じさせる。

それを突くべく、俺は一気に加速する。

さすがに、相手が相手だ。この程度ではひるまない。銃をしまうと、何か、魔法の術式を描きながら、詠唱している・・・。確か、あれは、大爆発を起こす広範囲魔法だ。ゆえに、時間がかかるはずだが・・・。

術式を描く速度と、詠唱の速度が半端なく速い。

このままだつたら、もうすぐ発動する。

「おいおい、ありや、まじいだろ。」

と言いつつも、もう、俺は次の詠唱に入つていて。

「大地に眠りし、土の力を求め、契約をささげる。ストーンウォー

ル。」

そうして、即座に土の壁が生成される。その後、敵の魔法の広範囲魔法による爆発で地面が振動する。

「威力が高い！」

そして、その威力のあまり、土の壁は崩れしていく。普通なら、一発の魔法では崩れはしないというのにも関わらず・・・。
前を見る。そこにいるはずのやつが・・・。

「い、いない！！！」

やつはどこへ、消えた。

俺が戸惑っていると、後ろから、かすかだが、何かが振り下ろされる音。

それを左手で持つ大剣で受け止め、はじき返し、その方向に剣をその方向に叩き込むが、受け止められる。

いつたん距離を開くため、男の剣を蹴り飛ばす。そして、俺はバツクジャンプをした後、剣を構え、駆け込む。

俺とやつの剣が、衝突する。

その後響く、銃声。

やつ黒装束の中にハンドガンを隠しながら撃つた。ゆえに、気づけなかつた。

俺の脇腹に銃弾が貫通する。

やつの顔に笑みが浮かぶ。

だが、それでも、俺は止まらない。俺は持っていたクナイをやつの背中に突き刺し、背中を蹴り飛ばす。

体が熱い。そして、体から血が抜けていく・・・。

おそらく、このままの状態が一時間も続ければ、失血死するだろう。ゆえに、一気に肩をつけなければならない。

俺は構える。意識をリアルから遮断する。

俺は、俺とやつだけの世界いわば一次元的空间に意識を集中させる。しばらくの静寂・・・・・

その後に、俺とやつが駆け出したのは、同時だつた。

俺とやつの剣が接触するたび、空気が揺れ、大地が振動した。

衝撃波で、建物が音を立てて、揺れる。

剣技は、俺のほうがやはり繰り出す速度、力としては格段に上だ。だが、俺が苦戦したのは、

やつのサイドウェポンの銃のせいだ。それ単体ではおそらくそこまで強力ではないだろう。そして、避けることも容易だひつ。しかし、やつは俺が攻撃を繰り出した後や、攻撃をしようとしたときのスキを狙つてきたり、剣が接触した瞬間の接触時を見計らつて、撃つたりしている。

このタイプの敵とは何度も戦つてきて、そのたびに叩き潰していく。しかし、こいつは今まで戦ってきたやつらとは、全くもって格が違う。剣と銃を使う場合、剣を打ち込む際に、俺の剣と思いつき接觸すれば、少しぐらには、伝わってくる力によって、相手はひるむ。

しかし、こいつはひるむどころか、剣だけでも俺と互角の力を引き出している。それに加えて、銃の狙い、弾のリロードの速さが異常だった。

そして、俺は力いっぱいの力で、やつの剣を弾き飛ばす。剣は宙を舞う。

やつは、バックジャンプをし、俺から間合いを取ろうとする。しかし、俺はそんなことをやるにはしない。やつを貫いて、終わりにじようど考える。

だが、そうはしなかった。

背後から、冷たくて鋭くて、それでいて、一般人では気がつかないよつな「ぐごく小さい殺氣を感じたから。

「よお、クレイデスとやらよお。いやあ、ハルティアと戦っているとこ初めから見させてもらつてたけど、まともに渡りあうどころか、押し負かすとは、とすがにおどろかされたなあ。それに、最後に俺がお前を試すために、ほんのわずかだけど、殺氣だしたのに気づけるとは、すげえなあ。」

ばかな。最初から見ていた・・・だと。そして、殺氣をわざと出して気づくかどうか見てみただと・・・。全く気づけなかつた。

おかしい、そう俺は思う。

俺はメフィストになるため旅にでるまでの間調べていたのは、単に俺の能力についてのものだけではなかつた。

現在の世界情勢、メフィストについて、魔法学・・・など色々調べては、頭に叩き込み、知識をつけていった。

俺はメフィストになるためにここを出たときに必要になるだらうと思い、こんなものも調べていた。

世界の勢力の中に俺を潰すことができるような強力なものがあるか、そして、警戒すべき人物について。

警戒すべきと考えたのは、いくら調べても何も有力な情報が、出でこなかつたアーミスティシア帝国、今戦つているブレイトツドと呼ばれる暗殺組織、メフィストの組織グラフォース・・・などだつた。そして、その中でも警戒すべき人物は顔も含め、全て覚えているが、俺の後ろにいた人物はいなかつた。

夜の闇よりも深い黒い髪に、鋭く光る金色の目、華奢な体つきの割には、背負つているのが、そいつの身長より長いか短いかの大剣といつ異様な感じ。

俺と同じ大剣使いか。

しかし、こんなにも、強そうなやつが俺の情報網に引っかからないわけがないと思う。

だが、現にどうやってか分からないが、引っかかるつていない。相当の手練だ。俺なんかが相手にはならないほどの。こんだけの力を持つていながら、世界に存在すら示さないというの。思わず、俺は笑つた。

自分に明らかに死が迫つていると分かつていながら。

「何故、笑う。お前はさ、今から俺たちによつて殺されるんだぜ？お前も分かつてゐるんだろ？俺たちにはお前が何をしようど、どれだけ、もがいたところで勝てないつてことがさ。」

そんなことは分かつっていた。分かつてゐるから、笑つた。力のない自分に。そして、それでも、あきらめようとしたしない自分に。

そして、自分を捨てようとする自分に。

現実を見れば、この男たちが言つように俺が何をしようとも勝てはないだろう。だが、俺はもう一人じやない。守らなくちゃならないやつができてしまつた。だから、俺は自分を犠牲にしてでも、守らなくちゃならない。

「すまねえな、ロドス、マリア。俺は死ぬかもしんねえ。」

そして俺は、禁じられた魔法『禁法』を唱える。

禁じられた魔法

それは、俺がメフィストになるため旅に出てから、少したつたころだつた。俺はアーミスティシア帝国で、人間が創り出した禁じられた魔法または呪いと呼ばれるものの存在について、知つた。

それは、人間のものとは、思えない魔法をも越える力だつた。しかし、それは、一時的な力だつた。

人間はその大きすぎる力に耐えられなかつた。

そして、それは、禁じられた魔法、『禁法』と呼ばれ、使用はあるか、開発した魔法学者やその弟子たちを全て捕らえ、牢獄に入れ、永遠に世の中から消し去つたのだといふうに表ではされていた。だが、実際は違つた。

俺の情報収集によれば、一人の男はそれを知つてゐるという。

なぜ、一人だけ残されたのかは大体見当が付く。国がもしものための保険のために残しておいたのだろう。戦争とかで、戦力が必要となつたときのために。

俺はそのとき、この力は、俺の特別な力があれば、使用しても耐えられるんじやないかと考へた。

そして、そのころにいたアーミスティシア帝国に、ロドスという男がいた。彼は、アーミスティシアにいる魔法師のなかでも、位は低かつた。

しかし、俺がアーミスティシアについて、情報収集して、調べつくした結果、彼がこの国で実は、一、二を争う魔法師であることが判明した。

彼は表舞台には出てこなかつた。

そのため、位は低く、魔法師として注目されることもなく、強さも不明確なままだつたのである。

目立つわけではないのにもかかわらず、だが、実際の魔法の実力は國の中で一番。

国としてはそんな彼だからこそ選んだのだろう。

そこで、俺は彼を訪ねた。

そこで見た彼の部屋は、なんというかすこかつた。

扉を開けるとその先に広がっていたのは、魔法学についての本や、彼が書いたのであるうレポートなどが山のように積まれており、今にも天井に届きそうで、崩れそうであつたためだ。

「おーい、ロドス。」

「ふあーあ。なんだーい。」

めちゃくちゃ眠そうな答えが返ってきた。そして、男は出てきた。くしゃくしゃになって寝癖がついた茶色の髪に、今にも閉じそうで、それでも、強い決意の炎がみれる深紅の瞳、あきらか猫背になつている体勢。これが、この国で最強の魔法師なのかと少し疑つた。そして、心中で納得もした。

こいつは注目されねえな、と。

「なんか、お前にききたいことがあるんだとか。じゃあな、客人さん。」

そう言って、案内してくれた男は去つていった。

「失礼します。俺はどこにでもいるような旅人のクレイデスです。あなたが、魔法についての実力がこの国で一、二を争うようなお方であることが分かったので、魔法について色々聞きたいのですが。」

と言つた。しかし返事はすぐには返つてこなかつた。

「ほお。面白いことを言つねえ。君は。僕がこの国で一、二を争う？ そんなの下調べをしていい君なら分かつていいはずだ。僕ではないと。」

俺は即答して来なかつたことから、ビンゴーと思い、攻めていき、本当のことを見き出すことにする。

「そうですか？ 表向きではあなたは、低級魔法師だ。だがそれは、あなたが表舞台に出て、自分の論文を発表したりすることで、研究時間が少しであろうと減つてしまつことがいやだつたためだ。そのため、研究時間が他の魔法師よりも多くなり、今となつては、この

国の魔法はあるか、禁じられた魔法『禁法』について研究をし、ある程度習得しつつあるはずだ。

さすがに、彼は驚いたようだった。

「へえー。そこまで、調べられているのか。率直に聞いづ。君の目的はなんだい？僕について、そのために、調べただけじゃないだろう。」

俺は迷わず言った。

「俺は、俺の特別な力について調べるため旅に出でいる。それについて、教えてほしい。」

彼は少し悩むように考へると、

「とりあえず、立ち話はなんだ。部屋に入ってくれ。そして、扉は閉めるよ。」

俺は言われたとおり、扉を閉め、あの山が存在する部屋に入った。「ここは、話が聞かれる可能性がある。これを使って、ある場所までワープする。このカードを掲げれば、すぐワープできる。」

そして、俺とこの男はこのカードを掲げた。

視界がぐにゅりとゆがむ。そして、どんどん、ビュビュビュンかへ落ちていく。限りなく落ちていく。

そして、足が地面についた。頭がクラクラするし、気分も悪い。そこで、ふいに声をかけられた。

「さて、ここでなら、じっくり話ができる。」

そう言われて、俺はクラクラしながら周りを見回す。ビュビュビュン、どこかの部屋へワープしてきたりしい。

「まず最初に、君の特別な力について教えてもらおうか。」

そして、俺は男に話した。俺の力について、そして、剣王と悪魔という昔のおどき話について。

そして、ロドスは俺が話し終わると、しばらく何かに悩むまつて考へ続けていた。

そして、神妙な顔つきになつて、言った。

「そうだねえ。何から話そつか。そうだな、とりあえず君の力につ

いてだけど、おやじく、君は悪魔の末裔だねえ。それも、伝説級の。おそらく、その『剣王と悪魔』に出でてくる悪魔のどちらかが君の祖先様といったところかな。おやじく、それで、君に魔法を吸収までは、打ち消したりすることができるんだと思ひ。

俺は心の中では、驚愕していた。無理もないだらう。

自分が悪魔の末裔だつて知ったのだから。

いや、違う。俺が驚いてるのは、この男が何故こんなにもたやすく俺が悪魔の末裔であることが、分かったのか、だ。

俺自身、俺の力が何によるものかは知らない。だが、少なくとも、

こいつは、今まで、旅先で話した魔法師とは違う解答をしてきたのだ。

他の魔法師たちは、この話をバカにするか、調べさせてくれと頼んでくるようなやつだけだった。それで、はつきりとした答えを聞けたことがなかつた。

だが、こいつは、俺の聞きたいことをすべに言つてきた。本当のことは、分からぬし、そのまま信用しようとはう氣もない。まだ調べなければならないことがたくさんあるからだ。

この情報はそのための過程にすぎない。だから、俺はこいつから得た情報、魔法を過程にして、進んでいく。

「いい耳つきをしているねえ。眞実を知つても、まだ、何も思わないのか。で、君は何のために僕のところに来た? わざわざ、そんなことを聞くために、ここまで、来たわけじゃないだろ? 」

頭の切れる野郎だと俺は思った。こいつは他のやつらとは、改めて違うと思った。

おそらくこいつのことだから、もうすでに、俺が何のために訪ねてきたのかわかつていいはずだつた。

全くいやらしくいやらうだなあと思しながら、俺はこいつからの質問に答えることにする。

「いやあ、わかっていたんですか。えつとですねえ、『禁法』を俺に教えてくれませんか? 」

そうすると、彼は、かすかな笑みを浮かべ、

「いいよ。僕もあなたについては興味があるしね。では、教えることにしようか。僕が、知っている『禁法』の全てを。」

そして、彼は話し始めた。彼が知っていることについて、たくさんのこと。

俺は彼からの質問にはできる限り答えて、俺は『禁法』も習得していった。

そして、短期間で叩き込まれ、習得した俺は、また、メフィストになるための旅にでることを告げた。

「じゃあな。世話になつた。俺は行くことにする。俺の力については知ることができたけどさ、それだと、メフィストが何故からんでもくるのかがわからない。だから、俺はメフィストになつて、必ず知つてみせる。」

と力強く言つてみせる。だが、本当は怖かった。メフィストになることが。

メフィストになるための試験で生き残つたものはいらないのだと知つたから。

しかし、俺はマリアに誓つた。メフィストになると。

「君、死ぬんじゃないよ。君の考えはわかっている。僕に『禁法』を学びにきたのは、『禁法』を使って、自分を犠牲にして戦おうって感じだろ。俺の能力があつたら、大丈夫、そう考えてんだろ。はつきり言つておくよ。教えはしたが、使うな。使って生きていられるなんて甘いこと考へんなよ。使つたら、一時的に強力な力が得られる。だが、使えば最後、死ぬよ。」

まるで、心中を見透かすよう、言つてきて、あちやーと思つばれてしまったかーと思う。

しかし、俺は、

「まあ、じゃあな。」

と軽く別れをいい、俺は去つていった。

そうして、『禁法』を学び、今に至る。

腕がきしむ。体中に何かが這い回っている感じがする。

視界がぐにゅりとゆがむ。全てが崩れてゆく。意識が遠のいてゆく。
どんどん、落ちる。底のない深い闇へと。永遠に続く闇へと。

そこで、俺は声をかけられる。

俺の上、下、前、後ろ、頭の中、どこからともなく、声が聞こえる。
「落ちる。落ちる。落ちる。墮ちる！ 我に意識を、全てを託せ。もう全てを捨てて、楽になれ。俺はお前から現実といつも絶対的な呪いから解放してやる。さあ、我に全てを。」

そんな声を聞こえた。

すると、もう、託してもいいかなと一瞬考えてしまつ。託してしまえば、全てから解き放たれる。

だが、俺が全てをこいつに明け渡したらどうなる？

俺の親父ガイアスはどうなる？

俺がいなくなつて、全てを捨ててしまつて。悲しませてしまつだらう。

マリアはどうだろう？

マリアは俺を待つていてくれた。俺が旅に出てからもずっと。それどころか、俺を支えにきててくれた。俺は彼女を待たせすぎた。今度は俺が彼女のためにやらねばならないときではないのだろうか？
そうだ、俺は彼女を悲しませてはならない。

「おい、化け物。お前の力を貸せ。お前と一緒に歩んでやる。」

「我とともに、か。そんな答えは初めてだ。お前に我的力を託してやらないでもない。だが、これから先は、ずっと苦痛が続くぞ。そして、人間にはその苦痛は耐えられるわけがないぞ。それでもいいのか？」

それに、俺は

「俺は立ち止まらない。もう、立ち止まりたくないんだ。もう、

マリアを待たせるわけにはいかない。」

そう、はつきりと答えた。

「いい答えた。我的力を貸すに値すると判断した。だが、苦痛が続

くのは事実だ。後悔はするなよ。」「

最後にかすかだが、そう聞こえた。

そして、俺は意識を取り戻す。そして、俺は感じる。

この体を這い回っている呪いの力を。

俺は目の前に並んで立っている一人の男を見る。

そして、頭に浮かんできたワードをつなげて、詠唱し、剣に力を付与する。

俺は一気に飛び出す。剣を大きく振り構えて。

さきほど戦っていたほうに剣を叩き込む。

すると、やつの剣と俺の剣が接触する瞬間消えた。そして、やつは驚愕する。

だが、もうそのときには遅かった。

いや、反応ができたところで、何も変わりはしなかつただろう。

体が上半身と下半身が真つ二つにわかれ。

剣が紅く染まる。

俺がさつきあんなにも苦戦していた相手がこうもあっさりと死ぬ。

そう、あっさりと。一振りだけで。

俺はこの力に恐怖を感じた。

だが、俺の手は止まらない。次はもう一方の腹へと叩き込まれていった。もう一人の人間が死ぬ、しかも、俺の手によつて。

そう思うのもつかの間、俺の剣は男を斬ろうとしている。

そして、男はまた真つ二つにな……らなかつた。

男は、俺の剣を手で握っていた。

動かない。剣が消えない。なんだ、こいつは、と俺は思つ。

そんな俺の心を見透かしたように男は言つた。

「なんで、お前の攻撃を俺が受け止めることができるのかつて?そりや、簡単な話だ。俺もお前と同じく体に呪いをかけているんだよ。

と、普通じゃ有り得ないことを言つてくる。

予測はしていた。呪いを自分にかけて、生きているような超人がい

ることは。だが、実際に言われてみると、驚く。

「これは俺と同じ化け物ってことか。そう思った。

「狂った化け物どうし殺りあつてもいいが、この人は死ぬよ。」

「どうす。何かが俺に投げつけられた。

キャッチした俺の手は真っ赤に染まっていた。俺がキャッチしたのは人間だった。それも、長い髪の少女。

そして、キャッチしたその少女を見る。今は血で紅く染まっているが、もともとは、黒髪のロングヘアード青色の目をしてる少女。そう、マリアだった。

マリアが血だらけになつてて。この出血量だつたら、しばらく何もしなかつたら、死んでしまうだろ。俺はある。目の前で、恋人が死に掛けているのだ。あせらないわけがない。

そんな今にも崩れそうな、そして、殺気がこみ上げる俺に向かつて、目の前の化け物は言った。

「これは試験だつたりするんだよねえ。彼女には死の呪いをかけている。さあ、どうする？ 君が生きるか、それとも、彼女がいきるか。さあ、選ぶといい。」

なんてことを。ふざけている。不条理だ。関係者じゃないやつを巻き込むな。そう思いはした。だが、答えは決まつていた。

いや、違う。答えは決まつていたんじゃない。

一つしか選択肢はなかつた。

俺は彼女に向かつて、手をかざす。

そして、彼女にまとわりつく呪いを自分に取り込んでいく。

全てを取り込む前には死ねないし、やつらを倒さないと俺は死ねない。だから、死んではならないのだ。

俺は精神を強く保つ。呪いを取り込む際は精神を強く保つていないと呪いに耐えられなくなつて、死んでしまうから。マリアに生氣が徐々に戻つてくる。

いつの間にか、彼女の出血は止まつていた。

それと同時に、死の呪いが俺を飲み込もうとする。

俺は死ぬわけにはいかない。こんなところで。マリアを一人置いて。だから、俺の体の中に這い回っている制御された呪いをフルに使って、死の呪いと戦わせる。勝てば生、負ければ、死あるのみ。

だから、俺は必死に耐え続ける。体が今にも砕け散りそうなほどだ。俺は苦痛、苦痛、苦痛、それしかない状態だった。

「あの禁法の化け物の言ったとおりだな。かなりの苦痛だ。」

それを、マリアが支えてくれる。手を握つて。自分が死にかけていることなど気にもかけず。

「クッスー。ごめんね、私のために。」

「無理にしゃべるな。お前も今、苦しいだろうが。」

俺は、そんなマリアを見て、改めて思う。生きなきやいけない。生きて、生きて、やらなねばならないことがある、と。

俺は一生マリアを守り、進んでいく。

だから、こんなところで、立ち止まっているわけにはいかない。だから、俺は死の呪いに対して、あがき、もがいた。必死に生きよう。

それから、何分いや何時間がたつたのだろう。

俺の体は、ぼろぼろになつた。だが、それでも、生きていた。死の呪いを自分の体に取り込んだ。

俺にこんな特別な力があつて、良かつたと思う。

力があつたがゆえに、生き残ることができたから。

マリアを救うことができたから。

安心したら、力が抜けてきた。意識が遠のいていく。地面に倒れこむ。体が全くもつて動かない。

声をかけられる。

「なかなか、やるねえ。君。第一次試験『肉体』、第一次試験『精神』合格。そして、これから・・・・・」

言葉が途絶えた。いや、違う。

俺の耳が機能しなくなつた、それだけだ。

駄目だな、こりや。そう思つ。

そして、俺の意識深く深く沈んでいった。

それぞれの目覚め

私が目覚めたのは、ベッドの上だった。

目を開けた先にあつたのは、木の天井。

私は周りを見渡す。

確か、私は戦つていたはずだ。

そう、クッスーが宿屋に私を残して出て行つたとき、装備を整えて、宿屋を出た。

そこには、黒装束のやつらが三人いた。

もちろん、私は応戦した。

私が編み出した魔法の中でも最高位の炎の魔法『インフェルノ』。

それを放つことでその三人を一気に畳み込もうとした。

だが、だめだつた。

やつらは、腕を一振り。そう、それだけしかしなかつた。

すると、そこには、まるで、最初から何もなかつたように、火の粉すら残らず、魔法が消える。

有り得ない、そう思つた。

そして、あのときクッスーが探していいた本『剣王と悪魔』に出てくる悪魔と、同じような、いや、全く同じことをじつらがしていることに気づいた。

クッスーが長年探し続けた答えがそこにある、そう思つた。

それと、同時に、自分の心に恐怖が生まれた。

私は、こんな魔法をいともたやすく打ち消すような輩、いや、悪魔かもしれないやつらととともに戦えるのか。

魔法術師が魔法が使えないのに、勝てるのか?と。

しかし、そんな恐怖はすぐに振り切る。

クッスーを助ける、そのために、自分にできることはするつて決めたから。

それは今やこれからの中の未来のためなのだ。

だから、じんなところで、すぐにあきらめて、負けるわけにはいかない。

だから、私は考える。

どうしたら、この化け物たちを倒せるか。
こいつらを潰せる、かつ、魔法打消しを受けても問題ない魔法なん
てあつただろうか、いや、ないだろう。

だから、私は即席で魔法を考える。

今までに蓄えられた知恵を全て、詰め込んだ最高傑作を。

脅威の速さで構築を最初から構成し、詠唱した。

「我、全てを消す大穴を求め、宇宙の断りに基づき、世界を変革を
もたらす。『クローズ・ザ・ワールド』！」

闇が全てを飲み込んでいく。

化け物どもは、腕を振りおろす。

しかし、消えない。その異様な空間は消えはしない。

これは、魔法ではない。魔法とは私の中では制御できるものなのだから。

こんな制御の出来ない、無効に出来ないものなんて魔法ではない。
これは、空間を分離し、成すべきことをするまで、消えない。そん
な仕組みだ。

そして、化け物たちのいる空間とが現実とに分断される。

そして、空間は化け物を個々、包み込むと、その空間は圧縮されて
いく。

徐々にその空間は小さくなつていき、点になる。

そして、ついには、消える。

化け物は消えた。そう思った。

だが、違つた。

私は気づけなかつた。後ろから迫りくる魔法に。

その魔法は、私を貫き、激痛が走る。

後ろを振り返る。

黒装束の化け物が笑っていた。

一瞬のこととで何が起こったのか分からなかつた。

そして、自分の体の制御が利かなくなり、地面に倒れこんだ。

その後、目覚めたのは、クッスーの腕の中だった。

クッスーの腕は、血にまみれていた。

一瞬で、それが、私の血だと分かる。

その後、正体の分からぬ魔法にかかつた私をベッドの上から飛び起された。

それを朦朧とした意識の中思い出した私はベッドの上から飛び起きる。

周りを見渡すと、男がいた。

透き通つた短い銀髪に、金色の瞳、引き締められた筋肉、厳しい顔立ち。

それは、見慣れた顔だった。

クッスーのお父さんで、私を娘のようにかわいがってくれたガイアス。

ガイアスは、私が目を覚ましたのに気づくと、すぐに駆け寄つてきて、「大丈夫か。かなりひどいけがだつたが。」

と心配してくれる。

心配してくれるのは、うれしいし、優しいなあとも思う。

でも、今はそんなことより、クッスーのこと我が心配だつた。

「クッスーは無事なの？」

そう、素直に聞くと、ガイアスはしわをよらせ、深刻な顔で考へる。そして、言いにくそうに答えた。

「生きてはいる。」

そう聞いたときは正直うれしかつた。しかし、ガイアスの言葉が引つかかる。

『生きてはいる』といつのはどういふことかを考えると、急に不安になる。

ずっと、遠くにクッスーが行つてしまつていそぐで。

「何か問題でもあるの？全てを話してよ。」

「覚悟を決め、言つた。

「ああ、そうだな。お前は知る権利がある。」

そして、ガイアスは語りだす。

「やつは生きてはいる。だが、最終試験の中だ。やつは、最終試験の中でも、今、第一ステップを越え、最終ステップに入った。メフィストについて話しておくべきことがある。」

「話しておくべきこと？」

「メフィストには、メフィストのための世界が存在する。人間には人間のこの世界が存在するように。」

「人間には人間の世界があるように、メフィストにはメフィストの世界があるってどういうこと？」

「それは、メフィストは人間とは違うからだ。メフィストの由来は、メジャメンティストと呼ばれるものだと言われるものだというのであり、メフィストと呼ばれているのは知っているな？」

常識なので、すぐうなずく。

「しかし、実を言つとこの由来は間違っているんだ。決して測量士の略じやない。だって、おかしいだろ？ メジャメンティストを略すなら、普通、メティストだろ？」

「そうね。」

昔から自分も疑問に思つていたことを改めて言われて、やはり、なにかがあつたんだと納得する。

「そう、メフィストつてのは『悪魔』を示しているんだ。メフィストの祖先は、悪魔なんだ。」

私は驚く。

世界常識が覆されたことに。いや、違うだろ？

私が驚かされたのは、今まで追つてきた真実が少し見えた気がしたことだ。

悪魔が祖先だというメフィストになるなり、同じように悪魔が祖先である必要があるはずだ。

メフィストの祖先が悪魔ということは、普通の人は、クッスーのように最終試験までたどり着くことすらできないはずだ。

なら、何故クッスーが生きている?

私の推測、おそらくこれが真実だらう。

クッスーの特別な力はもともと、祖先である悪魔が持っていた能力、つまり、あの御伽噺にでてきた悪魔のものであろう。ゆえに、あの有名な悪魔を祖先にしたクッスーは悪魔の血、その能力がでたのではないだろうか。

それが、私の答えだ。

それを証明するのは、私の目の前にいるガイアスだ。この答えが正しいのなら、おそらくガイアスも力について、気づいているだろう。

だから、私は聞く。真実を求めて。

「あなたたち、親子はあの『剣王と悪魔』に出てくる悪魔の末裔なのね?」

「ああ、そうだ。メフィストの試験つてのは結局のところ、悪魔の末裔を探すために存在するテストなんだ。メフィストの試験でここまで来たのはやつが初めてだつたが、これは必然的に起こつたものなのだ。悪魔の血を深く継いでいるクレイデスだからこそなしえた。」

やはり、真実であった。

ようやく、クッスーが悩み続けたあの特別な力についての真実が得られたような気がする。

だから、私は聞く。

「では、改めて聞きます。クッスーはどこですか?」

すると、彼ははつきりと言つた。

「メフィストの世界、つまり、メフィストの夢の中だ。やつが向こうで決着をつければ、戻つてくる。」ガイアスの言葉は続く。

「そう、昔の俺と同じように・・・」

そう、少し、悲しげに告げる。

「やつはあそこの部屋だ。」

そう言って、ガイアスは隣の部屋を指差す。

私は、ベッドから立ち上がり、歩いていった。

隣の、クッパーのいる部屋に向かつて。

歩いていく。

本当は短い時間のはずだが、私には無限のよつと長いを感じられた。
クッパーに会いたい、その気持ちが私をせかす。

ドアを開ける。

そこは、白い部屋だった。

真っ白の部屋。

あるのは、白いベッドとそこへ横たわるクッパーの姿だけで。
異世界の空間にも感じられた。

そして、部屋の中央にあるベッドを田指して、歩いていく。

ベッドはドアから五歩ぐらい先にあつたはずだった。

しかし、その距離は一向に縮まらない。

おそらく、これは夢の中に接触できないようにする何か特別な結界、
まあ呪いとかそこらへんだろうと推測する。

呪いというのであつたとしても、それは一応魔法なので、少しほ構成を理解できるはずだ。

そう思い、私はその結界の構成について、調べる。

調べるが、全くもって、構成が理解できない。魔法が存在すること
は分かる。

だが・・・。ありえない、そう思つ。

この世界でもトップクラスの魔法術師なのだ。

それに、構成が少したりとも分からぬよう作るなんて、おかしい。

今まで、魔法学を学んできたのは、無駄だったのか?
何故こんなものが存在する?

私は無力だ。

自分に絶望する。

こんなにも近くにいるのに、触れることもできない。

あんなにも長い間離れていて、ようやく再会できたのに。

また、運命か何かは私たちを別れさせようとする。

さらに、この試験に合格できなかつたら、クッスーは死ぬかもしないのだ。

そして、おそらく何百いや何千人の人がこの試験で命を落としている。

つまり、その人数の倍ぐらいの人が悲しんで、泣いたのだろう。こんな不条理があつていいいのか、そう思う。

だが、クッスーは何があろうとメフィストになると言つていた。全ては、クッスーが決めたこと。

そして、クッスーは約束してくれた。

必ず、生きて私の元へ帰つてきてくれる、と。
だから、私は信じる。

私が信じなくて誰がクッスーを信じるというのだ。

私には、ただ、クッスーを信じて待つことしかできない。

だから、帰つてくるのを信じ、見守り待つ。

俺は死んだのだろうか。

そんなことを思いつつ、俺は田を開ける。

すると、そこは、レンガの壁、一定間に置かれているたいまつ、一本道の通路という単純な構造の場所だった。

「全く、俺は死んでしまつたのかねえ。これを進んでいつて自分で地獄か天国。いや、俺はマリアを置いてしまつた、そして、待たせすぎた。他にも・・・。だから、地獄だろうな。自分で反省しながら歩けつてことか？」

と小さくつぶやくと、俺は地面から起き上がり、歩いていった。

そして、歩き続けた。

歩き続けた。

だが、続いているのは、最初に起きた場所と変わらない風景のみで。「何も変わらないんですけど――――――！」

あきれ果てて叫んだ。

こんな通路だから、向こうの壁にでもはね返って、声が聞こえてくるかとも思つてはいたが、結局何も聞こえなかつた。

俺は、銃をサブ武器として持つてゐる。今度はそれを使ってみるとしようと思つた。

とりあえず、撃つてみて、壁までの距離を測つてみると、

銃弾を装填する。

そして、構えて・・・引き金を引いた。

俺の銃特有の空氣まで振動するような轟音鳴り響き、弾は打ち出された。

音どおり、威力は大層なもので、発射の際にかかる手に対する負担は大きなものであつた。

もつ、この感覚にも慣れてしまつてゐる。

そして、俺はそんな銃に慣れてしまつた自分に対し、考えながらも、耳を済ました。

風を切る音が聞こえる。どんどん遠ざかっていく。

どんどん遠ざかっていく

遠ざかっていく、ついには聞こえなくなり、しばらく待つたが、銃弾が壁に突き当たる音はしなかつた。

「おこおい、うそだ。この通路はいつたいどこまで続いているんだよ。」

あきれたように俺は言い、その場に座り込んだ。

とりあえず、状況を整理することにする。

一つ目、通路があるが、出口は見当たらぬ、または存在しない。

二つ目、ここが俺が死んだためにここに来たのか、それとも、これは俺の夢なのかが判断がつかない。

三つ目、ここが、何のために存在するのか分からぬ。

この三つが今の状況および問題点だ。

一つ目に関しては、普通に出口を見つけるのではなく、なにか特別な方法をつかわなければ、出られはしないということだ。

つまり、その特別な方法を発見すればよい。

と言つても、それが一番の難題なわけだが。

二つ目に関しては、はつきり言つて判断しようがないだろう。なんか、使い魔みたいなのが現れて説明してくれるんだつたら、話は別だが。

三つ目に関しては、この一つ目と二つ目が分かれれば、わかるんじゃないかなーって思つてている。

さて、どうしたものか、と悩んでいると。

前から足音がした。まだ、距離は遠い。あの銃弾にあたつてしまつた不幸な方が怒り狂つてきているのだろうか。それだったら、ごめんなさい。そんな俺の気持ちなんか他所にどんどん迫つてくる。

俺はすぐに警戒モードに入る。俺のスイッチが入る。

足音からして、人数は一人だと思うが、何か違和感を感じる。なんなんだ。

今まで、こんなに歩き続けたが一人たりとも会わなかつた。

こんなに簡単に現れてくるものなのか？

俺の中にそれが違和感として、出てくる。

そして、俺の勘つてやつなのだろうか。一人ではない気がする。

俺は、隠れられそうな場所がないか周りを見渡す。

しかし、やはり、そこにはさつきからずつと見てきた通路が広がっているだけで。

この状況はまずいと俺は思う。

迫つてきているのが、味方であれば問題はないだろう。

しかし、今迫つてきているのは、味方であるという保証はないし、俺に気取られないように、動いてきているやつらもいて、はつきり言つてこいつらの実力は計り知れないものだ。それに、もしかしたら、俺の銃弾が当たつた不幸な人の仲間かもしけないし・・・。それらの可能性を考えると、逃げなればと思う。

だが、一体どうすれば・・・。

「ねえ、君もしかして、困つてる?」

急に後ろから声をかけられ、驚く。なぜなら、そこは気配はもちろんのことなかつた。さらに、俺の範囲魔法『サーチング』を発動していたため、人がいたなら、気づかないわけがないから。

この魔法は俺が旅に出てる際に思いついた魔法で、精度は非常に高く、引っかかるない人間なんて今まで、あの現実で最後に戦つたあの男しかいなかつたから。

そして、俺は声のした方を振り向く。

そこには、金髪のショートヘアに、金色の瞳をして、背丈は俺と比べて、少し低いぐらいの同年代であろう女の子が立つていた。

「助けて・・・くれるのか・・・?」

そう聞くと少女は

「もちろんよ。じつちに来て。」

と彼女は、俺の手を引き、走つていった。俺はそれに追いつこうと必死になるような速さで走つていく。

後ろからは、なおも、近づいてくる足音が聞こえるし、俺の『サーチング』により、ようやく敵の存在は確認できるような距離にはなつた。しかも、俺の予想通り、一人ではなく、かなりの大規模な集団が。

それに、魔法の範囲内のそこらかしこで、そいつらは増えていくつる。しかも、有り得ないほどの速さで。

「おいおい、大丈夫か? 敵の数がかなり増えてきてるけど・・・?」と聞くと、

「たぶん大丈夫じゃない? それと、今、後ろから、迫つてきているのは、一定時間間隔で巡回している化け物だから。そいつらは、まじで強いから、戦うなんて考えたら、死ぬから。」

と、軽々しい口調で恐ろしいことを言ってくるもんだから、あのままだつたら、俺まじで、危なかつたーなどと考えてはいたが、そういうことは今は必要ないので、奥深くへ沈め、聞く。

「俺たちはどこに向かっているんだ？」

「もうすぐ、分かると思うよ。」

と一言満面の笑みで言つてくる。

こりや絶対なんか隠してやがるなと思つ。

そう警戒し始めてから、すぐのことだった。俺はどこからともなく現れた穴によつて、足場がなくなり、落ちていつた。

「まじかよ――――――――――。」

俺の叫び声がその穴に響き渡つた。

俺の予想は当たつていた。やはりなんかあつた。こんなふうに落とされるとは思つてもみなかつたが。

落ちた先は、どこかも分からぬ場所。俺はこけていたが、隣にいた女は普通に体勢を崩していなかつた。

そんな女の姿を見て、知つてたんなら教えるよと、ちょっとしたいたらだつたが、一応恩人であるから、文句は言わないことにする。

そして、少女は俺には目もくれず、進んで行く。

俺はそれに遅れないように、少女が進んでいくとおりに後ろから付いて行く。

少女は何本にも別れ、わけが分からなくなるような複雑な道を足早に進んでいく。

しばらく、進み続けた後、突然少女が止まる。

すると、そこには、大きなドアがあつた。周りのドアの一倍はあるうかという大きなドアが。

異常にでかい部屋のドアが音を立てて、少しずつ、そして、少しずつ開いていき、ついには、その巨大なドアは完全に開いた。そこに、広がつていたのは、春を感じさせる風。広大な緑の木々。そして、とても巨大な城、そして、城下町だつた。

「えーっと・・・

彼女の名前が分からず、声をかけられなかつた俺に対しても、彼女はそんな俺の心情が分かつてゐるかのように言つ。

「私はミラよ。」

「ミラか。分かった。そういうや、俺の自己紹介もまだだつたな。俺はクレイデス。よろしく頼むよ。」

「ええ、よろしくね。」

「この世界について、教えてくれないか？ここは死後の世界なのか？それとも、違うのか。」

彼女は、少しだけ考え込んだ後、言った。

「この世界は『メフィストの夢』と呼ばれる世界なんだ。いや、正確に言うと、メフィストの夢の一部にあたるのか。とりあえずこうと、決して君は死んでいるわけではないよ。」

俺は死んでいないのかと少しだけ安心した。

だが、今おかれてる状況がいまいちわからない。

とりあえず、考えるのはやめにして、聞くことにする。

考えるのは聞いてからの方がいいだろ？

「『メフィストの夢』というのは、全メフィストが繋がるネットワーク、まあ、大きな樹の根っこみたいなものなの。分かれていくもの一番もととなる部分はいつしょなの。なかでも、この世界はあなたが創り出した世界。あなたの心を作られた、あなたの心が望んだ世界。この世界で、願いを果たせば、現実でも願いが叶う。このような世界が各メフィストにつづつ存在する。そして、重要なのはこの『メフィストの夢』という世界の時間は現実世界より六十倍の速さで流れしていく。けど、あなたが現実で体感している時間間隔とこの世界の時間間隔は変わらないわ。つまり、この世界での一分は、現実では一秒ってだけのこと。それと、あなたの年齢がそういうふうに進むわけじゃないわ。例えば、あなたがこの世界で六年過ごしたとしても、向こうでは一歳しか歳をとっていないことになるの。」

話を聞いていて、唖然とする。

メフィストが格違いなのも、うなづける。

ここで、現実の六十倍の速さで進む時間の中で、色々すれば、狂ったような強さも出来上がるし、おそらくあの『禁法』もたやすく使

えるようになるまで、いや、アレよりすごいものも作れるだろ。」
それから、考えると、最後に俺と互角、または、それ以上の力を持つあいつは、現役のメフィスト、もしくは、元メフィストだろう。
そしてあれも、最終試験の一部だつたんだろう。
だとすると、この世界はなんだ？

何を俺にさせたいんだ？

そう考えていると、ふと声をかけられた。

「ねえ、聞いている？ 聞いてるの？」

俺はその突然の声に驚き、声をあげそうになるが、こらえる。

そういうえ、ミラがいたんだつた。どうやら、俺は考え込みすぎていたのか、周りがみえなくなつていたらしい。

「すまない。聞いていなかつた。もう一度、言つてくれないか。」

そういうと、彼女は、

「もう、聞いてなかつたの？ しようがないわね。もう一度だけ言ってあげるわ。この世界は、あなたの心を元にしてつくれられたもののは、今言つてわよね。」

「ああ。そう言つていたな。」

そう、うなずく。

「オーケー、それは聞いてたのね。それじゃあ、一つ質問です。あなたはまだメフィストじゃない。ですが、今、こうしてここに自分の心を基に作られるメフィスト一人一人に与えられる世界が存在します。それも、メフィストじゃないあなたの世界が。それは何故でしょう？」

考えもしなかつたが、当たり前の質問をされて、俺は困る。この世界に来て、まだ、まもないのだ。わかるわけがない。

そうは思うが、それでも考えてみる。考えずに、わからないと答えたくない負けず嫌いな俺は、頭をフル回転させて、考える。だが、答えは出ない。出ないが、考え続ける。

「おー、クレイデス。」

すると、そこに、ミラの声とは違う、男に不意に声をかけられた。

男の声がした方向を向く。

しかし、男はそこにはいなかつた。

聞いた事のある声。どこで、聞いたものだつたか。俺はどこかで、この男の声を聞き、会話をした。

それはどこだつただろう。この世界で会つたのは、ミラだけだから、この世界ではないだろう。

なら、向こうの現実の世界なのか？

あの俺を襲つてきたメフィストか？いや、違う。やつの声は、もつと軽さがあつて、冷たいものだつた。

なら、俺を最初に襲つてきた男か？いや、やつも違う。やつはもう死んだし、こんな重たい声をだすようなやつではなかつた。

じゃあ、誰だ。ここ最近出会つたような気がするんだが。

もしかして、あの宿屋に来たあの歴戦を潜り抜けてきたような男みたいなやつか？やつなら、声に重みがあつたし、鋭かつた。そうだ、やつだ。思い出した、あのメフィストなのか。

それで、俺は気付く。

一週間後に会うといつひとの本当の意味に。

一週間とは向こうでの一週間のことを指すのではなく、この『メフィストの夢』と呼ばれる時間の進む速さが違い、速く進むこの世界でのことを指していたのだ。

つまり、現実では、一時間四十八分後の事を指していたんだ。どおりで、準備期間にしては長過ぎるはずだ。

だが、実際は長くはなかつたわけだ。

俺は苛立つ。こんなわかりにくい言い方をしてきたメフィストのじいさんだ。

違うだろう。俺が本当に苛立つている相手は自分だ。

常に、先を読んで、正しい道を圧指していくはずなのに、こんな予想外の出来事をあの言動から予測できなかつた自分に対してだ。先を読めずに行くことは、これから、いつ死んでもおかしくないことを指し示してくるんだ。

死なないと決めた俺がこつもあつむつ、ミスをしてしまってはならないんだ。

だが、俺は完璧ではない。そんなことは分かっている。

分かつていいけど、完璧な道を踏み外さないようにならなければならぬ。

そしてそのためには、それをするための強さや洞察力があると過信してしまっていた自分を、実際に強さと洞察力がある自分にならなければならない。

そう心に誓い、耳を澄ます。風の音、動物の泣き声、その他の音を耳から削除する。

そして、やつの声を探す。

空気が微妙に振動する。

「そこか。」

それによつて俺の斜め右前そこにそいつはいると突き止めた俺はそこに向かつて、猛ダッシュする。

そいつはそこにいた。メフィストの最終試験について、言ひに来た歴戦をくぐり抜けてきたという雰囲気をかもし出す男。

「よく、見つけることができたな。では、最終課題の説明をしよう。今回の最終試験の未開の場所とは個々に作られた世界のことを指す。つまり、今回の課題は、このお前の世界の探索だ。」

「わかった。」

「地図が完成したら、俺を呼べ。俺の名はレイアンだ。」

そう言うと、突然砂煙がのる突風が吹いて、俺は思わず目をつぶつた。そして、その突風がやみ、もう一度目を開けると、そこにいたはずの男は消えていた。

まるで、幽霊のように、いつのまにかいなくなつていた。

前もこんな感じだったので、今回は気にはしない。

どうやら、ここが最後の試験の会場のようだ。俺の心を基に作られた世界その地図を完成か・・・。

「おもしろいことになりそうだ。」

思わずそう呟いた。

「ミリ、お前はどうする?」

「もちろん、あなたについていくよ。」

「じゃあ、行こうか。」

そう言って、とりあえず最初から見えている城、及び城下町に向かつて、俺たちは歩き出した。

抗わなければならぬ運命

俺は、城に向かつて歩いている最中、考えていた。この世界について。

この世界が本当に俺の心が望んだ世界だと言つのなら、俺の闇となる部分とも対面するだろ？

俺は、それに対面して、まともにやりあうことができるのだろうか。俺の闇となる部分はだいたい見当がつく。

だが、俺にそれを克服するほどの力があるのかどうかわからないし、あつたとしても、立ち向かつてゆける勇氣があるか分からない。

そして、ここが俺の望んだ世界であるなら、俺の求める答えも見つかるだろ？

そう、俺は一体何者なのかという最大の疑問の答えが。

真実を知りたい。だが、それは恐ろしくもある。真実を知つて今自分が今までいられるのか分からぬからだ。

だが、俺がどう思おうと、この真実は知るようになるはずだと、なぜだろうか、思つてしまつ。

だが、俺の旅の目的は、マリアに対しては俺の特別な力について知るだと伝えていた。ゆえに、俺は知らなくてはならない。そして、その上で真の目的も果たさなければならない。

そう考えていると、マリアのことを思い出す。

彼女は全身から出血し、俺の周りに血の海を作つていったほどの重症だつた。大丈夫なのだろうか、心配でならなかつた。だが、俺にはそれでも、まだ彼女が死んでいないのが分かつていて。

俺は必ず生きて帰る、そう心に誓い、俺は前を見る。
あんなにも、小さく見えた城も、ようやく、大きく見えるようになつてきた。

見るもの全てを魅了しそうな、雪のように白い城がそこにはあった。
しばらく、俺はその城を見て、見とれてしまう。

ようやく、城から田を離すことができた後、俺は周りを見渡す。住宅街ではあったが、時間帯が時間帯で深夜だったため、静寂に満ちていた。

その静寂の中、俺とリリカの足音が響く。どうやら、起きてこるのは、俺たちだけのようだ。

さすがに、歩きっぱなしで疲れがたまっていたので、宿屋を探します。

周囲とは一世代、いや、一世代ぐらい昔の古びれた建物があった。建物は、建っているのが、不思議なくらいであった。そこあるのは、今にも落ちてしまいそうな感じがする垂れ下がった宿屋の看板。値段を見てみると、激安だったので、ここで寝ることにする。

非常に趣がある古いドアを壊さないよう慎重に開くと、カラランカラランと客が入ったことを知らせるベルの音だけが今まで宿屋で保たれていた静寂を崩して、鳴り響く。鳴り響いたが、返事はない。宿主は寝てしまったのだろうか、そう思いつつ、宿に入る。

周りを見る。一見したら、何もないように思つだろう。だが、俺にはわかる。

ここにはなにか、いや、だれかがいる。

俺が気配を感じ取った方向には、本当に何かがいた。最初は、亡靈か？結構まともに疑つた。しかし、よく見ると、違つた。それもそうだろう。一応、ここは町の中だ。突然亡靈でも現れたもんなら、ここはモンスター・タウンとか幽霊屋敷なのかもしれない。

そいつは、寝ているのかと疑いたくなるように、重たく閉じられた瞼、長い年月をかけて作られたのであろうしわ、肌の色は抜け落ち、白くなり、骨しかないように細く、腰が曲がった老婆だった。

老婆は無言で机を指差す。指差した先には、なんか木の入れ物があり、そこには、値段が書かれている。

俺はこの老婆がここに代金を置いていくのを言いたいのだと悟る。

「ここに代金を置いていくな。」

俺はそう言つと、周りを見渡す。とりあえず、空いていそうな部屋を探そうとする。一歩ふみだしたところで、背中をくいつと引っ張られた。

振り向くと、老婆がなにやら、指を指している。

指している方向を見ると、そこには、部屋があった。どうやら親切に、俺に部屋を教えてくれたようだ。どうやら、部屋を案内するくらいはしてくれるみたいだ。

「ありがとな、婆さん。」

そう一言とだけ言つと、俺はその部屋に向かつ。扉を開けるときこそ一度振り向く。そのばあさんの気配が急に消えたのだ。感じたとおりで、そこには、ミラがいるだけで、老婆は消えていた。

「あのばあさん、まじで幽霊なのかもな。」

そう小声で呟く。そう、あまり、気にはしなかつた。だが、ミラはどうなのかわからぬ。急に悲鳴でも上げられて走り去つていった曉には、俺が探しに行かなければならぬはめになる。それに、今まで旅をしてきてこいつやつには、結構会っているものだが、何も起こらないことのほうがあこという経験もあったからだ。

ゆえに、俺は最低限の警戒をするだけにとどめておく。

さらに言つなら、疲れた。なぜなら、今日は色々と起きすぎたのだ。暗殺者の襲撃、『禁法』の使用、そして、試験の開始。

頭の中を整理する時間が必要だ。おそらく、これから見していく世界は俺の望んだものであり、俺が拒んだものもあるだろう。だが、それを見ないかもしれないし、見なければならないかも知れない。見てしまったとき、それを受け入れる覚悟、それが、俺にはあるのだろうか。

ふと、そんなことを考えてしまつ。だが、俺は決めた。全てを受け入れ、俺について知る。

そして・・・・・マリアを救う。

そのためには、なんでもする。

そう、それが俺のメフィストになる真の目的だった。未来を変える。

それが俺の目的だった。

マリアが死ぬという、しかも、殺されてという残酷な未来を。

それは、俺とマリアが洞窟から帰ってきた後のこと。俺は町に未来を予言する者、要は預言者が来ていることを知った。

世界に対戦が起こる時期を予言し、完璧に当てたり、国の革命が起ることを当てたりと、有名な預言者。

図書館からの帰り道。偶然にも、その預言者を見つけた。闇のよつに深い色をした藍色のローブを身にまとっているだけという特長の。

俺はその周りには誰もいないことを確認し、その預言者に予言を頼んだ。

金を先に払おうとしたところで、その預言者がただで、未来を見てくれると言うので、見てもらった。

初めはどんな未来が予言されるのか楽しみだった。そう、興味があつた。だが、その浮かれた気持ちは次の一言で、絶望という一つの言葉に摩り替わってしまう。

「あなたの幼馴染は死ぬよ。」

突然、そう告げられる。

俺は、動搖する。いきなり、幼馴染が死ぬと告げられたのだ。正氣でいられるはずがない。しかも、予言してきたのが、予言して外れることはない言われるような預言者なのだ。動搖しないわけがない。「うそ……だろ……。」

俺は、冷静な考えができるほどになる。だが、俺は心を落ち着かせようとする。簡単にはできなかつたが、徐々に自分の心を落ち着かせることに成功する。死ぬのだというのなら、死に方次第では俺の力でマリアを救うことができるのではないか。そういう考えが生まれたからだ。その考え方で、心は絶望の淵から少しだけ救い出される。それゆえに、俺は聞く。

「何故、いや、どうやつて死ぬのだと言つんだ。」

「殺される。」

俺は少しほつとすると。なぜなら、そいつがマリアを殺す前に俺がそ

いつを倒す、または俺が守り続ければいいのだから。簡単に考えてしまったが、俺にはそれが出来る自信があつたのだ。そう、変えることができる未来だと思ったから、安心することが出来た。

「誰に?」

俺はそう聞く。

「『終焉の騎士』によつて。」

俺は先ほどまで出てきていた希望の光が、闇に飲み込まれて行くのを感じる。なぜなら、そいつは、この世界で悪魔と呼ばれるものの末裔だ、死神だと呼ばれ、狙つたやつは必ず殺す。そういうやつなのだ。先月、この国最強の騎士アーサーもやつにひいて殺されたそして、殺された現場には、その殺したやつの血は一滴たりとも、見つからなかつた。

それは、無傷でアーサーを倒した、そう、アーサーを圧倒していたことをさすのだ。

アーサーには俺も手合させをせてもらつたことがあつたのだが、引き分けという不本意な結果に終わるだけだった。

それは、俺には勝てるわけがないということを指し示していた。しかし、勝たなければならない。

俺はそう決意して、世界について図書館を調べまわつた。なにか、救う方法があるはずだと信じて。

そして、俺は未来を変える力を持つメフィストになることを決意し、現在に至る。

それが、俺をここまで、動かした源とでもいうべきものだ。暗闇の奥深くに沈んでいた俺の心を手を差し伸べて、救い出してくれたマリア。

そんな彼女を死なせるわけにはいかない。そんな現実、なにがあるうと認めない。俺がこの腐つた未来を変えてみせる。その意志が俺をここまで導いた。

だから、俺はこの、未来を変える力を持つこの世界で、『マリアの死』という未来を必ず変えてみせるのだ。

そして、昔のように一緒に笑って過ごすんだ。

そう改めて決意を硬くすると、俺に急激な眠気が襲い掛かる。

「すまない、//ア。もうもう少しあつにない。おやすみ。」

そう一言だけ//アにかっこにすることができた後、俺の意識は夢の世界へどんどん落ちていった。

その最中、

「おやすみ。クレイデス。」

とこう//アの声が聞こえたような気がする。だが、それに答えるほど、意識は保たれてはいない。俺は返事することもできず、眠りについたのだった。

夢を見ていた。

よく思い出せない。確か・・・俺と誰かがいた。それしか、思い出せない。それどころか、それ以上思い出そうとする、頭痛が生じる。

まるで、なにか、真実を隠そうとするかのように。だが、俺は何もできない。思い出そうとすればするほど、頭痛は増していく、耐えられないほどまでになる。

「めんどくせえなあ・・・。」

誰にも聞こえないような小さな声でそつ一言だけつぶやく。そして、夢に対する思考をとめる。

何故、俺にこんなことが起きているのかについては、興味がないと言えば、嘘になるだろう。

だが、すぐには分かりはないだろう。そう判断したからだ。いずれ、旅をしているうちに答えはでるかもしれない。それまで、待てばいいし、出なかつたら、出なかつたで、この旅が終わつたら、自分で調べればいい。ただ、それだけのことだ。

俺の目的は『マリアが死ぬ』という未来を変えることだ。

そう、だから、今はそんなことより、どうやつて、『終焉の騎士』と呼ばれるマリアの暗殺者を倒すかについて考えなければならない。そういう風にして、思考の切り替えに成功した俺は立ち上がり、窓を開ける。窓を開けた瞬間、一筋の風が吹き抜ける。

「気持ちいいなあ・・・。ふあーーあ・・・。」

大きなあぐびが出てしまつ。だが、気にはしない。だって、今ここにいるのは、俺と最近親しくなつたミラの一人だけなのだから。ミラをそろそろ起こそうかと思い、彼女のほうに振り返る。

気のせいだろうか。俺のほかに一人いた気がする。一人はミラだ。じゃあ、もう一人はいったい誰だ。後ろでくくられた青い長い髪。

そして、明るい感じの服で、年は、俺と同年代か年下か。そんな少女がミリのベッドに入り込んで一緒に寝ている。

全くもって、面識がない。

ミリの連れだらうか。そりだつたら、起きてから説明してもりおひ。そう考え、起こせうといふの思考を止める。

だが、違つたら、どうなる？

起きたら、なんかまことになりそりだと俺の勘が告げる。だが、起こしたとこりで、まずそりだつたので、

「まあ、起きるまで待てばいいか。」

そう小声で呟く。とりあえず、俺はこの少女について、俺が今、置かれている状況をもとにして、考察する。

まずは、この少女は俺の敵なのか味方なのか。

しかし、この答えはすぐに出る。おそらく、敵ではない。こんなスキだらけなのだ。敵だつたら、こんなスキはみせはしないだらう。かといって、味方かと言われるどどうなのかは、はつきり言って、わからない。

とつあえずは、起きてからだ。

さて、状況を整理しよう。

俺はメフィストになるための試験の最中だ。それで、試験の内容が地図の完成だから、旅をしている。そして、メフィストになつたら、未来を変える。ただ、それだけだ。

だとすると、この少女はどこの人だ。

もちろん、なんの変哲もない部外者という可能性もないわけではない。だが、こんなときにつつて、見知らぬ少女が突然、ベッドの中に入たなどという偶然が起きるはずがない。

だとすると、メフィストなのか？それとも・・・・・。

いろいろと考えられるが、とりあえず、状況からある程度の考察ができるので、今は良しとしておこう。

「全く何なんだよ。最近は色々と忙しく考えなきやだめだなあ。お

い。」

そう、ため息をつく。

ていうより、こんな一人の健やかな寝顔を見ていたら、いついちも眠くなつてくる。「ひひひひひ」と、意識が遠ざかり始めているときこそ、彼女は目覚めた。

目が合つた。

一言田になんと言えば、いいのだろうか。それに迷い、少しの間、沈黙が流れる。

「やあ。」

とりあえず、一言。それから、向こうは少しの間、固まつていたが、ようやく、その口が開かれた。

「おはよう」「さこます……何故、あなたが、この部屋に……

・。殺しますよ。アハ。」

えつと、今なんて言った?なんか、最後の方にまづい言葉が混じつていたような。まあ、気のせいだよな。てか、『気のせい』じゃなかつたら困る。気のせいだと信じて、もう一度彼女を見る。

・。・。・。視線が鋭い。

あれ?もしかして、なんか俺悪いことした?ていうか、まじなの?
「ここは私の部屋ですよ。何故あなたのような男というのがいるんです?」

やばいぞ、顔では作り笑いしてるけど、その笑顔の奥底に非常にまずい殺氣がある。

といふか、それは間違つてるぞ。少なくとも、ここは、俺とのつの部屋のはずだ。絶対イレギュラーはお前だ。だが、なにかの手違いで本当はこの人の部屋でした。または、あのばあさんにだまされました。なんてことが有り得ても不思議ではない。

なら、素直に謝つて、その上で聞かなければならない。

「すいませんでした。この部屋ならいと、宿のおばあさんに案内されたものでして。間違つっていたのですね。本当に申し訳ないです。

「えつ。」

ほんの一瞬の沈黙。彼女はベッドから飛び起きると、ドアを開け、外に出る。おそらく部屋があつてているのか確認しに行つたのだろう。そして、すぐに顔を真っ赤にして帰ってきて、

「・・・」

何があつたのだろうか。とりあえず、この様子だと、俺は悪くはなさそうだ。ちょっとだけほつと肩をなでおろす。

「まあ、突然のことだつたんだし、気にしないで。ちなみに、何があつたんだ？」

聞きはしたもの、だいたい推測はついている。彼女が間違つて、俺たちが合つてているという状況だ。

「・・・ここはミラと私の部屋です。」

うそだろ。おい。なんだ、この意味の分からないイベントは。これは、非常にまずくないか。せつきの赤面はもしかして、怒りのか。そして、田の前の少女は相変わらず、笑つてゐる。心の中がどうかということは別として。

「ハハハ。」

思わず笑つてしまつ。朝という一日の始まりが不幸から始まつそうな俺自身に。

そして、俺はこれから、どんなふうになるのだろうかと考へる。おそらく、答えは簡単だ。

そう、このままいくと、この少女に俺は殴り飛ばされるといつ展開にいたるであろう。

そう考えた後、俺の頭に彼女の拳が飛んできた。

そして、俺の脚が地面から舞い上がり、奥へと吹つ飛ぶ。

朝から不幸だ。そう思いながら、飛んでいき、向ひ側の壁に激突。

「いつてえ。」

起きたばかりでまともに働かなかつた頭はこの壁との激突によつて、どうやら稼動し始めたみたいだ。

そして、一番速い解決法を見出そつと考へる。それは何だ。

考える、俺。考えるんだ。待てよ、この部屋に案内したのはあのばあさんじゃねえか。それだったら、あのばあさんに聞けば、本当のことがわかり、解決法が見出せるんじゃないかな。

そう考えた俺は、いまだに残る壁に激突した際の頭痛が響くが、起き上がり、ゆっくりと歩き出す。

とりあえず、入り口のカウンターまで探しに行く。だが、そこにはたのは小さなねこだけで。

「つたぐ。どこにいるんだよ。あのばあさんは。」

意氣消沈した声で言う。しかし、ここにいないといふのはだいたい予測できていた。なぜなら、あのどじとも知れない場所から突然現れたようならばあさんだ。

そんな簡単な場所に。そして、そんなすぐには見つかることはないだろうと。

ならば、どうする。俺は昨日出合ったばかりのばあさんのこそりな場所について考える。

考えてはみるが、思いつかない。

ならば、どうする。決まってこる。この宿にあるすべての部屋を回つてみる。一応、あのばあさんは宿主のまは。なら、この宿を離れることはあまりないはず。

思いついたら、すぐ行動とくふうに行きたいところだが、踏みとどまる。

これで、いいのか。こう進んでいいのか。なぜだらうか、なぜここまで、これから行動が気がかりになるのだろうか。

理由はわからない。

だが、これから先の選択一つで、未来は変わるからではないかと俺は思う。この世界に来たのはマリアの死という未来を変えるためだ。そのためにならなければならない選択というものがある。

この世界は未来を変えることができる。それは、素晴らしいことだと思ははする。

だが、それは裏を返せば、この世界で間違つた、現実で不具合があ

るようなことになれば、現実でもそのようなことになる可能性があるということだ。そうなるのかは俺自身この世界について詳しく知らないから、どうとも言えない。

だが、それを考えたら、この単純なひとつの中の選択であのうと軽視することができない。

どの選択が、現実にどのような影響を与えるのかわからないのだから。もしかしたら、この選択による現実に対する影響はごくわずかかもしない。だが、非常に大きな可能性だつてある。

そう、人に未来を見ることはできないのだから。

だから、俺はもう一度考え方直す。この選択について。ばあさんを探すため、すべての部屋を回って時間を使うか、あの少女に謝つて、すぐにでも旅を再開するか。

そのどちらかを。

そして、それをすぐに決めなければならない。時間は止まつてはくれないから。

なら、俺は・・・

俺はもちろん旅をすぐに再開することを決意した。この旅の本当の理由を考えたら、当然のことだ。

とりあえず、今来た通りに戻つて、部屋に戻ることにする。あの少女に誤らなければならぬことを考へると、気持ちがだるくなるが、そんなことは言つていられない。

そこから、部屋までは本当は短い距離であつたが、俺には長く感じられた。それはそうだ。わざわざ、謝つて怒られるために、行くのだ。

それを考えたら、自然と体の動きも遅くなる。

何もなければ、俺は止まつていたかもしない。

だが、違う。何もないわけじゃないのだ。俺はこれからの旅でマリアの未来を変えなければならない。そのためには、この世界の地図を完成させる。

それで、メフィストになる。それが、本来の目的への過程なのだ。

だから、重くなる足を動かし、部屋の前まで行く。

そして、無造作に開けられたままの扉の中の部屋に入る。

「すまなかつた。俺が悪かつた。」

「素直に最初から謝ればいいのに。」

意外と優しい答えが返ってきた。本当に意外だつた。だつて、初対面の相手を殴り飛ばすようなやつだぞ。起こらないわけがないと思っていたのだが。

「許してくれるのか・・・。」

「ええ。それに、君の旅を手伝いたくなつた。」

予想だにしなかつた答えが俺に対して返ってくる。手伝いたくなつたという言葉が引っかかる。それは、つまり、俺の旅について知つたみたいな漢字ではないか。俺は单刀直入に聞くことにする。

「何故、俺たちが旅をしていることについて知つている。」

「その答えは簡単よ。あなたたちの身なり。そういう動きやすい服装をしていて、安い宿に泊まっていることから、考えたら、あなたたちは旅人ではないか。ということになるわ。それに、聞いたら答えてくれたから。」

そう言つて、隣にいる少女を指差す。そこにいたのは、もちろんのことながら、ミラであつた。

「アハハ・・・。」

ミラはちょっときまずそうに笑つてゐる。要は、ミラに聞いたが、聞いたというのは敗北感があるから、理由を適当に取り繕つたといつたところなのだろう。

「そうか、それで。だが、何故俺の旅を手伝いたくなつた?」

「それは、とりあえず、ミラが信じてゐるあなたが進む道を見てみたいからかな。」

そして、少し悲しげな顔をして、

「あなた、寝言を言つていたのが聞こえたから。私も寝ぼけてね。その時はその寝言を言つてゐるのはミラだと思つた。けど、朝になつてみると、そこにいたのは、君で。ミラとは真逆の位置にいた。」

その寝言の内容。未来を変えるという衝撃の内容。それを聞いたら、手伝わないわけにはいかないでしょ。

寝言で言つてしまっていたのか。俺としたことが不覚だ。だが、聞かれてしまつたのなら、しょうがない。

「じゃあ、一緒にくるのか？」

「ええ。一緒に行くわ。」

そうして、新たな仲間を迎えた。

三人の決断

その後、俺たちは考えた。とりあえず、どうやって、この世界の地図を完成させるかについて。

とりあえず、出た案は三つ。

一つ目、今分かっている地図の概略をこの世界の測量士に教えてもらひ。その上で、測量のギルドに協力を要請し、一緒に地図を完成させるという案。

一つ目の案として、この世界に存在すると言われるメフィストの魔法を習得し、地図を完成させること。

三つ目はの案として、このまま旅を続け、独力で地図を完成させる。一つの地域の地図を完成させるのとはわけが違う。そう、仮にも一つの世界の地図を完成させるのだ。

それから、考えると、この三番目の案は完成するのに何年かかるかわかったもんじやない。

そう考えると、妥当なのは一つ目の案か、二つ目の案というふうになってしまふわけだが・・・。だが、考え方によつては、一つ目の案が出来ないわけではない。おそらく、それが、この世界に来て、測量をさせるための理由なのだから。

この世界の時間は現実と比べて、六十倍の速さで進んでいるわけだから、仮に、六年かかったとしても、現実では一年なのだ。だが、それでも、時間が進んでいるのは変わりはない。ならば、この案はできれば避けたいところだ。

そして、一つ目について考えてみる。とりあえず、この案の長所について。人がかなり多く動員されるため、地図の完成はある程度時間がかかつたとしても、ある程度ですむことだ。さらに、もともとある完成された地図を使うことが出来ると言つ点だ。しかし、長所があるということは短所があるということだ。

この場合だと、測量士たちが持つてゐる地図を全て揃えるのに莫大

な金がかかるし、測量ギルドに依頼するためにも金がかかり、今持つていい金の量じゃ絶対に足りないということ。

そして、顔も知らないような人間に委託しなければならないこと。別に信頼できないわけじゃないが、こういうものは自分でやったほうがいいと思う。

二つ目の案に関しても考えてみる。とりあえず、この案の長所は、メフィストの魔法を習得すれば、すぐに地図が完成すること。だが、それは短所もある。そのメフィストの魔法が習得できなければ話にならないと言つことなのだ。

ここは、大きな選択になるとと思う。前の選択によって、ここまで来ることが出来た。だが、あの選択に関してはここに至るまでの時間が変わるだけで、おそらく、今の状態まで至つていただろう。だが、今回は違う。今回は、なぜなら、今回的方法次第で、地図そのものが完成するか否か自体が変わつて来るのだ。

だから、これは本当に誤つた選択をしてはならない。だから、俺が生きて培つてきた脳をフルに使って思考する。本当に、ベストな選択はどれなのかを。

そして、一つのことを閃く。そう、これが、本当に俺が望んだ世界なら、俺の望みはメフィストになつて、マリアを救うことだ。なら、この世界に、その魔法を習得するための方法も存在するだろう。俺は決める。これから、先の俺の運命ともいうべき道を。

「じゃあ、一番目の案でいく。メフィストに会つて、そのメフィストの特殊な魔法とやらを、習得させてもらつ。」

「そう。分かつた。」

二人同時に言う。そして、俺は後ろに体を向け、歩き出す。これら、メフィストを探す。そう決意して。だが、俺は聞き逃さなかつた。二人のかすかな声での呴きを。

「また、同じ道をあなたは進むのね。」

という理解できない一言を。これに関してはつきり言って意味が分からぬ。だが、聞いたところで教えてはくれないだろう。そう

感じる。なら、これについても自分で考えなければならないだらう。だが、来るべき時が来れば、二人から聞ける。そんな気がする。だから、一旦忘れることにする。

そう、決断した俺には、立ち止まって、考へてゐる時間も、おしかつたのだ。

そうして、メフィストを探すための作業に取り掛かり始めた。とりあえず、ここは城下町なので、大きな図書館ぐらいはあるはずだ。そう思い、俺は図書館を探し始めた。そして、探してゐる最中なのだが、日が暮れ始めている。思つてゐたより、この城下町は広かつた。一日かけて回りきることが出来ないとは想定外だ。

「どんだけ、広いんだよ。全く。」

そんな誰も聞く人のいない中、一人で呟く。

ここで、図書館を手つ取り早く見つける方法を思いつく。人に聞けばいいのだ。何故、こんな簡単なことに気付かなかつたのだろうか。理由は、簡単に思いついた。そう、俺が幼いころから、人との付き合いが少なかつた。そして、それが、そんな簡単なことに気付けなくなるような足かせになるとは。

だが、今は、そんなことを気にしてゐる場合ではない。
とりあえず、思いついたのだから、すぐ、実行。といきたいところなので、周りを見渡す。

すると、頑丈そうな重装備に身を固め、馬に乗つてゐる一人の騎士がいた。他には、井戸の水を汲んでいる人、木の上で寝てゐる人、逆立ちをしながら、歩くというよく分からぬやつ等がいた。

とりあえず、この国のことだつたら、ああいう騎士にでも聞けば、図書館の場所くらい分かるはずだ。

「すみません。図書館の場所を教えてくれませんか。」

「ああ。つたく何だよ。今。休憩中なん……すみません。閣下でしたか。城まで護衛させてもらいます。」

わけがわからない。俺が……閣下？ 閣下ってのはあれか。王様という立ち位置のあれなのか。いやいやいや、ありえねえだろ第一、

俺とこいつは初対面だし。

こいつの勘違いか？だが、さすがにねえだろ。

国のトップを間違えるなんて。

どんなにサボりであろうと、一応は騎士だぞ。そいつがそんなこと。
・・。

とりあえず、このまま連れて行かれるのは避けたいわけだが。そんな俺の思いとは裏腹に、こいつは、どうしても、連れて行きたいみたいだ。

こいつをこじで、さくっと気絶させてもいいが、さすがに、かわいそうだ。

なら、いっそ、付いて行つてしまおう。そう考えた俺は、その騎士の後に続く。周りを見渡すと、ミラとあの少女・・・名前を聞いていなかつたな・・・が遠くにいた。俺は軽く一人に目線で行つてくると伝える。その目線に対し、彼女たちはうなずき返してくる。そして、間違つてもドタバタ騒ぎは起こすなよといつ視線と、何が起ころうと死なないでという視線が送られてくる。

俺もそれに対して、思うことはあつたが、何も言わず、その騎士について行くこととした。

そういうふうなことがあって、今俺は城にいるわけだが・・・。これは一体どういうことなんだ？

「何故、俺が一人もいる？」

驚きのあまり、口に出してしまつ。だが、そんなことは気にしない。いや、気出来るほどの余裕はない。だって、自分が一人もいるのだ。そんなことがあつたら、普通、落ち着いていられないだろう。だが、すぐにその動搖も押さえ込む。そして、この現象について、自分なりの思考を開拓する。

とりあえず、これが幻影であるパターン。

二つ目に、この世界においての俺がこいつで、現実世界における俺が俺であるというパターン。

三つ目には、こいつらは俺を語る偽者というパターン。

他にも色々考えついたが、まだ可能性がありそうなのは、この三つだけだ。一番確率が高いと考えられるのは、二つ目のパターンのこの世界の俺ということだろう。

なぜなら、この世界において、こいつは王だ。そんなやつが偽者でしたなんてことがまず有り得ない。それに、偽者ではない気がする。そして幻にしては効果範囲が広すぎるし、俺が発動に気づかないほど高度な魔法使えるやつは早々にはいないからだ。

このような理由を基に考えると、この二つのパターンが一番妥当だと考えられる。だが、そうだと、説明がつかないことが出てくる。同じ時間に同じ人物が違う場所で存在しているということになると、いうことだ。これに関して考えた場合、問題なのは、普通は俺といふことだ。この世界には存在できないはずだ。まあ、これも仮説なわけだが。そう、それが起きているということについてだ。だが、これについては考えていても仕方がないだろう。なぜなら、ここは俺が望んだ世界であり、メフィストの夢であるのだ。何が起

こつても、はつきり言つて不思議ではない。

考えるのはここいらへんにして、もう一人の俺と話すことにする。

「よお。とりあえず、お前は誰だ。」

ところの事態の本質を聞いてみる。もしかしたら、答えてくれるかもしない。そして、これが、もう一人の俺だったら、返つてくれる答えは決まっている。そう、この会話はこれが本当に俺なのか確かめるためのものだ。

「お前こそ何だ。」

予想通りの答え。だが、これだけでは確定しない。だから、もう少し続けてみると、判断していくと考える。

「いいだろう、答えてやつてもいいが、お前に一つ聞く。お前の真の生きる目的を教えてくれ。」

これが、俺かどうか判断するためのキークエスチョンだ。そう、俺なら・・・。答えが予想できるから。

「アハハハ。面白い質問をしてくるやつだな。いいだろう。その質問にこたえてやろう。その代わり、お前に対してもその問い合わせを要求する。その質問の答えは、ある黒髪の女を守り続けることだ。」

目の前にいる俺は俺がなにがしたいのか感づいたようだった。

やつの質問の答えからして、ここはこの世界での俺だ。

この世界が俺の望んだ世界なら、この世界の俺はマリアの未来をえることに成功しているはずだ。それはつまり、これから先、マリアを守り続けることを意味する。

「そりが、やはり、お前は・・・。俺の目的はある黒髪の女の未来を変えることだ。だから、お前に頼みがある。」

マリアの未来を変えることに成功していることはつまり、俺がメフィストになつていていることも指す。だから、俺は頼む。

「何だ、言つてみろ。」

「メフィストの魔法を教えてくれ。」

すると、目の前の俺はだれも気付かないような一瞬だけ悲しそうな

顔をして、言つ。

「ああ、いいだろ。だが、これを習得することは、分かつてていると思うが、過酷なものになるぞ。」

「ああ、いい。それが、マリアの先に待つ腐った未来を壊すためのてだてになるなら、俺は何でもしよう。」

そう、必ず。必ず、俺がなんとかしてみせる。そう、心に誓つ。

「・・・。」

目の前の俺は何かい言いたそうに見えたが、何も言わなかつた。

そして、その日から、三日間みっちり俺は俺にじこかれた。身体

的にも精神的にも。

思い出したくないぐらい苦痛を強いられるものだつた。

だが、それのおかげで、俺はそのメフィストに託されている魔法を習得した。いや、違う。今回したのは、その魔法を受け入れることができるようにするために鍛え上げたのだ。

メフィストの魔法はもともと、人間が持つてゐる力なのだ。ただ、それを使う方法と、それを使えるだけの身体と精神がないだけで。一応、彼はもう、使えるだけの状態にはなつたとは言つが、はつきり言つて、よくわからない。だが、それが最初に使つときには普通なのだという。

そして、ミラとあの日出会つた少女、アリシアが見守る中、俺は魔方陣を描く。この魔法は地面に魔方陣を描く必要があるのだという。理由はわかりやすい。

地図を得るということは大地の情報を得るということなのだ。それは、つまり、大地から力を借りるということ。それと、人間のもともと持つものを組み合わせるということを指す。

「汝、なにゆえ地図を求める。」

大地の声が聞こえる。地面から這い上がつてくる声。耳に残り響く低く、冷たい声。

始まつた。今、これより俺と大地の精神比べの始まりといったところか。俺は思考を、現実から切り離し、大地と俺だけの思考に集中

させる。五感から伝達される信号の一つ一つを止める。

「俺は、あの世界を変えるために。現実世界をこの世界に導くために地図を求める。」

「それが、不可能な世界への地図だとしてもか?」

俺は心の中で、震撼し、今の言葉がぐるぐるとまわる。それが、不可能な世界への地図だとしてもか?その言葉が持つであろう意味は明白だ。この世界には現実の世界はなりはしないといつことだ。

だが、そうだとしても……。

「俺はこの世界まで、導いてみせる。それが、メフィストの真の役目だから。」

「ほう。そのような答えを聞いたメフィストは初めてだ。いいだろう、この世界の地図託してやる。だが、いいな。その役目忘れるなよ。」

そう言つと、俺の目の前に光が集まる。あまりの眩しさに目を開じる。ようやく、眩しくなくなつた。そう思い、目を開けると、その先には一つの地図があった。

それを広げてみると、そこに広がっていたのは、大きな大きなこの世界の地図だった。それは、細かいところまで、記されている。住宅街があれば、それが誰の家なのかといったことまでだ。

地図は完成した。これで、俺は晴れてメフィストだ。

「来いよ、レイアン。」

「呼んだか?」

そう背後から声が聞こえる。全く毎度のことながら、何でこう気配を消して現れたがるんだか。そう思いはするが、口にはしない。

空気の振動源を探す。すると、やはり声のした方向ではなく、目の前が振動していた。さらに言つと、声のトーンがかなり変わつている気がする。まるで、若返ったような、そんな感じだ。

だが、そんなことにはもう驚きはない。メフィストに対しても常識を持つて、接したところで、意味がないのだ。

だから、俺はそのまま会話を続ける。

「「」の世界の地図を完成させたぞ。」

「おや、思つていたより早くできたな。」

「ああ。」

「そいつが、見せてもらおうつか。」

俺は手に持つていた地図をやつに手渡す。

「ふむふむ。よし・・・オーケーだ。この地図は完璧だ。これで、君も晴れてメフィストだ。」

ようやく、なることが出来た。これで、俺は・・・未来を変えることが出来る。そう、だから。

「ああ、じゃあ、これから、好きにさせてもらひや。」

「ああ、別にかまわない。」

そう言つて、男は消えていく。まだ。また、この男は、姿も残らず、消えていく。だが、もうそんなことはどうでも良かつた。

ようやく、俺はメフィストになることが出来た。だから、しなければならないことがある。

そう、未来を変える。俺の望んだ「」の世界を現実にする。一人の少女を救うために。

繰り返される世界

メフィストになつた今なら感じじる。『ひざひつて、未来を変えるのか。その方法を。そして、この世界は現実と切り離された世界でないことを。

それは、つまり、この世界で起つしたことは向こうの世界で起きることがあるといふことなのだ。

そり、つまり、罪のない人々を殺してきた暗殺者のやつを、こので、倒すことが出来れば、向こうの世界のやつにも影響を与えるといつこと。それが、この世界での効果。

今の俺なら、やつと戦うことが出来るかもしれない。

そして、この世界の地図を完成させることのできるメフィストの魔法の力を習得した俺なら、この世界のやつの居場所が分かる。そう、さつきの地図製作の際に調べておいた。

ここから、東に半日ほど歩いたところにある町にやつはいる。ルーフォン、それがその町の名。その町の名を思い出した瞬間、急に頭痛が走る。だが、まるで、何事もなかつたかのように、耐える。「俺は今から、目的を果たしに行く。お前たちはどうする?」

そう、一人の少女に尋ねる。

「その前に話があるわ。そう、今から行く町について。」

「ああ、だが、後じや駄目なのか?」

「ええ、今じゃないと。」

そう言つて、ミリは語りだした

「この町はもともと、ある程度栄えていた町だつたらしくよ。だけど、この町は廃れてしまつた。何故だか分かる?」

ミリは俺に対して、問いかけを提示してくる。

「つーんと。この町の家には崩れてる場所が少々見られる。それから考へると、戦争に巻き込まれたとか、そんなところだろ。」

「正解だけど、不正解もある。まあ、半分正解といったところか

な。この町は、ブラックギルドと、ホワイトセブンの対決、いや、戦争といつていいぐらいのことが起きたの。」

ブラックギルドと、ホワイトセブンの二つの勢力の対決か・・・。それを聴いた瞬間、また、一筋の痛みが走る。

この世界に来てからの徹夜での情報収集で得た情報の中にも、そんな二つの勢力があつたな。確か、ホワイトセブンは確か王の直属の七人の戦士で、ブラックギルドは暗殺や窃盗を主とする裏ギルドだつたはずだ。確かに、ホワイトセブンがゆく戦場は全てがリセットされたかのごとく、生きたものはいなくなる。そして、ブラックギルドに関しては、現れたら、周りは血で染まるという。はつきり言つて、どちらもいわくつきの集団だ。

ただし、人数で言つなら、ギルドといつぐらいだから、ブラックギルドの方が多い。

ゆえに、ホワイトセブンもまだまだ、殲滅は出来ていないとのことだつたが。

「その戦争は、恐ろしい被害を生んだわ。家は消し飛び、辺りには毒液の蒸発した跡が残り、そして、小さな村一個が入りそうなくらいの、でかい穴が開いたわ。」

ミラは悲しそうに言う。そりや、そうだろう。この町で、人が大量に死んだのだ。だれだつて悲しくはなるだろつ。

それにしても、村一個が、入るような大穴を開けるなんて、どんなだけ、規模のでかい戦闘しているんだよ。

そりや・・・戦争と言いたくなるな・・・。

「それでも、この町は再び立ち上がる事が出来る・・・はずだつた。資金の問題はなかつた。そのときには充分すぎるぐらいあつたから。」

「なら、何故なんだ。ある程度栄えている町だつたら、そのまま再建するだろ。」

普通はこう思う。だが、何かイレギュラーなことが起こつたのだろう。

「何も起こらなければ……ね。だけど、その何かが起きた。そう、その戦争で戦っていた一方の勢力、ブラックギルドの中でも、一番最前線で戦っていたブレイトイドがその町に拠点を敷いた。」

「ブレイトイドだ……と……。」

ブレイトイド、それは、俺が現実で最後に戦った敵。暗殺ギルド。やつらの強さは半端じゃなかつた。いや、正確には勝てなかつた。そんなやつらが来たのなら……。

今の中にも頷くことが出来る。

だが、話を聞くたび、俺の頭の痛みはいつそつ増していった。なぜだ。いつたい。

「そう、そのせいで、町民は逃げ出した。もちろん、戦つた人たちもいたよう。でも、その人たちは殺された。そして、あなたの目的の人がそこにいるのなら、その人はブレイトイドの一員のはずよ。」

「そつなのかな、やつらの中に、俺の標的である『終焉の騎士』がいるのか。」

だとしたら、俺はやつを倒すことが出来るのだらうか？

俺はある組織に負けた。そんな俺にやつは倒せるのか？だが、やらねば、ならない。必ず。

「そつかな、だとしても、俺は行く。」

「なに、ばかなこと言つてんのよ。行つても、勝てるわけないでしょ。」

アリシアの叫び声は響き渡る。

この言葉……前にも言われた気が……
何故だ。この会話を聞くたび、頭痛は、ひどくなつていぐ。何かあるのか、この会話には。一体何が。

考えていくうちに、三つの単語がループし始める。ルーフォン、ブレイトイド、終焉の騎士……。
ループするたび、頭痛はひどくなつていぐ。

だが、俺はそれでも、その繰り返しを決してやめない。頭痛はつい

には、自分自身では立てないほどまでになつてくる。そして、前に

倒れる。

だが、俺の体が地面に触ることはなかつた。

支えられている。誰に？ そうか、この手は、ミラとアリシアか。二

人が支えてくれてるなら、体は大丈夫だ。

「すまない。俺の体任せた。」

「うん。」

「いいわよ。」

二人の返事を完全に聞いている余裕はない。ただ、頭の中で単語を繰り返す、それだけの作業。

それなのに、やけに、しんどい。

そして、頭を銃で撃ちぬかれたような頭痛の波が走る。それらの単語の先にあつた壁を粉々に破壊していく。

そして、思い出す。忘れさせられた記憶を。そう、俺が前に終焉の騎士に体を、上下に真つ二つにされ、殺されたこと。単純に後ろから串刺しにされて、殺されたこと。

何回も、終焉の騎士に殺される俺の記憶。

一度たりとも勝つことが出来なかつた俺の記憶。

マリアの未来を変えられなかつた俺の記憶。

「アハハハハ・・・・。アハハハハハハ・・・・。」

もう、笑うしかなかつた。全て、俺がこの世界で、終焉の騎士に挑むが、殺されるという絶望的な記憶だから。

当然だ。今の自分と同じように、終焉の騎士を倒そうした自分が何人もいた。だが、それらは全て、どんな手を使おうと殺されているのだ。

なら、どうすればいいというのだ。

こんな絶望的な状況で。

「ようやく、思い出したみたいね。」

突然、横から声が聞こえる。一体誰だ。左右を交互に見る。そこには、見慣れたミラとアリシアがいた。そうか、確か俺の体はミラと

アリシアに支えてもらつてているんだった。そんなことも忘れてしまったほど、俺はあせっていた。

「お前が初めてだよ。ずっと繰り返されてきたこのお前の世界で、その記憶の存在に気付いたお前は。」

「うか・・・。だから、ミラたちは俺にあんな言葉を・・・。俺は同じことを繰り返してきたのか。そう、勝てずに殺されるという単純なループのなかで。」

「お前はここで何回繰り返してきているか分かるか。」

突然の質問。数えてみようとする。だが、浮かびはするものの、数が多すぎて考えられない。一体何回俺は死んでいるんだ・・・。

「分からぬ。数が多くすぎて、数えられない。」

「まあ、そうだろうな。現実の世界で、三年の時が流れている。これが、どういう意味を指すか分かるよな。そう、この世界では百八十年の時が流れている。そして、君の一回殺されるまでのループが平均五日間だ。それから、一体何回お前が何回殺されたかの回数が分かるはずだ。何回か分かるか?」

アリシアに言われて、はっとする。現実では三年のときが流れている・・・だと。俺はマリアを三年も待たせているのか。俺は一体何をやつてんだよ。

何で、一万三千百四十回も戦つて、一度たりとも勝ててないんだよ。運命は俺のことを呪つているのか・・・?
そして、答える。

「一万一万三千百四十回といつたところだらう。」

「ええ、そうよ。」

何故、俺は生きている?そんな素朴な疑問が生まれた。おかしいはずだ。なぜなら、俺はこの世界で、何度も死んでいるのに生きている。

「おれは何故生きている。俺は殺されたんじゃないのか?」

「いいことを聞くな。お前はメフィストになった。それゆえに、お前は不死身の存在となつた。いや、ちょっと正確ではないな。この

世界でお前は、死んでも死にはするが、死にはしないという存在になつたのだ。そして、何故かは分からぬけど、メフィストになつた最初のころはこのことに気付かせないために、死んだ際に、記憶が消えるようになつてゐる。そう、メフィストの夢に入つてからの記憶をな。そして、その記憶の存在に気付くことが出来るようになつてからは、死んでも記憶は消えない。そう、メフィストとして覚醒したということだ。』

「そりゃ、だいたい、仕組みは分かつた。』

俺は。要するに、俺はこの世界では一定時間が過ぎれば、蘇生するといったところだろう。

俺のこの世界での時間はこの世界にいる限り永遠に進まないといつてもおかしくない状況だ。だが、現実ではこの世界よりはるかに遅い速度だが、進み続けている。おそらく、俺がこの世界で、やつを倒さねば、現実には戻れないだろう。

なら、これから、俺の記憶を元に勝つための戦略を練つていこうではないか。次は必ず勝つために。

「よし、今から、しばらく、やつに勝つための作戦でも練るか。』

「ええ。』

「いいわよ。』

そう言って、俺たちは地面に座り込んだ。

反撃の兆し

「とりあえず、向こうは暗殺ギルド。つまり、大人数だ。それに対抗するにはどうしたらいい?」

「一応、相手が暗殺ギルドである以上、こっちの半端な勢力程度じゃ、私たちは殺されるわ。」

分かつてはいたが、明らかにこちらが劣勢だ。そうだとすると、どうすればいい?自分の中で問答する。

「ねえ、それなら、ホワイトセブン辺りに頼むのはどう?それだったら、暗殺ギルドとともにやり合えると思うけど。」

「だが、仮にそいつらに頼むとしよう。そいつらは俺たちによつなどこの馬の骨とも知れぬやつらの手助けなんかするか?」

そう言つと、ミリは深く考え込み、黙つてしまつ。だが、その代わりにアリシアが、俺に言つ。

「それは実際に行ってみたら、分かるわよ。」

「なぜそうだと切れる?」

「そんなの簡単よ。勘よ。私のね。」

俺は唖然とする。適当にもほどがあるだろ。だからといって、俺にわかることではないし、案がない。

「勘・・・か・・・他・・・。」

とりあえず、そこまで深く触れずに、華麗にスルー。

「華麗にスルー かましてんじゃねぞ。」

ミスつた。まさか、軽くでも怒るとは思いもしなかつた。だが、ここで、謝るのもこっちの面がない。

「じゃあ、他。」

俺の心の中で開催される議会では、スルーし始めたら最後まで。といふふうに賛成多数で、決定した。

「・・・。」

決定し、実行したまではいい。どうせつて、この冷酷な怒りの視線

を送り込んで来ているやつはこつたいたいどうある？議会の議題はすぐさま、それに入れ替わる。

「こまま、スルーしよう。」

とこり案も俺の心の中の評議会では出でてくる。
だが、さすがに、今回は賛成多数というわけにはいかない。なぜなら、この後、無視すればどうなるか分かつているやつが多数だからだろう。

「そんなことして、どうなるか、分かつてこるだろ。」

「ああ。分かつてこら。だからこそだ。俺の本質はエムだ。」

その一言の瞬間に、議会中が静まり返る。

そして、その発言をしたやつに対し、「うわあ、こいつ何言つてんの。」という視線を送り込む。

それによつて、あんなにガンガン言つていたやつが静まり返る。

「とりあえず、スルーをもう一度したら、俺に命はないと思つたほうがよせやうだと思うが、みなはどう思つ？」

静寂に包まれた評議会がその一言で、あの発言の前の状態、つまり、お互いで話しかけている状態に戻る。

「とりあえず、謝るのが妥当かと。」

「だが、それはわがプライドが許せん。」

その発言後、そいつは両隣、そして、前後、周囲に座つてこるやつらに、叩きのめされた。それは当然だ。プライドなんかより、今は生き残らせることができる命を選ぶのが普通の精神であろう。なぜ、あんな発言をするバカがいるのだろうか、全くもつて分からぬ。

「みな、多数決を取る。こまま、謝るでいいとおもうやつ、手を挙げる。」

みんな、一齊に手が挙がる。これはぱっと見ただけでも、過半数は軽く超えているだろう。

「よし。じゃあ、謝るに決定。それじゃ、現実の俺頑張れ。」

そうして、俺の心中評議会は終了した。

「すまなかつた。」

俺の中で開かれた議会の決定どおり、心を込めて、本当に申し訳ないという気持ちで謝る。これで、許してはもらえないだろうが、生きてはいられるだろ？

だが、その数秒後、俺は悟る。現実はそんなに甘くはないのだとうことを。

鳩尾の部分に鉄拳がフルで入る。そして、俺の体は宙を舞う。いや、宙を舞うという表現は正しくないな。宙をきる。そんな言葉はないが、それが正しいのであらうと思わせられるほど、吹っ飛ばされた。

木に衝突したかと思ったら、かかと落としが脳天に直撃。意識が完全に飛んでしまってそうになる。

だが、それをこらえて、意識を保つ。

それも束の間、次にもう一度鉄拳が飛んでくる。今回は狙いが頭だつたので、気合で何とか避ける。

風を切る音。

何かが木に突き刺さる鈍い音。

木が向こう側に向かつて倒れる非常にやばい音。

俺・・・さっきので、意識失つてたら・・・死んでたんじやね・・・。

今になつて体に急な寒気が走る。

「すまなかつた。すまなかつたつて。俺が悪かつた。俺が悪かつたです。」

必死に謝る俺。それを上から見下ろすアリシア。その一人を遠目で見ながら、空を見ながら、空は青いなあと呟く//。//。

そんな異様な光景がそれから、一時間続いた。
なんとか、一時間を乗り切った俺は、いまだ、機嫌が悪いアリシアとなんか空をずっと見ていたミラに声をかける。

「おーい。そろそろ、話し合いを再開しようぜ。」

「次、スルーしたら、どうなるか分かつていいわよね。」

「ええ。分かつてます。」

さすがに、もう、俺は何もいえない。本当に、次は……俺が生きているかどうかに関わってくるだらうから……。

とりあえず、そちらはさておき、ミラからの返事がない。一体、さつきからずつと、空を眺めて、どうしたのだろうか。

「おーい。ミラ……。」

「・・・。」

まだ、返事はない。ならば、近くに行つて、もう一度呼んでみることにするか。そう決めると、ミラの方向に向かつて歩き出す。

そして、ミラのすぐ近くまで来ると、もう一度言ひ。

「おーい。ミラ……。」

「ふおえ。」

突拍子もない声を出して、俺のほうを向く。どうやら、意識が別の世界に行つていたみたいだ。

そして、赤面すると、どこかへ行つてしまつた。

なんか、最初出合つてから、ミラのだいたいの感じはつかめてきたと思っていたが、こんな一面があるとは意外であった。普段の彼女からは、想像が出来ない。

とりあえず、俺から見た彼女は優しく導いてくれるしつかりしたやつだったのだ。さすがに、そこから、こんなイメージは出でこない。そんなこんな思つてこらへ、向ひつからミラが歩いて帰つてきた。

「どうしたんだ？」

「なんか、意識が別のところに行つてたみたい。」

やつぱりか、そう心の中で納得する。

「どんなところに意識は行つてたんだ？」

「見渡す限り、青い青い空しかないといつといひ。すごく綺麗だったよ。一人だったら、おそらく、ずっとあそこに意識が行つたままだつたりしたんじゃないかな。」

「それはすげえなあ。俺もそこ見てみたいなあ。」

俺は純粹にそう思つた。周りに雲がなくて青い空しかないとて光景

を想像したら、最高でたまらない。

「どんな感じでいいと思うの？」

「だつて、考えてみるよ。広大な空が雲もなく、青一面なんだぜ。なんか、自由な感じとかするじゃんか。それに、単に、見ているだけで、最高なんだよ。そういう、美しい景色つてのは。」

そう、俺は自由、いや安定を望んでいるのかもしれない。そのため、俺はまだ進まなくてはならない。

そして、俺たちは考えた。

勝つための方法を。

そして、俺は思いつく。だが、隣の一人には詳しくは話さない。いや、話せない。なぜなら、それは俺の記憶から導き出された答えで正しいかはまだわからないから。

「おー。ミラ、アリシア。俺、思いついたぞ。だが、内容については伏せておく。そして、今から言うことをやつてくれないか？」「ええ。その前にちゃんとした説明をね。」

ミラから迫られる。顔から息がかかるほどに。だが、俺はそんなことは気にしないで、話を進める。

「すまない。今は話せないんだ。本当にすまない。」

俺はいつになく真剣な顔で言つ。その顔を見たミラとアリシアはともに大きなため息をつくと、

「仕方ないわね。」

「しゃあねえなあ。」

と言い、俺に対しても同意をしてくれる。

いつの間にか、俺を信用し、ついてきてくれるやつらがいる。昔と俺は少しづつだけれど、変わってきていくようつだ。そう、それも、マリアのおかげ。

マリアがいたから、俺は変わることが出来たのだ。

あのときの俺に対して、声をかけ、救ってくれたマリア。

「今度は俺がお前を救う番だ。」

青く広い空に向かって、そう呟く。

「ん。なんか言つたか？」

「いや。言つてねえよ。じゃあ、とりあえず、これから動きについて話す。」

「分かったわ。」

「了解だ。」

「では、作戦について説明させてもらひ。今回の作戦において、一番の目的は終焉の騎士、やつを倒すことにある。だが、その上で障害と成り得るものがある。それが何が分かるな。」

「ブレイツド。」

その名を聞くのも、言つのも、もう、いやなものだ。なぜなら、俺だけではなく、他にも様々な人が暗殺されかけたり、暗殺されてしまつたりするのだ。そんなやつらのことを口に出して、思い出したくもない。今はそれでも、そいつらと向かい合わなくてはならないのだ。

「ああ、そうだ。ブレイツド。そいらが壁となる。その巨大な勢力を俺たちだけでは潰すことはできない。ならば、こちらも勢力を増やせばいい。ホワイトセブンはよく考えてみれば、王の直属の戦士だ。俺から頼み込めば、容認してくれるはずだ。」

「どうから、そんな自信が出てくんだけ。最初に言つたのは私が、あれに頼むのは、不可能だ。」

確かにそんなことをアリシアが『冗談で言つていたのは分かる。だが、それは、よく考えてみると、実現可能のことなのだ。今の状況でなければ不可能ことなのだ。』

「ああ、普通はな。だが、この世界は違うだろ。この世界の王は俺の願いをこの世界で叶えた俺だ。それなら、やつは俺に対しても手助けしてくれるはずだ。そう、これが俺の望んだ世界なら。」

「ふうーん。面白いことを考へるのね。確かによくよく考へると、そつなるわね。」

「確かに、そうだが、本当に協力するのかね。この世界でのお前は。」

「それだけなら、俺たちに協力しないかもしれない。だからこそブレイトッドなんだよ。先のルーフェンの戦いを思い浮かべてくれ。」

「ミラとアリシアは少しの間だけ、考え込むと、俺の考えが分かったかのような顔で、俺を見る。

「そうだ。やつらはその戦いでブレイトッドに勝てとはいえない。それなら、話は早い。やつらにもう一度、ブレイトッドと戦わせるんだ。俺自身のことは俺のことが、良く分かつて。俺は言わずとも分かるとは思うが、負けず嫌いだ。」

うんうんと深々とうなづく一人。普通の状況なら、ここまで頷かれてしまふと否定したくなるものだが、今回は自分で言つたことなので何も言わない。

「つまり、なんとかして、この世界の俺もブレイトッドを潰したいはずだ。だが、その機会がない。そして、終焉の騎士がいることを知っているから、手出しが出来ないのである。それなら、終焉の騎士を俺が何とかして、ブレイトッド殲滅の機会を『えてやればいいってことだ。』

そして、俺の話は続く。

「ミラ、アリシア。お前らには、この世界の俺との交渉を頼みたい。交渉については多分、今話したとおりで充分なはずだ。明日の早朝、太陽が昇り始めたときぐらいに、にここに集合。」

そう言って、西に見える純白の城を指差す。

「わかったわ。」

「了解した。」

そう言つと、一人は西に向かつて歩き出す。

たとえ、交渉相手がこの世界の俺であつたとしても、完璧に信用できるわけがない。

それゆえに、ミラ一人ではなく、アリシアも命じたわけだが、何とかしてくれるだろうか。いや、何とかしてもらわねば。やつらは俺を信用して、行つてくれたんだ。

それなら、それを有効に使えるよつと、俺は俺の進むべき道を進むのみだ。たとえそれが、戦争と言ひやうの茨の道であろうと。

思わぬ再会

「さて、と。そろそろ、俺も動くとしますかね。」

まず、テレポを使い、俺に禁法を教えた男、ロドスに支援を求めることにした。

師の研究所の扉の前まで来ると、一度扉を叩いた。扉の中から返つてくる声はなく、沈黙がしばらく続いた。

留守なのか・・・あまりにも長い沈黙は俺に対して、そんな予感を想起させた。

だが、その永遠に続くかと思われた沈黙も、あの頃聞いていた眠そ
うな声でかき消された。

「ふあーあ。やあ。」

「ういっす。お久です。」

この人は相変わらずだ。こんなに時が流れているというのに、全然
変わっていない。眠そうにたるんだ目にだるそうに曲がった腰。だ
が、今はかつての師を懐かしんでいる場合ではない。俺はこの人に
協力をしてもらひるために交渉に来たのだ。

「えつと・・・」

「ええ。言いたいことはだいたい分かつてるよ。」うだる。『師匠。』
俺もうこんなに大きくなつて、こんな女性を連れて歩けるようにな
つたんですよ。俺たち結婚するんですよ。てへ。』みたいな感じだ
る?』

「師匠。すんませんが、一度・・・宙に舞え。」

言つまでもなく、宣言どおりロードスは宙を舞い、地面に叩きつけら
れた。

「つたぐ。ていうか、こんな女性ってどんな女性だよ。」

俺はそう、ぼそっと呟くと、師匠は力なく指で俺の後ろを指した。
そんなバカみたいなというよりバカな師匠はほつといて、振り返る
と、そこには見慣れた黒髪の少女がいた。

俺は、久々にマリアを見て、心になんとも言えぬ感情が渦巻く。この世界のマリアは死という未来を避けている。それはいいことだ。だが、彼女を見ると、現実にいる彼女を思い出してしまう。そう、彼女自身は知らないが、彼女は殺されるという未来から開放されていないのだ。その事実を知らないで、俺が眠りにつき、一週間、一ヶ月、一年、そして、三年の月日が流れていった。彼女はまだ俺のことを持つてくれているのだろうか。もう、三年にもなることをさつき知った。三年。それはなにも知らずにただ、待ち続けるにはつらい日々であろう。

そんなつらい日々の中で、今になつても待つてくれているのだろうか。だが、待つてくれていようと、待つてくれていなかろうと、俺には関係ない。ただ、俺はマリアを想い、慕い、愛している。

そして、マリアも俺のことを愛してくれていた。

ただ、それだけでいいのだ。

お互いのことを想つていれば、たとえ離れ離れになつたとしても・。

「やあ、マリア。」

「やつほー。クッスー。」

「今日はどうしたんだ？」

「今日はね、クッスーがブレイティッドと戦うつて聞いたから、戦争で勝つために仲間として、加わろうかなと思つてね。もう覚悟はできているよ。クッスーのためだつたら、戦える。」

なん・・・だと・・・。マリアがこの戦争に加わるだと・・・。確かに、マリアがこの戦争に加われば、かなり戦力が増すだろう。だが、だとしても、マリアをあの戦場には連れては行けない。もう、マリアがあんなふうに血だらけになつて倒れる姿は見たくないんだ

「だめだ。マリア。君はこの戦争には来ないでくれ。」

「でも・・・。」

「でもはなしだ。もう、俺はお前が傷つくのは見たくないんだよ。」

「クッスー……。ごめんね。この戦いも私のためのものなんですよ？現実かこの私かは分からないうけど。私……、何で、こんなにクッスーに助けられているんだろう。自分のことは自分でなんとかしなきゃいけないのに。」

マリアは言葉どおり無力な自分を悔いるように、力なく呟く。

「そんなことはないさ。マリアは無力なんかじゃない。今の俺があるのは、マリアのおかげだし。この世界にやつて来れたのも、マリアのおかげだ。そして、マリアは無力でもいいんだよ。好きな女を守るつてのは男の特権つてもんだ。」

俺は後半になつていいくにつれて、自分で顔が頬が紅潮していくのが、分かるほどになつていった。

そんな俺を見て、マリアは一笑いすると、言った。

「そりなんだ。じゃあ、私の大好きな王子様。私を救つてね。」

そんな言葉に、一人とも、頬を紅潮させる。

「ああ。救つてみせるさ。こんなかわいいお姫様をな。」

「あの……。お一人さんラブラブですね。」

さつきまで、地面に倒れていた俺の師はいつのまにか起き上がりついた。

「さつきの会話きいていたんですね……」

「一人そろつて、同じことを言う。」

「あ……ああ。そうだけど。」

「じゃあ、今すぐ記憶からそれを消しましょつか。」

「えつと……。それは無理じゃないかな……。」

「無理ならいいです。これから、ちょっとした制裁を加えることで、強制的に忘れさせますから。アハ。」

さすがに俺たちの言葉にかなりの危険な感じであつたのを感じたのかあせりだす師。弟子に制裁加えられる師匠つて一体……。そう思つたが、遠慮するつもりはない。

「わかった。分かった。今、忘れた。忘れたよ、うん。いやあ、忘れちゃったなあ。何だつたけ？」

「そんな嘘見え見えです。」

そして、師は避けるまもなく、今度は一人に突き飛ばされ、壁に激突。

「ぐはあ・・・。」

「じゃあ、これ以上の制裁を受けたくなかったら、明日の戦いには来てくれよ。ちなみに、明日来なかつた場合の制裁は死より恐ろしいものにする予定だからよろしく。」

笑いながら、そう告げると、俺はマリアに向かいつ。

「すまない。もう、お別れだ。」

そう言って、テレポする瞬間、マリアは俺の腕を掴んできた。

「んなつ！－！」

俺は突然の出来事に驚きを隠せない。あきらめてくれたとばかり思っていたが、あきらめるどころか、こつこつふつに出来るとは。そして、視界がぐにゃりと歪んでいく。どんどん空間が歪み、崩れしていく。ここからは止めたくても、止められしない。

視界が一瞬だけ真っ暗になり、徐々に視界が普通になつてくれる。「つたく。何すんだよ。来るなつて言つただろうが。」

「ふふつ。来ちゃつたじやねえ。」

「ふふつ。来ちゃつたじやねえ。」

「ふふつ。来ちゃつたじやねえ。」

「本当にどうしたものか。お先真つ暗だよ・・・。」

「まあ、戦力が増えたんだし、いいじゃない。」

「やれやれ。どうしてこう悩みの種の人間は元気なんだよ、全く。」

「ぶつぶつ言わないで、とりあえず、今日の宿をとるよ。」

言われて氣づく。どうやら、いつの間にか、もう夜になつてしまつたらしい。空は真っ暗になり、満点の星が輝いている。

「綺麗だ。」

そんな星空を見て、思わず呟く。

「そうだね。」

俺たちはしばらく我を忘れて、その星星に見入つた。

「よし、もうそろそろ宿探しを始めるか。」

「うん。」

俺たちはその日の宿を探しこ歩き始めた。

思わぬ再会（後書き）

いつも、レイアンです。

今回の話のサブタイトル、もしかことこのことながら、クレインズことつてです。

ですが、実を語り、作者としても、思わぬ再会でした。
この作品のもともとのプロジェクトを見ても、こんな再会はなかったので、思ひもよらぬ再会となりました。

でも、修正はしないで、進めてこきたくと思います。

その方が、物語としては面白くなるのではと思つだからです。

そして、たどり着いたのは、今日泊まつたあの変なばあさんがいる宿だった。

宿に入る。すると、例の「ごとく鈴」がなる。だが、周りを見渡した感じでは、だれもいない。だが、この後、おそらく、前と同じように右から現れるんじゃないかと右を警戒する。

だが、ばあさんはそんな俺の心理を見抜いていたかのよう、「元気」と左から現れた。

「ばあっ！」

「つたく。驚かすなよ、ばあさん。」

「ふえつふえつ。驚かすのは楽しいんじやよ。」

意外だった。このばあさんの趣味にではない。あのばあさんは永遠にしゃべらないのではないかと思っていたのだが、しゃべったことに関してだ。

「前と同じように部屋を借りたいんだけど、部屋は余っているか？」

「一部屋だけなら、余っているぞい。」

「一部屋か・・・。一応、マリアに相談してみるか。」

「マリア。この宿に余っているのが、一部屋だけみたいだけ、その一部屋と一緒に泊まるといふことじでいいか？」

「ええ。クッスーとならいこよ。」

「じゃあ、ばあさん。その部屋に案内してくれ。」

火の明かりのあるわけでもない。ただ、月と星のひかりが差し込むだけの通路を迷う様子もなく、歩いていく。

「よく、こんな暗い通路をそんなにも速く歩けるなあ。」

「まあ、長いことこの宿の主をしておるから。」

「ばあさんはこの宿では一人なのか？」

「ああ、そうじやよ。じいさんもいたけど、じいさんはあの戦争で戦い、死んでいったからね。」

軽い感じで聞いてしまったが、実は聞いたままであったのに気が付いた。申し訳ないという気分になる。

「すまないな。そんなことを軽々しく聞いてしまって。」

「ここね。うちのじいさんはホワイトセブンとして死ぬまであの村を守るために戦い抜いた勇者だからね。悲しいけど、どうせかっていうと誇らしいね。」

ホワイとセブン・・・。その七人について、詳しくは知らなかつたが、このばあさんのじいさんがその一人だつたみたいだな。そして、最後まで戦い抜いた顔も知らぬそのじいさんに対し、心中で敬礼する。

「その勇者の仇は明日、俺が取つてきちゃうよ。」「えっ。あんた・・・。」

そう声をかけられたときには、俺はばあさんの田の前にいない。もう、そのときには部屋の中に入っていた。

「クッスー。かつこつけちやつてー。」

指でくいくいと突付かれる。

「あんな話聞かされたら、あうこいつに言つしかねだろ。」「でも、そういうヒーローみたいな感じのどじも好きかな。」「どうか。俺も・・・。」

かあああ・・・。顔が熱くなつてこくのを感じる。よく考えてみると、俺が今から言おうとしたことめちゃくちゃ恥ずかしいじゃんか・・・。

そんな顔を真っ赤にした俺を見て、

「クッスー。照れちやつて、かつわいいー。」

「照れてなんかない。」

「じゃあ、私のこと嫌いなの?」

「いや、嫌いなわけあるか。むしろ、その・・・。」

また、赤面。三年も会えずにいて、久しぶりだとこんなふうにもなるのか・・・。これからは別れのことがねえだろうから、関係はない話だが。そんな俺の心情を知らず、俺に対しても利亚は続けてく

る。

「その？」

「逆だ。」

「つまり？」

言わなくても分かっているはずなのに、マリアはなおも言葉を止めない。

「マリア、お前が昔と変わらず、好きだつてことだよ。」

「やつと言つたねえ。久しぶりにその言葉を聞くけど、やっぱり、うれしいな。私も愛してる。明日、必ず生きて、私たちが一人一緒にいられる世界を作ろう。」

「ああ、そうだな。おやすみ、マリア。」「

「おやすみ、クツスー。」

そう言つて、俺たち二人は眠りに落ちた。

俺は、まだ太陽も昇つていない、月が地面を照らしている早朝に目覚めた。ベッドから起き上がつた俺は、ベランダに向かつ。

「この選択は正しかつたのだろうか・・・。これから、俺の導く戦いは犠牲なしではすまないだろ?。この行動は本当に善なるものなのか。」

自分に問いかけるように、呟く。

毎回行動するたびに考へてしまつ。気にしてしまつのは、今回の選択は、本当に死者が出てもおかしくない戦いを起こすものだからであつた。

「そうね、どうなんだろう。誰かがその行動に対し、人がそれの正しいか正しくないか、そう、善悪を決めることはできない。といふより、それで決められたのは、単なるその人による見方であり、真の答えではない。真の答えは、存在しない。そう、例えば、私たちが世界を救うために、ある人を殺さねばならないとする。それは私たちから見たら、善なんだよ。でもね、その人の家族から見たら、私たちは悪となる。全ての人に対する善は存在しないし、悪は存在しない。それが、善悪。それなら、自分が善だと思ったら、それを

善だと信じて進めばいい。私はそう思つよ。」「えっ！」

誰も起きていないような時間で、一人でいたつもりだつたので、その突然の答えに、驚く。

「だから、私が言えることじゃないことかも知れないけど、クッスーは正しいと思つ。クッスーは自分を信じて、今を生きているんでしょう。その上で、今回の選択をしたんでしょ。だったら、正しいはず。人によつては、それは正しくない、悪だと言う人もいるかもしない。けれど、私はクッスーは正しいことをしているのだと思う。クッスーは自分自身でどう思つてこるの？」

「自分自身……」

自分自身か……。考えたこともなかつた。ただ、この行動は正しかつたのかとかを気にするばかり、本当に大事なことを見失つていたようだ。

「俺自身は、この行動、いや、選択が正しいと思つてゐる。」

「そう、なら、もう悩むのはやめにしなよ。自分を信じよ。それが、たとえ悪いことと見られることがあつても。」

「……」

「決めたんじよ。私を救うつて。そんなふつに、選択で迷うようなら、やるべきことも出来なくなるよ。」

確かにマリアの言つとおりだ。こんな一つ一つの選択に對して、迷いを抱いていたら、話にならない。自分を信じる・・・か・・・。

「ああ、そうだな。もう、迷うこととはやめにするよ。自分を信じて進めばいい。」

「ふふつ。そうでなくつちや。私のヒーロー。」

「そうだな、俺の姫君。」

そう言つて、お互に手を握る。俺はマリアを救う、それだけを考えて自分を信じて、行動すればいいんだ。

その後、一人で空を眺めていると、山の合間から、太陽が昇つてきて、その金色の輝きを見せ付ける。それは、俺の晴れた心を映し出

すように、きれいなものだつた。

「綺麗だなあ・・・。」

「ええ、そうね。綺麗ね。」

「これから、長い長い一日が始まる。準備はいいのか?」

「ええ、もちろんよ。」

「じゃあ、行くか。」

そう言って、俺はテレポする準備をする。簡単な準備なので、すぐ
に終わり、

「テレポ。」

そう唱えると、紙の術式は光りだし、視界がゆがみ、目の前に広が
る太陽が遠ざかっていく。視界は歪み、ついには、何も見えない闇
に包まれる。

だが、その闇も一瞬で、今度は集合場所にいた。

全ての始まり

「うう・・・。」

やはり、テレポしてからの視界が歪んでいく感覚を克服できない。今回はまだ、気分が悪くなるだけですんだ。最初のほうはひどかったものだ。だつて、テレポして終わつたときには気絶していて、倒れてしまつたらしいから。まあ、これはガイアスが言つていたことだから、真偽は分からぬが。俺はそのときの記憶が完璧に消し飛んじやつてゐるから。

それに比べると、少しさは成長してゐるなあと思つ。

周りを見回すと、誰もいなかつた。どうやら、俺たちが一番乗りらしい。

「さてつと。こつからが本番だ。必ず生き残るぞ、マリア。」

「ええ。私は必ずクッパーを守るわ。」

「だつたら、俺がマリアを守るぜ。」

「ふふつ。ありがとう。じゃあ、よろしくね。」

「任せゆ。」

そつこつ会話してゐるうちに、テレポの際に生じる光が多数できていた。もうそろそろみんな來るのか。

もう、始まるんだなど改めて実感する。これから、起ころるのは、俺が経験したことのないもうそれは戦争とよんでもいいほどのもの。しかも、その戦争を始めることになるきっかけは俺が作るのだ。もう、この人の流れは俺にはとめることは出来ないだらう。そもそも止めるつもりもない。

全てが始まる。そう、俺が何回も死んで止まつてゐたこの世界の全てが。

光に包まれた場所から、一人の少女が現れた。この世界で出会い、親しくなつた友人である。

「やあ、ミラ、アリシア。」

「お久しぶりです。」

「久しぶりだな。」

「と言つても、一日ぶりだけどな。」

「そうでしたね。でも、少し長く感じてしましました。軽い挨拶にも似た会話を済ませた俺は本題に入ることにする。その本題とはもちろん、説得はどうなつたのかだ。それ次第で、この戦いに大きな影響が出る。」

「で、結果はどうだつた？」

「なんとか、説得には成功しました。クレイデスの言つとおり、あちら側もこちらと利が同じことを踏まえたら、それがいいだらうとのことで、ホワイとセブンの派遣を決定しました。もうすぐ、来るはずです。ほら。」

そう言つと、光から、今度は男女入り混じつて、合計六人の人が出てきた。

「一人は、先のルーフェンでの戦いで命を落とし、今はまだ、空席だそうです。」

「ああ、知つてゐるさ。」

「どこで、それを。」

「あの宿のばあさんから、聞いた。どうやら、あのばあさんの身内がその人だつたらしい。」

「そう・・・ですか・・・。」

そして、見る。俺たちを含めると、十人か・・・。いや、やつも来るはずだから、十一人か。つたく、俺の師はこんなときでも寝坊とか言つんじやねえだらうな、全く。

まあ、いい。後から来るだらう。

「いいだらうか、みんな。これから、俺たちが行くのは、案差嘘織のブレイトッドの本拠地だ。今回の目標はそれぞれ思惑は違つだろうが、本質的な目的はブレイトッドの殲滅とおなじはずだ。やつらの中で一番強いとされる終焉の騎士は俺が何とかする。他のやつらも強いが、そちらは何とかしてもらいたい。」

「了解。」

全員がそろって、威勢のいい声をあげた。

「それでは、作戦を説明する。今回はホワイとセブン内で三人のグループ二つに分かれてもらう。ルーフェンのやつらのアジトまでは三本の大きな道でその交点に位置する場所に存在する。そこをたたくために一人のグループ、つまり、ミラとアリシアは正面南からの通路を、三人のグループは、それぞれ、北西から伸びる道、北東から伸びる道を通っていけ。俺とマリアは、地下水道を通り、アジトまで向かう。」

「地下水道なんでものはないはずだ。」

その意見はごもっともだ。なぜなら、その地下水道は地図に載っていない。そして、住んでいる人も知らない。

知っているのは、それを昔使用したことがある人か、俺のようなメフィストで測量のスキルを持つてやつぐらいだろう。

「俺はメフィストだ。その意味が分かるよな？」

「そういうことか。なら、その情報は正しいのだな。」

「ああ、その地下水道に残るものから推測して、あれは相当昔からあるものだ。それも、百年とかそこいらではない。三千年前あたりのものだ。」

「だが、何故、そんなものが地下にある？」

「さあな、それに関しては俺は考古学者でもないからわからねえ。だが、これを有効に使わない手はない。」

「分かった、でも、それなら、そちらに人数を回したほうがいいのでは？」

「無論、それもありだ。だが、この作戦の成功率を上げるために、地上に敵の目を出来るだけひきつける必要がある。だとするならば、地下に人数を割いて、地上の人数を減らすなど、やってはならない。」

「確かにそうだな。」

「どちらも、作戦としてはメインだが、地上を地下のための陽動と

して使わせてもらひう。」

「分かつた。」

そう、地上は陽動にしてはかなり大きな勢力をつける。それが今回の作戦の要だ。ホワイトセブンを陽動に使うなどといふこと 자체が普通は有り得ない。それに、陽動だと仮に分かつたとしても、人員を減らせば、その陽動に押し負かされるつていう算段だ。

「さて、おそらく、途中参戦しやがる眠そうなバカがいると思うが、来たときは鉄拳制裁をよろしく頼む。」

「了解した。」

「では、行くぞ。必ず、生きて帰ってくるんだ。」

「おー——————！」

全員がうなり声をあげた。

そして、辺りは無数の光に包まれる。それは、テレポの光。そして、これから戦いへののりし。これが、俺とマリアの未来を変える導きの光であることを願う。

いつもどおり、視界がおかしくなり、すぐに普通に戻る。

「さて、と。行くか。」

「じゃあ、行こう。」

俺たちがやつてきたのは、ルーフーンの町はずれにある一つの巨大家敷だ。明らかに普通の家とは格が違う。大きさ、造り、強度……。レンガ造りの一階建てで、中央に一つ大きな扉があり、窓は左右対称になるように配置されている。

この屋敷の庭の一いつある大きな樹の根元を掘り起こせば、どちらかにあるはずだ。地下水道への入り口が。

「とりあえず、一方ずつ見ていく。とりあえず、あの樹を銃で撃つてみよう。」

「えっ。きちんと近づいて調べるんじゃないの？」

「ああ。そうだ。俺の勘が正しければ、どちらにも何かしらのトラブルがあるだろうから、近づかないほうが身のためだ。」

そう、ただの俺の勘だ。だが、今は慎重にならなくてはならない。ここで、死ねば終わりなのだ。

また、リセットされる。今までの行動が、たとえ、記憶が残っていても、今までの行動は記憶されるだけで。

勘とは言え、ある程度理由もある。俺たちの戦おうとしている相手、ブレイトジド。

そいつらと、現実世界で戦つたから知っている。

あいつらは、実戦面でも強く、巧みに寝られた戦略を使つてくるようなプロの暗殺集団だ。こんなところにぼろが出るわけがない。

だが、それでも、この通路は地上の通路より確実性があると睨んで

きたのだ。

「とりあえず、撃つとしますか。」

そう言って、マリアを自分の胸に抱きかかる。腕はマリアの頭を包み込み、耳を塞げるようにして。

「きやつ。」

突然のことにもマリアは驚きの悲鳴を少しあげる。だが、そのときには、俺は銃をホルスターから取り出し、引き金を引こうとしている。

「一応、塞いでいるけど、ちゃんと、耳塞げよ。」

引き金を引くと響く銃弾の風を切るうなり声にも似た轟音。そして、それが樹に直撃する。

その直後、もう一つの轟音が辺りを包み込む。さっきのものとは比にならないほど大きな轟音が。そう、樹は銃弾の直撃の寸前より爆発が始まっていた。おそらく、ある一定の範囲に規定の大きさ以上のものが入れば、爆発するという魔法でもかかっていたのだろう。このままだと、敵に俺たちがここにいることが知れてしまうだろう。まあ、そのためのこの大規模な爆発なのだろうが。

「収束しろ。」

そう俺が小さく呟くのを合図に大きく広がるうとしていた爆発は、爆発した場所まで大きさを縮めていく。

これが、あの銃弾に付与した魔法。

俺の『収束しろ』という言葉を合図にどんどん小さくしていくのが効果だ。これは、爆発の規模を抑えたり、爆破音が周りに聞こえないようにするための魔法だ。

かといって、エネルギーが消えるわけではない。

一点に全てのエネルギーを集めているのだ。そう、銃弾に全てを収束させているのだ。それは、その膨大なエネルギーに耐えられるような銃弾にしなければならないことを指示示している。

「まあ、これがいつか必要な時が来るだろうから、持つておくといいよ。ちなみに、それは、僕が作った特別なものだよ。それで、収束させたエネルギーを何回にも渡って、蓄積させることが出来る。」

普通の品は一回使えば、それまでの使い捨てさ。それに、収束させたエネルギーを開放することも出来ないしね。

そう言われ、ロドスに渡された品だ。

」

そんなことを思い出しながら、周囲にトラップがないか注意して確認しながら、樹に近づいていく。

そこには一つの銃弾があり、とりあえず、それを拾つた。

「あつつ。

あまりの熱さに持ちきれず、落としてしまう。こんな状態じゃ持つていぐのもままならない。

とりあえず、ビンに入れて、持ち歩くことにしよう。ビンならば、熱の伝導も銃に装填しておくよりかはましなはずだ。

そして、次に樹のあつた場所を見る。

「ビンゴ。」

そこには、地下に続く穴があつた。おそらく、いつもが当たりで、もう一方は外れだろう。

「行くぞ、マリア。大人数には気づかれてはいないだろうが、この爆発の魔法を仕掛けたやつは、この爆発に気づいているはずだ。」

「ええ、そうね。この規模が起きる瞬間に一瞬だけ出た魔法の術式を見たわ。その術式は魔法を使用した者に、爆発したことを探せるようなものも含まれていた。それは、つまり、クッスーの言うとおりのことだわ。」

あの一瞬でそんなことまで……。マリアはどうやら、俺がこのメ

フィストの夢の世界

に縛られ続けているときの間に、また、一段と成長したようだ。

俺の知っている三年前の現実では、術式の解読は不可能とされていた。それは何故か。それは、簡単な理由だ。魔法を使う際は、術式は見られても困らないように、暗号化されている。意味の分からない記号や形などによつて。

そして、それは魔法が使われ始めてからずっと、そのままだった。

そして、その暗号の規則性は全く持つて見つからなかつた。

俺もその規則性の解明に挑んだことはあつたが、不可能だつた。いや、不可能だつたのではない。あれには、そもそも、規則などはない。

それが、俺の答えだつた。

それは何故か。その暗号には全くもつて、同じ記号や形がなかつたのだ。そんなふうであるのなら、規則性もあるわけがない。よつて、魔法の発動の際に出てくる術式は解明不可能とされていた。そんな不可能を今、目の前で実行して見せたのが、俺の幼馴染、マリアであつた。

「どうやって、そんなものをできるようにしたんだよ。」

「あの夜、私は自分の無力さを知つた。」

マリアは俺の質問に答えるために語りだす。

「悔やんだ先に、決めたんだ。必ず、クッスーを守るつて。それが、私にとっての人生なんだって。」

黒髪のロングヘアの少女は遠くの空を見据える。その瞳には迷いはなかつた。

「実は私、クッスーと同じ、悪魔の末裔だつたみたいなんだ。悪魔の血を引く者。それゆえに、暗号化された術式の解読なんていう離れ業が出来るようになつた。」

バカな。マリアが俺と同じだと……。いや、そもそも俺は悪魔の末裔なのか？ そんな疑問を見透かすように話は続く。

「クッスー、あなたは、ガイアスと同じ血が流れている。ガイアス自身に聞いたんだけどね。あの人に悪魔の血が流れているんだそうよ。それは、クッスーが悪魔の末裔であることを指している。」あまりに驚きの事実に俺は絶句してしまう。かもしれないとは思つていた。だが、実際に言われてみると、やはり、違うものだ。

「そして、こうも言つていた。『メフィストの試験は俺たち、悪魔の末裔を集めるためのものなのだ』ともね。」

そうか、これで、完璧に話が繋がつた。俺の予想が正しければ。

終焉の騎士が何故マリアを狙うのかも、俺のおばが何故殺されたの

かも、ガイアスが何故、メフィストの試験に役立つよつたことを知つてゐるのかも。全て。

そう、全ては悪魔の末裔といふことが関わつて來ていたんだ。マリアとおばの件は、悪魔の末裔を滅ぼそうとする者がいたといふこと。

悪魔に身内を殺されたものがいない世の中ではない。この世界には魔物、悪魔がいるのだから。

しかも、ただの悪魔の末裔と言つわけではなく、有名な話『剣王と悪魔』に出てくるような強力な悪魔だ。

悪魔に恨みを持つものが野放しにするわけがない。眞実を知つたら、なんとしても、殺そうという気持ちになるだろう。

そして、それを知つたガイアスは俺と同じよつに未来をえて、おばを救うために、メフィストになつたが、失敗した。

そして、その息子である俺は、今度は、マリアが死ぬことを知つた。それを知つた親父は、自分のよつな失敗を繰り返してはならないと思つたのだろう。

そうして、俺に未来を變えるために、必要で、託せることを全て託したといつたところだろう。

現に、親父の託したもののおかげで、俺は、メフィストの試験に合格し、メフィストとなつた。

「悪魔の繰り返される現実か・・・」

「そう、あの『剣王と悪魔』に書いてあつた人型の悪魔と化け物型の悪魔の因縁はまだ、続いているのだと思うわ。」

「だつたら、俺たちが、化け物側の悪魔といふことか。」

「ええ、そうよ。おそらくね。そして、おそらくは『終焉の騎士』つてやつは人型の悪魔の末裔ね。」

「俺たちは、こんな昔から続く物語の上を歩かされていただけだと言つのか。」

久々に、怒声をあげる。もちろん、それは田の前にいるマリアに向けられたものではない。

悪魔同士の因縁、それに向かってだ。

「頼んだよ、クッパー。この世界にいれる時間もこれが限界みたい。

「マリアア、どうこうことだよ。」

マリアの体は向こう側が見えるぐらい透き通っていた。今すげにも消えてしまいそうな弱々しい感じになっていた。

「私はね。この世界の望みなの。つまり、クッパーの望み。そんな人物は本来、この世界に干渉できないの。それを、元メフィストであつたガイアスさんに無理言つて、魔法で空間維持をしてもらつているの。だけど、やすがに、これが限界みたい。そして、予言では、もうすぐ、私は殺される。おそらく、この作戦に失敗したら、私は・・・。私は・・・。」

マリアの瞳から涙が流れるよつこ、涙は出てきて、ほおを伝つていくと、地面に落ちていく。

「それ以上言うな。必ず、俺が何とかしてやる。だから！」

「クッパー・・・。」

マリアは泣き崩れながらも、はつきりと俺の名前を呼ぶ。
「心配するなよ。俺だぜ。お前に認められた。こんな腐った過去から続く因縁なんて、俺がすぐ、ぶち壊してやるさ。」

「信じてる。信じて待つてる。三年といつも年月待つてゐる間に、どんどん、絶望に打ちひしがれていつた。今日の今日まで、絶望しかなかつた。もうすぐ、私は死ぬのだといふことも知つてしまつたしね。でも、今までクッパーと過ごしてきて、安心できたんだ。私が信じて待つてる。だから、クッパーも必ず帰つてきてね。」

そう言つて、彼女は徐々に薄れていき、消えた。

「必ず、変えるさ。」

そう、空に向かって呟く。それが届いたかどうかは分からぬ。だが、それでも、俺は必ず。

師弟の絆

「誰だ、そこにいるのは。」

「いやあ、ばれちゃつたか。今回は本気で気配消していたのにな。いつの間にか、弟子に超えられてしまつたよ。」

俺自身、だれかがいるのには気づいていたが、敵にしては隙を見せても襲つてこないし、味方にしては、気配を消しきっている。だからこそ、とりあえず、放置していたのだが・・・。

まさか、師匠とは・・・。

「聞いていたのか。」

「ああ、君の意志の強さを確かめるためには。」

どこか、この世界ではない何か遠くのものを見る目で師は告げた。
「私は、君たちに協力するよ。それが、私の一族の昔からの因縁なのだから。だから、知らなければならなかつた。君が私の一族に課された因縁を打ち碎く力があるのかをね。まあ、合格かな。もし、駄目だつたら、君を殺さねばならなかつたんだけどね。」

「それが、あんたの本性か。」

「本性？笑わせてくれるね。人にはもともと一つの顔しかない。それを分割して、できる一部を人に見せているんだ。つまり、もともと本性は一つしかない。だから、いつも見せてているのも、本性。今見せてているのも本性さ。」

言葉で攻められて、負けた気分になるが、気にしない。この人を論破するのは無理難題なのだ。

「まあ、いいです。師は付いて来てくれるのですか？」

「ああ。そうしたいところだが、僕はここで、やつを迎撃つ。」

彼の見ている方向を俺も見てみる。

すると、そこには、俺が現実で最後に戦つたあいつとその部下と思われる集団がいた。そいつらはぱつと数えただけでも、五十人は超えていた。マリアの情報から考えて、来るだろうとは予測は出来て

はいたが、まさか、これほどまでとは。

こんな戦力を回してしまつては、少なからず、向こうの戦闘に支障が出るはずだ。しかも向こうにいるのは、この世界でも屈指の王の直属の戦士。そんなやつらに、手抜きをして、勝てるわけがない。まさか、向こう側は捨てたのか。

そんな思考を次々と進めていく俺に遠距離通信魔法が行われた。つながる回線。

「クレイデスさんですか。こっちの南の通路を守護していた部隊が、そちらに行きました。大丈夫ですか。」

「いいや、結構ます。そつちは、こちらに応援を送れるか?」

「どうやら、やつらはこっちを持久戦で倒そうと考えているみたいですね。敵は無限に湧き出てくる土人形です。今、術師の捜索を行いつつ、戦っていますが、今すぐには抜け出せそうにはないです。他の北西、北東の通路に関しても同様だと通信が来ました。すみません。」

「ん。」

そう言って、通信魔法は切れた。おそらく、通信をしているほどの余裕がなくなりたのだろう。とすると、応援は期待できない。そして、ということは、この集団はブレイドの主力のはずだ。

「おそらく、ここにいるのは、敵の主力。俺もここに残ります。」

「いやあ、クレイデスも冗談が過ぎるなあ。」

俺がそれでも口を挟もうとするも、そんなことができないように、言葉を続ける。

「・・・やつはんなよ。てめえは、ここまで、何しに来たんだ。俺のために残つて一緒に戦うためか?いや、違うだろうが。てめえは、マリアを助けるために、この作戦を執行しているんだろうが。こんな俺なんかほつていけよ。なんのために俺が来たと思っているんだ。」

ロドスの今まで一度たりとも見せたことのない怒りをぶつけてくる。こんなに怒り狂っている師は初めてだ。そんな今までに経験したことのない異様な光景に、俺は驚きを隠せない。

だが、師匠はおれのために、ここまでしてくれている。

その師匠の意志を無駄にするわけには行かない。

「すまない、後は任せせる。」

「ああ、任せとけ。必ず、成功させりよ。」

「ああ。」

お互ににつなづきあつと、一斉に逆方向に走り出す。

俺は穴の中に、師は敵の集団の中に。

悪魔の力

「さてつと。弟子にはあんなこと言つちゃつたし、久々にがんばらないとね。」

自分のことを誇るわけではないが、あの子と会つた時点で、僕はあの国でも屈指の魔法師であつた。ただ、それを表舞台にもつて行こうとはしなかつただけで。なぜなら、めんどくさかったのだ。強いことが表舞台に知れれば、軍には駆り出されるし、自分が強いことを主張したいがために、僕を襲つてくるような輩が出てくるから。別に、叩き潰せばいいとも思いはするのだが、なんかいやだ。

そんな理由もあつたが、一番の理由は彼に指摘された通り、研究時間の減少だ。それだけはなんとしても避けたかった。

よつて、実戦は久しぶりだつた。

とは言えども、俺が戦つているのを見た事がある者はいない。それが、意味するのは戦つたときの生き残りが自分以外はいなかつたということだ。

僕は禁法を唱える。いや、この表現は僕にとっては正しくない。封印を破つて、禁法を発動する。そう、僕は禁法を体に埋め込まれた一族の生き残り。悪魔について知つた者たちの実験に使われた子供のうちの一人。

「消し飛べ。」

そう一言告げるだけで、人を消し飛ばすことが出来る。それが、宿つた力の一つ。口にした言葉を現実にする能力。はつきり言つて、僕一人がいるだけで、戦場は姿を変える。これがいやなのだ。人を難なく殺してしまう力。そんなものをもつて嬉しいはずがない。だが、その現実改変の能力を宿した一言を受けても、消し飛ばすに立つている一人の男がいた。

他には、もう誰もいない。

「あら、まだ生きているやつがいたのか。」

「どうやら、君の首はここで、取らないといけないみたいだ。まあ、苦をさせずに殺したことだけは、ありがたく思うよ。苦しみ

ながら、死ぬのはかわいそุดからね。だけど、仮にも仲間が殺されたんだ。黙つているわけにはいかない。」

禁法をもろともしない男はそう告げると、自分の中に溜め込んでいた全ての殺氣を放出する。

そんな姿を見て、彼は驚きを隠せなかつた。自分以外に禁法を体に取り込んだやつがいることに。だが、同情などしない。

「ふふふ。面白いね。君に僕は殺せはしない。君は何も出来ずに、ここで死ぬだけだ。」

そう言つて、術式を光速展開する。それは、もう人知の域ではない。光の速度で展開される複雑な術式。

「遅い。」

そう聞こえたときには、彼は田の前まで迫つてきていた。光速で展開される術式を遅いと言つといつのは、こいつ自信もかなりの化け物であることを指し示している。それを一瞬で判断した彼は即座に左手で刻む術式を変える。右手では先ほどから進む術式を進めながら。

そちらの術式は複雑である禁法とは違い、簡単な加速の魔法だ。身体の細胞一つ一つを活性化させ、身体の速度を急上昇させる魔法。それが完成し、発動するまでにかかる時間はないとしても過言ではない。完成した術式を自分の体に対して、発動させると、後ろにジヤンプする。

すると、さつきまで、自分がいた場所に腕がたたきつけられる。腕と地面が接触した瞬間、地面が溶けた。

「あらら、相当の化け物だねえ。」

「君に言われたくはないな、君の術式の展開速度も狂つているよ。」「そつ会話をしながらも、やつが何をしたのか分析をする。溶けるといつことは、温度の急上昇が見られたということだろう。それはつまり、地面を高速振動させ、分子同士の接触回数を極限まであげた

とこう」と指す。

だとすると、やつの腕に触れたら、さすがにまずいだらうなあ。

「なら、一気に決めようかな。」

右手で光速展開させていた術式をよしやく完成させて、発動する。すると、あたりに冷気が満ち溢れ、男を包み込む。包み込んだかと思つたら、次の瞬間には男が凍り付いていた。

「この程度じゃ俺はまだ死れない。」

氷付けになつても、男はしゃべる。だが、それも、もうすぐ終わりだ。

「なつ。バカな。なぜ、俺は・・・」

「ようやく、気づいたらしい。自分が死ぬということ。」

「この世界における温度は、分子や原子の振動によるものだ。最低の温度というのは、分子や原子の振動が停止したことだ。だけど、僕の魔法はその向こうを行く。完全なる停止、その後に起ころる原子や分子の消失。それが、最低温度を超えるための業だ。一般的には不可能だ。だが、僕にだから出来る。君の空間はもう囲われているんだ。その空間内の全てがこの魔法の対象。じゃあ、死になよ。」

そして、その空間には空氣を含めた全ての物質が消えていた。

夢の続き

俺は地下に続く水道を人間の本来の力では有り得ない速度で駆け抜けていった。道中、変な魔物もいたが、魔物の追えないような脅威の速度で走っていたため、視界に入つては消えて、入つては消えての繰り返しが続いた。

そう、身体の細胞を活性化させる魔法を使つて。無論、師のことが心配ではないわけではない。だが、俺は俺を先に進ませてくれた師を信じなければならない。信じて、俺の目的を果たさなければならぬ。

それが、俺に出来る唯一のことだから。

そして、それは長い間に渡つた俺の望み、メフィストの夢の目標点であり、未来へのスタート点なのだから。

そう、決意を強くしている間に俺はルーフェンのブレイトイードのアジトの真下にたどり着いた。

なぜ、アジトの下にたどり着いたのか分かつたのかといふと、地上で起こつてゐる戦いによる魔法のぶつかる衝撃音や爆発音、剣同士の衝突の音、銃声が鳴り響いていたからだ。

さらに言つながら、誰もいなかつた地下水道に、人影がひとつ見えたからだ。

それは何度も見た、もう見間違えることのないタキシード姿に、腰からぶら下がつた刀というよくわからない服装の男だった。そう、こいつこそが、俺を超える回数殺してきた男。

マリアの未来を壊す者。

『終焉の騎士』

俺は今、細胞を活性化させ、身体能力を向上させていく。そう、今使つてゐるこの魔法は身体の本質に触れる。本当の実力に触れることが出来る。

体の奥に眠る力に火をともす魔法なのだ。

だが、これは、まだ一部。この魔法でも、俺の奥底にある悪魔という火種にはふれることも出来ていない。

なら、それに触れることができるなら、どうだろう。そう、禁法だ。それなら、最も近づくことが出来る。禁法は発動者に対して肉体的に、そして、精神的にダメージを与える。ダメージを受け続け、禁法に負けてしまえば、体を禁法に乗っ取られてしまう。それが、禁法。

そう、禁法は己の奥底に眠る本質が表に出で、己を飲み込まんとする魔法なのだ。そう、だから、使っている間は注意が必要なのだ。俺にとって、それは、悪魔といつ本当の自分が俺を飲み込もうとしていることを指す。

それならば、俺がやつに対して、火を灯し、制御すればいい。

それしか、俺には勝つ方法がないと思う。

師はこのことを知つていて、俺に禁法を教えたのだろう。なにげなく、やりたくなさそうで、眠そうな顔をしながらも、そんなことを考えて、俺に結局、禁法を教えたのかもしれない。考えすぎだとは思わない。

見た目は眠そうで、急け者で、バカだけれども、やるときはやる俺の師だ。

結局、あの時はまだ、俺もそんなことはわからず、ただ、教えてもらっていた。

だけど、今、ここで気づいた。

これが、師の俺に対する最大の気遣いなのだと。

俺はいろいろな人に支えられている。

マリア、ガイアス、ロドス、ミラ、アリシア、ホワイトセブンのみんな。

そう、いつの間にかこんなにも、支えてくれる人が増えたんだ。

そう、みんながいる。

だから、俺は悪魔なんかに飲まれたりはしない。

そして、禁法を使い始めるにより、ゆっくりと、悪魔という俺

の本質に火を灯していく。

それは、小さな火から始まり、業火まで大きく膨れ上がる。

「行くぜ。」

俺は戦いの一歩を踏み出す。

俺は今までにないほど、背中に背負っている大剣を振り回す。それは、まるで、自分の腕のような滑らかな動きで。

無音だった地下水道に俺の剣とやつの刀の衝撃音が響き渡り、銃声が鳴り響く。

俺は俺の中の本質の思うがままに、剣を走らせた。その剣とあうタイミングで、銃を撃ち放った。

やつは俺の一振りを受けることに後ろに下がっていく。今回は前とは違う。万単位殺された記憶の蓄積によって、わかつたことがある。やつは、連續した途切れない攻撃を受けているときは、消えることが出来ないということだ。俺が特殊な銃弾を用いて戦つたときもうだつた。

あのときも、最後の銃弾を避ける以外の場所でも、本来その能力を使うべき場所があった。

そう、あの普通の銃弾の牽制、そして、連発射撃に大振りの剣技のとき。

だが、そうだと言つのに、やつは俺の連續攻撃が終わり、俺の腕を跳ね飛ばし、距離をとつた後に使つている。

他にも、使えばいいときに使わず、連續攻撃ではないときに使つていた。

そして、問題となつてゐる消えると言つことについても原理も、これによつて、だいたい分かつた。やつは、自分自身を分解して、魔法化させている。

それゆえに、俺と近くにいるときには、消えようとはしない。消えてしまえば、魔法化した自分が俺によつて、吸収されてしまうからだ。

だから、俺はこうして、近接攻撃の連續でやつを追い詰めている。

「ぐはつ。」

今まで、銃弾、剣技を全て刀で、防御し、反撃してきたやつ。だが、そんなやつにもどうやら、ぼろが出てきたようだ。

銃弾がやつの左腕を貫通する。

だが、それで、空いた穴は何か魔法の術式が浮かび上がり、消えてしまう。

「まだまだあああ！」

俺の攻撃は止まらない。驚きもしないのは、それがやつの中にいる悪魔による異常なまでの身体回復能力であることを知っていたからだ。

こんな程度の傷ではやつはひるみもない。

剣でやつの体を真つ二つに裂く。しかし、これに対しても、その悪魔の身体回復は働いて、空中で元に戻そうとする。

だが、そのときには、もう俺の魔法の詠唱は終わっている。

「チヨックメイトだ。」

そうやつに告げると、やつの全身は炎に包まれる。それは地獄の業火。全てを消し去る炎。さらば言ひ乍ら、そこにある魔法を源として燃える炎。つまりはやつ自身を源として燃えているのだ。

「ぐあああああ。焼ける、熱い、死ぬ・・・。」

そんな絶叫が聞こえる。だが、もう、そちらへは目を向けない。そういう、それは実に無残だった。

そう、いくら魔法化するのだとしても、そこにいるにはいる。それならば、剣などは避けることが出来たとしても、炎は避けることが出来ないし、魔法を源とするものだったら、避けようがないのだ。

「甘いな。」

何か鈍い音が聞こえる。何かを突き刺したような音。それが、自分に突き刺された刀であると気づくのに時間がかかった。

「甘いのはお前だ。」

服の中にある銃を入れるためのポケットに手を突っ込むと、自分の腹を貫通させ、やつを撃つ。

「ぐはっ。」

二人はほぼ同時に声を上げる。

だが、それでは俺の攻撃は終わらない。剣を構えると、やつの懷に踏み込む。そして、剣を振り構えながらも、蹴りを入れた。

「なんだと。」

どうやら、俺がそのまま斬りかかって思つていたらしいやつは驚きを隠し切れずに言つた。

そして、銃にあの銃弾を装填し、撃つ。もちろん、やつは逃げようとする。だが、やつは動けなかつた。

目には見えないほどの細い糸。金属で出来たもの。それが、やつの周りを囲んでいたから。

そう、俺の銃弾のほとんどにはその細い糸がついていたのだ。そう、二対の銃弾。俺はこの戦いで、銃が壁に突き刺さらないような撃ち方はしていない。

さすがに、自分の治癒能力をもつてしても、厳しいと判断したのだろう。俺に対して充分距離があることを確認してから、消えようとする。

「バカな。」

消えようとはするものの消えることは出来ない。俺の銃弾に俺の血を含ませたのだ。そう、やつが俺を突き刺し、俺が自分もろとも銃で撃つたときに。

俺の血を含んだ銃弾はそのまま、やつの体に侵入した。

それは、俺の悪魔の力が向こうに働いていくことを意味する。

そう、全てはこの戦いが始まつてから、このラストを目的として練つた作戦による戦いだつたのだ。

「言つただろう。チエックメイトだと。」

「ハハハ。まさか、お前に負けるとはな。もう一人の悪魔よ。貴様は私に勝つたのだ。悪魔の末裔であるお前がな。どうやら、これで、長きに渡つた貴様と私の因縁も終わりのようだ。もうお前の仲間であるあの女に手を出すのはやめにしよう。」

そう言つと、銃弾に溜め込んだエネルギーの爆発によつて、終焉の騎士は消し飛んだ。

「勝つた。俺は勝つことが出来たんだ。」

そう、あまりの嬉しさに声を出して、叫ぶ。だが、その元氣もどこに行つたのか、疲れが押し寄せる。やはり、悪魔の本質に触れると、いつは、かなり身体に触れるようだ。
疲れのあまり、だんだん眠くなってきた。。。。
まあ、もう誰もいないし大丈夫かな。。。
そして、俺は眠りに付いた。

Hペローゲ 終わらない世界

俺が目覚めたのは、地下水道の湿氣た床の上ではなく、どこか分からぬベッドの上だつた。とりあえず、周りを見回す。すると、そこには、俺のベッドの横にいすに座り、俺のベッドに倒れこみ、眠り込んでいるミラとアリシアの姿があつた。

ずっと、俺を見ててくれたのだろう。そして、俺をずっと見ていて疲れ果て、眠ってしまったのだろう。そんな一人を起こすわけにはいかないので、そのままの体勢でいることにする。

すると、奥にあつたドアから一人の男、そう、俺の師であるロドスが入ってきた。

「君はようやく、古くから続く因縁を断ち切れたようだね。」

「ああ。」

そうだ、俺はあいつを倒すことにして成功したんだ。そして、確かここで倒れた。

「そつちはどうだつたんだよ。」

「こつちかい？こつちはブレイトッドとの戦いに勝利した。まあ、僕は僕で、久々に本気を出せたかな。この子達はこの子達で、大変な戦いをしたみたいだよ。そして、勝つた後、俺たちはお前のいるであろう地下水道に向かった。思つていたより、ひどい有様だつたよ。」

そりや、あんだけ、ド派手に戦つたのだからな。炎でやつを焼きぬくそとしたり、あのエネルギーの塊を爆発させたりしたからな。と心中で思つたが黙つておく。

「そしたらね、君が倒れているんだから、驚いたよ。死んでしまつたのかと心配したけど、なんか眠つてるだけみたいで良かつた。」

「やっぱり、ここまで運んできてくれたのは、みんなか。」

「ありがとうな。ここまで、運んでくれて。」

「いやいや、礼はいいよ。礼を言うなら、この一人に言つとけよ。あと、君はこの世界での目標を果たした。それは、この世界からの一時的な、強制退場を意味する。ちゃんと、言つことがあったら、言つといてね。」

薄々、そんなことになるのではないかと思つていたが、本当にそうなるとはな。

「ありがとうございました。師匠。」

「だから、礼はいって言つてるだろ。じゃあね。」

そう言つて、俺に背を向けると、手を振りながら、この部屋を去つていった。

そして、もう一度、ミリカとアリシアを見る。

いつの間にか、二人とも起きたみたいで、俺に寝ているところが見られたのが恥ずかしいのか顔を一人そろつて、真っ赤にしている。「ありがとな。おれをここまで運んできてくれて。そして、俺のためにがんばってくれて。」

「気にしなくていいですよ。」

「みずくせえこというなよ。」

二人は俺に対して、なにも変わらず、接してくれているが、俺との別れを知つてか、少し悲しそうな顔をしている。

「じゃあね。」

「じゃあな。」

そう一人は俺に対して、別れを告げ、椅子から、立ち上がる。そして、ドアに向かつて、歩いていった。

「ああ、じゃあな。また、会えるといいな。」

それから、一人は振り向くことはなかつた。いや、振り向きたくなかつたのだろう。一人が背を向けてから、聞こえたかすかな泣き声。それが、俺の心に響き渡つた。

そして、俺の体は徐々に透けてくる。

「ああ、このメフィストの夢とも、もうお別れか。」

そして、俺の体は完璧にその別世界から姿を消した。

次に目覚めたのは、一面真っ白な部屋にあるベッドの上だった。

周りを見ても、全てが白。特殊な部屋だった。

俺は起き上がる。だが、思うようにいかない。なぜならば、俺の体はさっきの世界での俺とは異なっていたからだ。筋肉が抜け落ち、細くなつた腕、足・・・。そつ、全身が劣化している。

だが、それも当然だらう。

なぜなら、俺はメフィストの夢という別世界に三年間もいたのだ。そして、その間、俺は現実に戻つてることもなく、普段使はずの筋肉も使わなくなつた。

そうやって、俺の体は弱つてしまつたのだらう。

だが、体が思うように動かなかつたとしても、俺のマリアに会いたいという高ぶる気持ちは止まりはしない。俺は、本当にマリアの未来をあの世界で変えることに成功したのか確かめなければならない。俺はそんな思うように動かない体に無理をさせて、起き上がる。

「使わないところにも、弱つてしまつものなのかね、体つてのは。

」
そう悔しそうに口にしながら、ベッドから床に降りようとする。

そうして、ゆっくりと地面に片足ずつ、つけていく。

そして、両足がつき、自分の体重が全て、足に任せられる。こんなにも、立つことが苦しかつただろうかと思わされた。そう、俺は今にも倒れそくなぐらに苦しい。

だが、倒れないように、踏ん張る。

そして、一步を踏み出す。そうすると、全身に苦痛が伝わり、足は悲鳴を上げる。

それでも、俺はまた、一步。そして、一步と着実にドアに向かつて近づいていく。

「ガキのころとか、ずっと修行に明け暮れてたはずなのに、三年間動かないだけで、これがよ。だが、体力を失つたかわりに、マリアが救えていたら、俺はそれで、良しだけど。」

もう何歩歩いたかなんて、分からぬ。どうやら、思考もまだ、ま

ともにできないらしさ。でも、着々と、ドアに近づいていっているのは確かだ。それなら、マリアのことだけ考えて、ただ、進めばいい。それだけだ。

そうして、ようやく、ドアの前までたどり着く。

重く閉ざされたドアを俺の持つ限りの力で開く。すると、無数の光が差し込む。あまりの眩しさに目が開けられない。

しばらくして、目が開けられるようになり、目を開く。

すると、そこには窓の外を眺める一人の少女がいた。

ずっと、会ったかった少女。ずっと救いたかった少女。俺の恋した

少女。

艶やかで、長い黒い髪が特徴のマリアがそこにはいた。

「マリア。」

声がかすれてうまく出ないが、そのまま呼ぶ。何度も、何度も。ようやく、声が届いたのか、彼女はこちらで振り向くと、昔から見てきた笑顔を涙でぬらしながらも言った。

「おかげり、クッスー。ありがとう、私の未来を変えてくれて。」

「ただいま、マリア。」

そう言つて、お互におぼつかない足取りで、近づいてゆき、抱き合つた。

これで、俺はマリアを救うことが出来た。

そして、俺はこれからこの一人の少女の笑顔を守り続けていく。

それが、俺の望みであり、俺にとってのメフィストの夢の意義なのだから。

ハローゲ 終わらない世界（後書き）

これにて、第一幕 呪われた悪魔 終了です。
どうでしたか？楽しんでいただけたでしょうか。楽しんでいただけ
たのなら、うれしいです。

さて、次は第一幕へと続きます。

次の章は、運命を変えた二人のその後の物語となります。
一応、これにて、メフィストの夢 第一幕は終了」といふことで、正
直に言うと、ストックを切らしてしまいました。
ところが、すみません。基本的に、更新が日曜日になると想い
ます。

ストックがたまってきたようなら、開放していきたいと思いま
す。

これからも、よろしくお願いします。

プロローグ 壊れた世界（前書き）

これから、第一幕始まります。

これは、クレイデスの戻ってきた後の世界の物語。

そう、マリアを救うことに成功した世界。

その世界で、クレイデスがどう進んでいくかお楽しみいただけると嬉しいです。

プロローグ 壊れた世界

魔法。日常で使われている魔法というのは何をエネルギーとして使っているのか。それは、今でも分かつてはいない。

だが、仮説は立てられていて、有力なものとして世界に知られるものがある。

それが、これだ。

人間にはもともと、魔法を使うためのエネルギー存在しており、それは、人間に宿るそのエネルギーの変換機能みたいなもので、魔法として外部に放出している。

だが、あくまで、仮説であって、実際はどうかわからない。
というより、間違っていると俺は思っている。

それはなぜか。

そう思つた原因の一つは、この世界で起こる魔法使いの暴走事件によるものである。この事件は、魔法使いが魔法を使うと、その魔法の制御が利かなくなり、魔法使い自身も抑えようとするものの、すぐには自我を失い、暴れるというものだ。

つまりは、魔法使いが自身の魔力を扱えなくなつたということだ。この事件の上で問題となつてくるのは、人間に本当にエネルギーがあつて、それを自分の体で変換しているのかということについてだ。もし、人間自身の体で変換しているのなら、魔力の調整は暴走状態に入ったとしても、制御出来なくてはならない。これに関しては、その役割を果たす部分が異常を起こしたで、済むかもしれないが、それにしては、人数が多くすぎるのだ。

それに、その事件のときに観測された魔法使いから放出される魔力の量は人間の体から放出することが出来る量の限界をはるかに超えてしまつていて。

その魔力の量と言うのは、人間の変換機能がいくら良かつたとしても、人間の活動及び蓄積されたエネルギー以上のものは変換できな

いということからわかつている。

それから、考えると、人間にそもそも、そんな変換機能がついているのかという話になるのだ。

俺の仮説としては、魔法のエネルギーはこの人間の住む世界とは別の所にあって、それを人間の言葉や術式で変換しているのではないかと思っている。

その考えに至ったのは俺の繰り返された世界の中で、マリアを救い、王となつた俺が研究し、理論を確立していたからである。それなら、仮説ではなく、理論になるはずだが、あくまで、あそこはメフィストの夢という現実とは違う世界である。それに、研究に使える費用が段違いだ。

そのような理由で、現実で調べられていない。だが、結局のところ、そうだと思うので、別に改めて調べようという気がしない。だが、そこで、もう一つの疑問だ。なら、その大いなる力に対して、対価はどのようなものなのか。

これが、この事件の本質にあたると俺は考えている。
おそらくは、魔法を使うための対価は人間が支払つており、それが人間の持つ精神力なのではないかと俺は考えている。

それなら、うなづけるのだ。大きすぎる魔法を使つて暴走したという例に関しても、魔法の使いすぎでの場合に関しても。

そして、魔法がある程度の使用量であれば、永遠に使えることについても。

大きすぎる魔法は、それに耐えうる精神力がその人になかったため、魔法の多用は、その人の精神力の上限を超えてしまつたため、永遠に使えるのは、精神力が自然治癒するためだ。

そんな原因是結局のところ、どうでもいいのだが、そのようにして精神力を失つた魔法使いがこの大陸の中央にある一国の王都で同時に八人暴走し、王都が崩壊した。

その後、壊滅した王都周辺で八匹の化け物が現れた。その化け物は周囲の町や村を襲つては壊滅まで至らし始めた。

それが俺が現実に帰つてくる一ヶ月前のこと。一ヶ月がたつた今では、この大陸に存在する確認されている限りの町や村のうち三分の一が壊滅した。

それが、マリアを救い、帰つて来た俺に待つ現実だった。
この家に関しても、襲撃を受けたのは例外ではなく、一匹による襲撃を受けた。

その化け物は体のどこからでも、自由に腕を瞬時に、何本も出せる上に、魔法が使用できた。さらに、魔法を発動するためのラグはないときていた。

本当の化け物なのだ。

とりあえず、ラグがないというのが有り得ない。だが、マリアやガイアスが確認した限り、術式も詠唱した様子もなく、例えば腕を向けた方向に突然業火がとかうことだつたらしい。

そもそも、迎撃をガイアスとマリアがしたにもかかわらず、ギリギリだつたのだ。なんとか倒すことが出来たものの、ガイアスは腕を持つていかれ、重傷。マリアは体の一部が飛ぶなどということはなかつたものの、重傷であったという。

はつきり言つて、信じられなかつた。あの一人ですら、その傷を負つて、一匹ということに。

だが、それが現実なのだと知つた今なら、この世界の現状にもうなづける。

だが、それも、ここで終わらせる。

マリアを死に至らしかけたやつらを生かしておくわけにはいかない。
俺はマリアの笑顔を守ると決めたのだから。

人であることを捨てた者

男は城の屋根から眺めていた。そう、いたるところで、炎が上がり、悲鳴が聞こえ、今にも駄目になってしまいそうな街を。

「めんどくさいねえ、だけど、見過ぎるわけにはいかないかなあ。」
そう言って、腰を上げ、立ち上がる。状況は単純。化け物が一体攻めてきた。そう、巷を騒がせているあの化け物が。軍が魔法使いや兵士を総動員しているようだが、止めることは出来ず、この有様となると、軍はもうほとんどの戦力を失ったのかも知れない。

だが、それも当然のことと思える。

そもそも、一つの軍隊程度で敵う相手ではないのだ。もとは人間であつたが、今は悪魔という化け物になってしまった者。魔法の暴走により、人間であることをやめざるおえなかつた者。

それが、やつらの正体だった。そう、俺の眼には映つた。
そんなやつらだからということで、同情はしない。それが、彼らの選んだ道だからだ。同情というのは彼らの道を否定することに他ならない。どうしても、俺には俺の進むべき道がある。やらねばならないことがある。

そのための邪魔になるのなら、彼らにはここで、消えてもらわねばなるまい。

「西も東も、だいぶ、突破されちゃってるなあ。仕方がないから、同時に潰すか。」

精神を安定させる。そして、心の中にある水面に対して、一滴の水滴をたらす。それが、この術の感覚。体に対してアクセルを踏む感覚。

その一滴で、体の中で莫大なエネルギーの反応が起ころ。

これは、人とは異なる力。人には受け入れることの出来ない力。そして、俺が人であることをやめた力。

この力は、大まかに言うと、禁法に近い。だが、もともと実験で体

に宿しているものとは違つ。禁法と同じように、これも体に対する代償が大きい。だが、代償はすでに、払い終えた。

その代償ゆえに、人間をやめた。俺は心を代償とした。俺にはもう心がない。表に出すことが出来るのは仮面によつて作られた感情。だが、その代わりに人ではない力を手に入れた。あの頃の無力な俺には守ることが出来なかつた彼女と最後に交わした約束を果たすだけの力を。

その力を使い、今は彼女が好きだつた街を守る。

そうして、俺は二つに分裂した。お互に均等な力を持ち、お互に繋がつた意識で動く俺に。

そして、瞬時に移動する。一方は西の化け物の居場所へ、もう一方は東の化け物の居場所へ。

先に化け物と接触したのは西に向かつたほうだつた。移動といつても、魔法なので一瞬で移動できるわけだが。

「口・・・口ドス・・・？」

そう声をかけてくる、勝つことの出来ない化け物と対面し絶望しげざめた顔をしている兵士がいた。それは、昔からの友人であり、同じ階級としてともに過ごしたことのあるテルだつた。

「よつ。ひさしぶりだねえ。君はもうここを下がつてくれていよい。この化け物は僕が殺るから。」

「だが。そんな化け物お前一人じゃ無理だ。お前一人おいていくことなんて出来るか。」

本当はそんな強気な言葉を出せるような体の状態ではないのに、大声で本音をぶつけてくる。だが、そんな優しい彼の言葉を俺は本当の意味でありがたいともうれしい思えない。だが、そうどうしても、俺は言葉を綴る。

「行けよ、テル。だからこそ、お前に援軍を呼んでもらいたい。」

「なら、俺が残つたほうが。」

「いや、僕が残らないと援軍を要請するための時間すら稼げないかもしれないからな。だから、言つことを聞いてほしい。行ってくれ。」

「

そつ言つと、まだ納得できないような顔だつたが、「すぐ戻るからな。」とだけ言い残して走つていつた。

無論、援軍が必要などというのは、テルを無事に本部まで送りつけ
るための口実で、本来、必要はない。

テルが化け物と俺との戦闘に巻き込まれないほどの距離まで移動し
たのを確認して、気合を入れる。

もう、スイッチは入つてゐるから、後は動かすだけ。

「さてつと。君には死んでもうよ。」

そう目の前にいる腕が四本生えていて、眼が六個ある人型の化け物
に告げる。

一方、東のほうは、俺がついた頃には、もう決着がついていた。こ
の国の群如きじや話にならないと思つていたから、驚く。まあ、俺
も一応、国の魔法使いであるわけだが。

だが、そこにいたのは、予想外な人物だつた。

「なんで、お前らがいるんだ・・・?ミラ、それにアリシア・・・。」

「

それは、昔魔法について手ほどきした、弟子の一人であつた。手ほ
どきなんてレベルではない。あいつらはこの人ではない力を使わな
い俺に魔法の技術は勝つてから、出て行つた。そんな優秀なやつら
なのだ。

出て行つたのが、七年前だから、それだけ成長していくてもおかしく
はないのだ。

「よつす。師。」

「お久しふりです。師匠。」

「昔に比べて、成長しているな・・・。まあ、だからこの化け物も
倒せたんだろうけど。来てるなら、言つてくれよ。わざわざ、こつ
ちに来なくても良かつたんだから。」

化け物を無傷で倒している一人。そんな姿を見て、俺はそう力なく
呟くことしか出来なかつた。

封じるべきもの

そんな穏やかな再会が行われている東の方とは違つて、西では化け物と対峙していた。

俺は、銃を構える。銃弾は計六発。そのうち、俺の自作がいくつか含まれている。中には、こいつを一撃で殺せるものもある。だが、それは最悪の事態の保険であり、使うつもりはない。いや、使えないといった方が正しいかも知れない。

それは、威力が強すぎるのだ。街ひとつは裕に吹き飛ばせるし、もしかしたら、この大陸をも消し飛ばすことが出来るかもしれないほどのものなのだ。

銃弾自体がもはやエネルギーの塊。それが、俺がたまに作る品だ。魔法を浸透させて銃弾を作るのは俺の中では当たり前なのだが、中でも、複合魔法を浸透させることに成功したものは、少ない。その数少ない貴重なやつを今回持参している。その成功したものの中でも、今回は十の魔法を複合しているものである通称神殺しの光と呼ばれるものを保持している。

一般的に見て、一つの魔法をつけることが出来るようになるのは、ベテランクラスで、二つ複合させることができるのは、それこそ天才のレベルで、三つ目以降は人間じゃ成しえない物とされている。だが、そんな表での常識とは裏腹に適当に作ったら、出来てしまつたのだ。まあ、出来れば、試射してみたかったので、この戦いで使えたら使えたで、幸運なのだが。

そんなことを考えていると、化け物が一瞬にして、目の前から消えた。だが、俺にはどこにいるのか容易に分かる。

後方、俺の真正面から左の路地にかけて、二十三度の位置か。敵を認識し、仕留めるための攻撃ポイントを定めたところで俺の体は、動き出す。足を後ろに向かつて踏み込み、体をその勢いを利用して反転させ、撃ち込む。だが、まだそこには、化け物の姿はない。

だが、あそこでターンを仕掛けてくるはずだ。速度は大したものだが、まだまだ甘い。

そうすると、予想通り現れる。向こうはそのおぞましい顔を一瞬だけ引きつらせると、それを不気味な笑みに変え、銃弾の直撃位置に当たる部分の胸に大きな穴を開ける。

曲がることの出来ない銃弾は、ただ虚空を通りすぎただけであった。「いやあ、少し驚きですねえ。まあ、予想は出来ていましたが、実際に見てみると、違うものです。まあ、でも、これで終わりなわけがないじゃないですか。」

そう言うと、通り過ぎた銃弾にかけた魔法が発動する。銃弾にかかる方向ベクトルの転換。これが、すべてを組み替える。通り過ぎて、本来当たることのない銃弾に永遠の価値を与える。

そして、魔法により、向きを変えて、なおも進み続ける銃弾は化け物の背中を射抜くルートを行く。

速度は銃弾が通り過ぎたときと同じ速度のまま。

そうして、直前にいたったとき、突然、銃弾は巨大な球体へと姿を変える。だが、それも一瞬で、すぐに、化け物を飲み込むと、圧縮され、元の銃弾ぐらいの大きさまで縮まる。

これが、第二の魔法、物質魔法だ。物質の構成、密度、体積、すべてを自由に変える魔法。そう、人には扱うことの出来ない、人であることをやめた僕が使える魔法の一つ。

そして、その銃弾形状をした化け物を圧縮したものを手に取る。これをしたのには、もちろんわけがある。化け物は本来死にはしない。

ただ、肉体が死ぬだけだ。また、その化け物の魂に見合う肉体があれば、化け物はそれに宿る。

だから、結局のところ、化け物というのはこういうふうにして、完全に封じてしまうのが一番なのだ。つまりは、封じていかない東の方は、これから数百年が過ぎた未来で、転生してくるのだ。今の時代に迷惑はからないが、先の者たちにそれを負わせるのは酷だと思

う。

だが、はつきり言って、今回の化け物に関してはそつはいかなかつた。俺の場合は別だが。だが、俺の弟子であるあいつら一人にはまだ早かつた。さすがに、あいつら一人でも封じるほどの余裕がなかったのだろう。

まあ、表面的には余裕な感じであったのだが。よく見てみると、あの世界では、余裕がなかつたのが、想像が出来る。

「さて。ここまで、攻めてきたのは、おそらく、やつらの化身だ。戦っている分には分からぬだろうが、封じてみて、調べてみると分かる。はたして、どうしたものかな。ミラ、アリシア。」

そう言つて、自宅に招きいれた二人に問いかける。

「現実では圧倒できたがな・・・。さすがに、あいつは無理だった。あれが化身だつてのかよ。かなりやばいな。」

「久々に、やばい状況まで追い詰められましたね、やつが化身だと いうのですか。一体、本体は・・・。」

「確かに。僕自身、あれが化身だつたことには正直驚かされた。そして、化身であるにもかかわらず、街は半壊、そして、城まで突破されそうになつたとなると・・・。そして、おそらく、やつらの目的は勢力調べ。僕たちはマークされたね。というわけで、これら、しばらく、僕と君たちとで行動を共にするよ。一人より、三人の方がいいだろうしね。」

「ですね。その方が安心ですし。」

「ああ、こっちも異論はない。じゃなければ、まずいしな。」

そして、窓の外を見る。見ているのは、青く青く透き通つた空。

「彼なら、どうするのだろうかね。」

對じるべきもの（後書き）

今回、作者の都合で、先週、更新が出来ませんでした。
すみません。

一応、今週から、一週間に一度のペースで再開できたります。
これからも、よろしくお願いします。

また、感想等ございましたら、よろしくお願いします。

目の前に広がる現実

「さて、マリアと一緒に逃避行というのもいいわけだが、やつらからは逃げられないだろ? なあ。マリアと親父が戦つて、ギリギリだつた相手だもんなあ。」

俺は悩んでいた。

正直なところ、国が滅びるとか、人が死ぬとかはどうでもいい。俺も一人の人間。人間はこの世界のすべて、いや、見えるもの全てを守ることさえ出来ないのだ。

出来たとしても、身の回りの人間を守ることだけ。

どんなに頑張っても、人間という枠に収まっている限り、不可能なことって言うのが付きまとつてくる。

だからこそ、人は出来ることから始めるのだ。

「まあ、とりあえずは防御一方かなあ。素直に敵に突っ込んでいくような状況じゃないし、俺は救世主とかそこらへんじゃないからな。」

「クッスーはそれでいいの?」

「それでいいも何も、俺にはこれしか出来ないんだ。だから、仕方がないんだよ。人は弱い。目の前のものさえきちんと守れないほどにね。そう、俺はそれをあの世界で何度も経験した。殺されて、マリアの運命を変えられずに死ぬなんていうことをさ。」

そう言って、窓の外に見えた雲が出てきて、暗くなり始めた空を見る。それは、俺の心にはびこるあの頃の無念といつたものを映し出しているようにも見えた。

そう、あの世界は俺に、俺の無力さ、そして、人の弱さという現実をたたきつけた。それが、良かつたのか悪かつたのかは分からなし、答えを知るものなんていない。

「とは言つたものの、この世界でもう、安全なところもなさそうだし、目をつけられた可能性があるとなると、かなりやばいだろ? なあ。」

「

これが現実。なら、俺には俺の役割がある。この現実に対しての。だが、まだだ。まだその段階ではない。動き出すことは速すぎる。あせつては駄目だ。

あせらず、少しづつこの世界に対して、いや、この壊れた世界の現実に対しても向き合わなければならないのだ。

「とりあえず、ここは俺たちで防衛する。ここに、結界をしく。それで、動くべきときまでの時間を少しでも稼ぐ。これから、忙しくなるぞ。」

「ええ、そうしますよ。」

結界程度で防げる相手とも思えはしない。所詮、人が作りあえたものだ。人は一定のラインを超えることが出来ない。だが、この世界に誕生した化け物どもはそれを超えることが出来る。だからこそ、恐ろしい。

どうしても、俺は臆したりはしない。もう、あの世界のようになんて失敗が許されはしないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8968v/>

メフィストの夢

2011年10月9日22時23分発行